

大胡町誌



題字

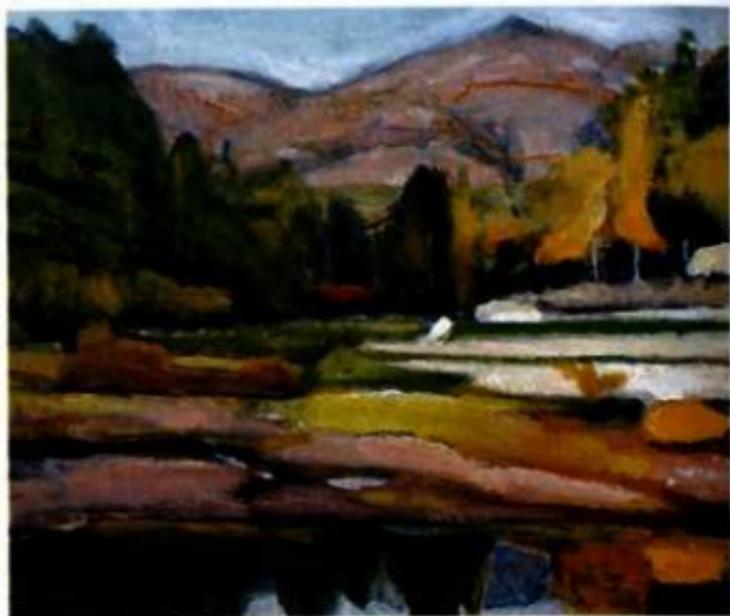
大胡町長 島村松次氏



大胡城跡の森と赤城山

堀越古墳

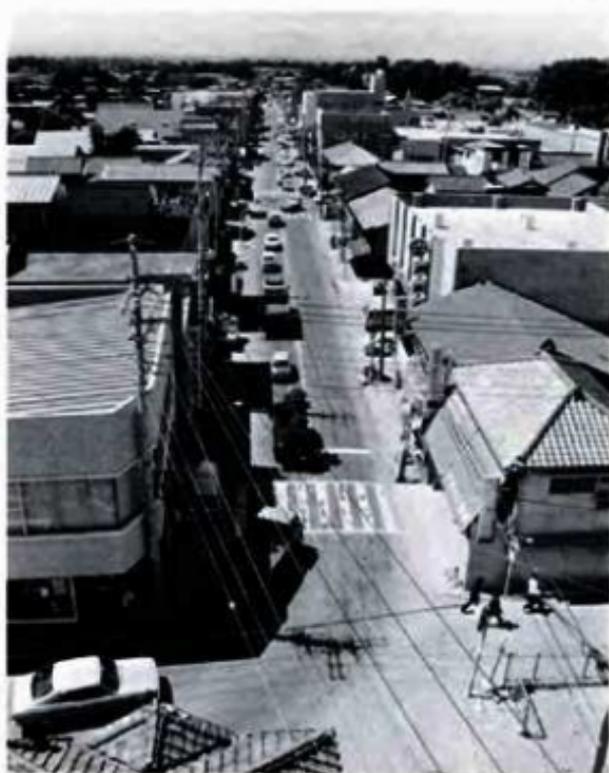




ふるさと 一橋堀角次郎画伯一



五十年前の大胡町中宿



現在の  
大胡町中宿



大胡町役場



大胡町水道浄水場



町営プール



元禄時代の大胡城〈部分〉



大胡町中心部



大胡城跡



伝大胡太郎墓跡



牧野氏墓地



## 序

大胡町長 嶋村 松次

上毛三山の雄峯赤城を背にしたわが大胡町には赤城山南麓の中心都市としての長い歴史がある。それぞれの時代に生きた先輩たちの活躍の跡をふみしめて、これからの新しい歴史を形成している我々は、地味な中に懸命に生きた先輩の長所を生かして前進しなければならぬ。これら先輩たちの築いた生活は時代の波の中で展開してきた。そうした間に汗をたくわえ、今、我々の知り得ることであり、忘却の彼方に去ってしまったであろう多くのことに思いを馳せる。いまに遺された文化の種々相の中から、大胡町誌として記録し、伝えていくものは我々の生活の基盤となつていゝものである。

文化財は現実の金銭を生むものではないが、この大胡町に住む我々のこころのよりどころであり誇となるものである。わが生活する大胡町である。この土地はつまらないところではない。すぐれた文化の花咲く地である。これからの人材の生れるべき地なのである。

大胡町誌編纂の事業は長い懸案であった。都台で中断されていた時もあったが、時を得て、ここに完成の機会を迎えることができて喜びにたえない。歴史は刻々とつくりられ、絶えることはないが、修史事業は難く、短日月になし得ない。明治四十三年に活字印刷で発行した『大胡町郷土誌』も既に一・二冊のきこり本となり、見ることを得ない。その間に小学校教材として企画されたこともあったようであるが町民のものとなり得なかつた。こうした経過の中で

本書が成った。

編集執筆にあたった方々は、大胡町に住む研究家を中心にチームを組んでいただいた。平常のお仕事の多忙の上に本書のような地味な調査研究から執筆までご労苦をおかけしました。心から感謝いたしております。特に編集責任者の丸山知良先生には面倒なお願いを致しましたが、完成を迎えることができて有難くお礼申しあげます。先生には群馬県議会図書室長として専門図書館界の表彰をうけられ、重ねて昨年は群馬県社会教育功労者表彰をうけられました。記して敬意を表すると共に大胡町誌の原稿完成と期を共にしたことを喜んでいる。

われわれは更に本書の上に現状の歴史と未来の歴史を積み重ね大胡町の発展をねがっている。すばらしい大胡町とするためには、過去の発展の跡を認識し、前進しなければならぬ。

『大胡町誌』。いま本書を大胡町民の飛躍へのあかしとしよう。

本書の完成までにご協力をいただき、ご指導願った各位に謝意を表すると共に、印刷を引受けられた朝日印刷工業株式会社 の優秀な技術を駆使しての熱意に感謝申しあげます。

無辞をつらねて喜びのことばとしたい。

昭和五十一年三月一日

## 大胡町誌の発刊を祝す

近藤 義雄

今回大胡町誌が完成するので、私に序文を書くようにと要請され、その任に非ずとご辞退したが、畏友丸山知良氏の推めもあり、また、かつて県の文化財保護課に勤務していたころ、度々大胡城跡の問題についてお世話になったこともあるので、拙文を省みず記すこととした。

大胡町は、私の知る限りでは、近世前橋城のできるまでは、赤城南麓の中心地として栄えた土地であり特に中世初期からの大胡氏の活動は、上泉は勿論、駒形付近までその勢力下にあったようである。なかでも大胡実秀父子は、法然上人に帰依し、早くに浄土信仰を上野に伝えている。また、信仰上の疑問が起きた際は、度々小屋原の蓮性に托して教えを乞い、法然上人からは長文の手紙を与えられている。そのような関係からか、金沢文庫所蔵の「往生伝」にも大胡氏の名が見え、大胡町は群馬の中世信仰史上極めて重要な土地であったと思われる。

なお、最近石造文化財の調査をすすめてみると、大胡町とその周辺には貴重なものが多いのに驚いている。なかでも、宝塔・輪廻塔・板碑・石仏など立派なものが揃っている。

このように、大胡町には城跡以外にも優れた文化財が多く、県内の歴史研究者にとっては極めて関心の深い土地であるにも拘わらず、従来その歴史を詳細に記したものがなかった。また最近の町村誌の出版状況をみると、赤城南西では宮城・粕川・新里が相ついで村誌を完成しているので、それらの村々の中心となってきた大胡町のみが残された

と思われていたが、幸いにも今回永年研究を続けられていた方々により、立派な大胡町誌が完成されるので同慶にたえない。

更に考えられることは、最近の出版界が競って名著といわれる歴史書を復刻していることと、歴史関係の出版が多いことである。これは、歴史への関心が高まり、大衆化の傾向があることと考えられるが、その背景には、人々が歴史に何かを学ぼうとするからである。歴史はたんに死んだ過去の記録ではない。未来への道しるべとして、この激動の世の生きかたを歴史に学ぼうとするからである。大胡町周辺も次第に都市化が進み大きく変容してきている。このような時に町誌の完成されたことは、未来の大胡町づくりに大いに役立つことと思われる。例えば、戦後大胡町を襲った大水害にしても、既に多くの人は忘れかけていると思う。天災は忘れかけたころやってくるともいう。今後再び大胡町に水害がないと誰が断言できようか。そのためにも、苦い水害の歴史を後世に伝え、その護りを考えて町や周辺の開発は進められねばならないであろう。このように町誌は最も身近かな教訓書であり、その完成は意義深い。終りに、このような意義ある町誌を完成された町当局及び執筆にあたった方々のご労苦を偲び、より多くの方々が永くご活用されることを祈り、発刊を祝うこととする。

昭和五十一年三月一日

(元群馬県教委文化財保護課長、前橋市立図書館長)

## 丸山 知良

勢多郡大胡町という土地は良きにつけ、悪しきにつけ、満三十五年間も住み着いていた町である。旧制中学校（群馬県立前橋中学校）の二年生の春からこの町に住み、昨年の春にいろいろな都合により前橋市へ戻ってくるまでの人生の大半を過したところなのである。こうした所の町誌の編纂事業に携さわることができたのも良いめぐり合せといふことができる。有難いことだと思っている。

大胡町に住んでいたことは、私にとって地方史への関心を持ち始める一つの端緒にもなったのであろう。朝夕に眺める赤城山も大胡町から見た赤城を本当の赤城と思ひ、そこから流れ出る溪流を自然の景観として心に刻んで今に至ったのである。大胡城跡の東で荒砥川を堰き止め、大胡町国民学校の水泳教室とした昔が私の教員生活の最初の頃だった。その頃の景色はもうなくなってしまった。歴史はそうした景色を復元することも必要であらうけれど、本書は何程のことをなし得たであらうか。

大胡駅から降りてくると馬頭観音の前を通る。その上が神明さまの跡地で「公園」とよばれているところである。なんの為なのか、その昔は八角堂があった。明治四十三年に前橋市で開かれた共進会の建物の一つだといわれるが、虹の如く消え去ってしまった。そんなことまで思い出されるのである。

いま、それぞれの人の経験の中に刻み込まれた大胡町が、それぞれの人により掘り起されれば幸である。記録され

たものと記憶されたものが織りなして本書となった。

執筆者は私の親しい友人ばかりである。大胡町から正式に依頼を受けて適任者をお願いしてから五・六年になろう。それ以前に山口町長の企画で予備的調査を実施しながら中断していた時期があったけれど、長い間のご苦害に感謝しあげる。少しばかり経験が長いというか、年長らしいようなことで編纂責任者を引受けさせられた由縁も、これからは楽しいことのみが記憶されることになろう。

古い城下町の落付いたたすまいは長い歳月と幕末の数度の火災等でなくなってしまったのであろう。しかし、ここには別の上州田園の桑畑の涯につづく集落の乾いた抒情があるのではななかりか。大前田栄五郎が晩年に住んでいた町にふさわしい枯淡の味を見出せるであらうか。

いま、時代の変化の中で変貌する田園の頂点に立っている大胡町はひところの人口安定の時期から一転して増加の一途をたどっている。小学校も中学校も教室を増築する必要に迫られている。生活環境の改善も、文化の進展も、交通路の輻輳に対応する方策にも飛躍の刻がきたのである。

本書が、ここに住む人々に過去から未来への展望を考える一つの資料たり得れば目的を達したといえることができるであらう。そして、更によりよき生活のために――。

昭和五十一年三月十二日

# 目次

序	大胡町長	嶋村松次
大胡町誌の発刊を祝す	近藤義雄	

緒	丸山知良
---	------

## 口絵

## わが大胡町

第一章 赤城山南面の 中心都市	二
第二章 大字小字	六
第三章 人口	八
第一節 人口と面積	八
第二節 人口の推移	八
第三節 大字別人口	三
第四節 年齢別人口	六
第五節 労働力人口	六
第六節 産業別人口	五
第七節 世帯数	六
第四章 集落	元
第一節 集落の分布	元
第二節 民家および防風林	五

## 自然

第一章 位置	三
第二章 地形・地質	四
第一節 先第四系(基盤岩層)	四
第二節 第四系	七
(一) 関東ローム層	七
(二) 火砕流堆積物	五
第三節 地形	七
(一) 地勢	七
(二) 台地と谷	七
第四節 大胡町の自然史	六

## 第三章 土壌と土地利用

第一節 土壌	六
第二節 土地利用	六
第四章 水系	六
第一節 河川	六
第二節 池沼	六
第三節 地下水	六
第五章 気象	七
第一節 気温	七
第二節 湿度と降水量	七
第六章 生物	七
第一節 動物	七
第二節 植物	七

## 歴史

第一章 古代	七
第一節 先石器時代	七
第二節 縄文時代	九
第三節 弥生時代	七
第四節 古墳時代	三
第五節 仏教文化	三
第二章 中世	四
第一節 大胡郷	四

第二節	大胡氏……………	二五
第三節	大胡氏の信仰生活……………	二六
第四節	大胡郷内野中村……………	二七
第五節	鹿島神宮文書の大胡氏……………	二八
第六節	大胡城の構造……………	二九
第七節	大胡城越中屋敷跡発掘調査……………	三〇
第八節	牛込の赤城神社と宗参寺……………	三一
第九節	大胡城に唐城した益田氏……………	三二
第十節	大胡城の支城……………	三三
第十一節	義林寺山門―その調査の報告……………	三四
第十二節	茂木古墓……………	三五
第十三節	史料……………	三六
第十四節	中世文化財……………	三七
第十五節	宿用水の起源……………	三八
第十六節	大胡西領の草分け……………	三九
第三章	近世……………	四〇
第一節	牧野氏と酒井氏の支配……………	四一

## 町政

第二節	町や村のありさま……………	四二
村明細帳……………	四三	
第三節	村のくらし……………	四四
第四節	検地と年貢……………	四五
第五節	産業と交通、大胡町のようす……………	四六
第六節	宗教と学問、文化人……………	四七
第七節	幕末の村の変化……………	四八
歴史の断片……………	四九	
第一章	大胡町の変遷……………	五〇
第一節	推新当時の知行と村石高……………	五一
第二節	名主、区戸長時代……………	五二
第三節	町村長時代……………	五三
第二章	町役場の組織……………	五四
第三章	町役場職員……………	五五
第一節	歴代村・町長……………	五六
第二節	歴代助役……………	五七
第三節	歴代収入役……………	五八
第四節	町役場書記……………	五九
第四章	町議会……………	六〇

第一節	主な議事内容……………	六一
第二節	村会議員、町議会議員……………	六二
第三節	議会議長……………	六三
第五章	県議会議員、郡会議員……………	六四
第六節	財政……………	六五
第一節	一般会計歳入歳出決算……………	六六
第二節	一般会計各款別歳入歳出……………	六七
第七章	主な役職……………	六八
第一節	区長……………	六九
第二節	選挙管理委員……………	七〇
第三節	監査委員……………	七一
第四節	固定資産評価審査委員……………	七二
第五節	公平委員……………	七三
第六節	農地委員(農業委員)……………	七四
第八章	産業……………	七五
第一章	農業……………	七六
第一節	耕地と農家……………	七七

第二節	農業生産	三〇三
第三節	農業水利	三〇一
第四節	養蚕・製糸	三〇一
第五節	畜産	三〇八
第六節	大正二年の大胡町勸業方針	三〇八
第七節	農業組合	三〇二
第八節	開拓	三〇六
第二章	林業	三〇九
第一節	官林	三〇九
第二節	私林と国有林の上げ	三〇六
第三節	役場資料でみる林野	三〇〇
第四節	共有林	三〇七
第五節	赤城山興業組合	三〇七
第六節	大胡町森林組合	三〇四
第七節	鉄炮	三〇七
第三章	水産業	三〇三
第一節	概要	三〇一
第二節	千貫沼の養魚	三〇三
第三節	石井重太郎の養鱈	三〇七
付	乳用牛育成牧場	
第四章	商工業	三〇〇
第一節	概要	三〇〇

第二節	大胡町商工会	三〇五
第三節	商業	三〇五
第四節	金融業	三〇五
第五章	工業	三〇九
第一節	概要	三〇九
第二節	醸造業	三〇九
第三節	製麦製粉	三〇九
第四節	繊維関係	三〇九
第五節	その他の工産物	三〇九
第六節	賃銀	三〇九
第七節	現在の工業	三〇九
交通・通信		
あらまし		三〇九
第一章	交通	三〇九
第一節	道路	三〇九
第二節	宿場	三〇九
第三節	助郷	三〇九
第四節	道しるべ	三〇九
第五節	旅人たち	三〇九
第二章	今の交通	三〇〇
第一節	道路・橋梁	三〇〇

第二節	交通機関	三〇六
第三章	通信と電灯	三〇二
第一節	大胡郵便局	三〇二
第二節	大胡電話交換局	三〇二
第三節	有線放送電話	三〇二
第四節	ラジオ・テレビ	三〇二
第五節	電灯	三〇二
保健・福祉		
第一章	保健・福祉	三〇六
第一節	伝染病隔離病舎	三〇六
第二節	大胡町保健衛生推進協議会	三〇六
第三節	衛生統計	三〇二
第四節	国民健康保険	三〇二
一	年度別世帯数被保険者数調	三〇二
二	年度別予算額・決算額調	三〇二
三	年度別保険医療費納費の調	三〇二
四	国保完納納税組合表彰について	三〇二

五 大胡町国民健康保険協

議会委員…………… 七六

六 保健婦活動…………… 七六

第五節 国民年金…………… 七六

第六節 社会福祉・更生施設…………… 七六

一 教護施設「赤城少年院」…………… 七六

二 養護施設「少年の家」…………… 七六

三 養護盲老人ホーム「明光園」…………… 七六

四 大胡町社会福祉センター…………… 七六

第七節 福祉団体…………… 七六

第八節 町の福祉団体…………… 七六

一 民生委員の活動…………… 七六

二 大胡町老人クラブ…………… 七六

三 大胡町遺族会…………… 七六

第九節 明治初年の医師…………… 七六

第十節 海外移住…………… 七六

第二章 水道…………… 七六

第一節 中央簡易水道…………… 七六

第二節 西部簡易水道…………… 七六

第三節 大胡町上水道…………… 七六

軍事…………… 七六

第一章 戦争と町…………… 七六

第一節 概要…………… 七六

第二節 徴兵…………… 七六

第三節 陸軍特別大演習と大胡町…………… 七六

第四節 防空演習…………… 七六

第五節 大東亜戦争…………… 七六

第六節 戦後の生活…………… 七六

第七節 戦地からの便り…………… 七六

第八節 大胡町傷痍軍人会…………… 七六

第二章 応召と戦死者…………… 七六

第一節 応召…………… 七六

一 歴代帝國在郷軍人会大胡町分会分会長、副会長…………… 七六

二 日露戦争従軍者…………… 七六

三 日露戦争軍馬応徴者…………… 七六

四 大東亜戦争応召者…………… 七六

第二節 戦死者…………… 七六

第三節 終戦詔勅…………… 七六

災害・警備…………… 七六

第一章 災害…………… 七六

第一節 大胡町災害誌…………… 七六

第二章 近・現代の災害…………… 七六

第一節 警察・消防…………… 七六

第二節 大胡町消防団…………… 七六

教育…………… 七六

第一章 学制以前の教育…………… 七六

第一節 求智堂…………… 七六

第二節 寺子屋…………… 七六

第二章 大胡小学校…………… 七六

第一節 草創期…………… 七六

第二節 学区改正と校名変更…………… 七六

第三節 大正期…………… 七六

第四節 昭和期…………… 七六

第五節 落穂ひろい…………… 七六

第六節 学校長一覧…………… 七六

第七節 卒業者数各年別一覧表…………… 七六

第八節 大胡小PTA…………… 七六

第三章 流産小学校…………… 七六

第一節 明治期…………… 七六

第二節 大正期以降…………… 七六

第三節 沿革誌から…………… 七六

第四節 滝窪小PTA…………… 九〇

第三節 弓道その他…………… 九〇八

第五節 映画・演劇…………… 二〇六

第二章 歴史・生徒数…………… 九三

第二章 活躍した人たち…………… 九〇九

第六節 隨筆・紀行…………… 二〇七

第三章 大胡中PTA…………… 九四

第三章 社会体育…………… 九一一

第七節 漢詩…………… 二〇八

第五章 大胡幼稚園…………… 九六

第四章 学校体育…………… 九一八

第一章 神社…………… 二〇三

第一節 大胡幼稚園…………… 九六

第二節 オール大胡野球クラブ…………… 九二五

第二章 寺院…………… 二〇七

第二節 大胡町立大胡幼稚園…………… 九七

第三節 プ…………… 九二七

第三章 大胡神社…………… 二〇四

第三節 大胡第一幼稚園…………… 九八

第一章 美術…………… 九二二

第四章 大胡神社…………… 二〇五

第六章 教育委員会…………… 一〇〇

第一節 横堀角次郎画伯「わが回想の記」私の交…………… 九二九

第五章 大胡横善会…………… 二〇九

第七章 社会教育諸団体とその活動…………… 一〇一

第二節 友記録V…………… 九三〇

第六章 大胡横善会…………… 二一〇

第一節 青年会…………… 一〇二

第二章 大胡美術クラブ…………… 九三六

第七章 大胡横善会…………… 二一一

第二節 婦人会…………… 一〇六

第一節 江戸時代の狂歌一赤城山南麓に住んだ人…………… 九三八

第八章 大胡横善会…………… 二一二

第三節 子ども会育成会…………… 一〇七

第二節 文学…………… 九四〇

第九章 大胡横善会…………… 二一三

第四節 大胡町むつみ会…………… 一〇八

第三節 大胡美術クラブ…………… 九四六

第十章 大胡横善会…………… 二一四

第五節 その他の教育団体…………… 一〇九

第一節 城山南麓に住んだ人…………… 九四八

第十一章 大胡横善会…………… 二一五

第一章 武道…………… 九〇

第二節 短歌…………… 九〇〇

第十二章 大胡横善会…………… 二一六

第二章 柔道…………… 九〇

第三節 俳句…………… 九〇四

第十三章 大胡横善会…………… 二一七

第三章 剣道…………… 九〇

第四節 文学運動…………… 九〇六

第十四章 大胡横善会…………… 二一八

第二章 武道…………… 九〇

第五節 児童文学の品川蝶志智…………… 九〇八

第十五章 大胡横善会…………… 二一九

第一節 柔道…………… 九〇

第六節 俳句…………… 九一四

第十六章 大胡横善会…………… 二二〇

第二節 剣道…………… 九〇

第七節 漢詩…………… 九二〇

第十七章 大胡横善会…………… 二二一

第三章 剣道…………… 九〇

第八節 漢詩…………… 九二六

第十八章 大胡横善会…………… 二二二

第二章 武道…………… 九〇

第九節 漢詩…………… 九三二

第十九章 大胡横善会…………… 二二三

第三章 剣道…………… 九〇

第十節 漢詩…………… 九三八

第二十章 大胡横善会…………… 二二四

第二章 武道…………… 九〇

第十一節 漢詩…………… 九四四

第二十一章 大胡横善会…………… 二二五

第三章 剣道…………… 九〇

第十二節 漢詩…………… 九五〇

第二十二章 大胡横善会…………… 二二六

第二章 武道…………… 九〇

第十三節 漢詩…………… 九五六

第二十三章 大胡横善会…………… 二二七

第三章 剣道…………… 九〇

第十四節 漢詩…………… 九六二

第二十四章 大胡横善会…………… 二二八

第二章 武道…………… 九〇

第十五節 漢詩…………… 九六八

第二十五章 大胡横善会…………… 二二九

第三章 剣道…………… 九〇

第十六節 漢詩…………… 九七四

第二十六章 大胡横善会…………… 二三〇

第二章 武道…………… 九〇

第十七節 漢詩…………… 九八〇

第二十七章 大胡横善会…………… 二三一

第三章 剣道…………… 九〇

第十八節 漢詩…………… 九八六

第二十八章 大胡横善会…………… 二三二

第三章 社会生活……………二五

第一節 族制……………二五

第二節 村制……………二五

第四章 俗信……………二五

第一節 禁忌……………二五

第二節 まじない……………二七

第五章 信仰……………二七

第一節 むらの神々……………二七

第二節 むらの仏様……………二八

第三節 伊勢参り……………二八

第四節 信仰的な講……………二八

第五節 その他……………二九

第六章 民俗知識……………二九

第一節 仕事の一人前……………二九

第二節 単位……………二九

第七章 人の一生……………二九

第一節 産育……………二九

第二節 婚礼と嫁・年令集團……………二九

第三節 葬制……………二九

第八章 年中行事……………二九

第一節 一月……………二九

第二節 二月……………二九

第三節 三月……………二九

……………二九

第四節 四月……………二七

第五節 五月……………二八

第六節 旧六月……………二九

第七節 七月……………二九

第八節 旧八月……………二九

第九節 旧九月……………二九

第十節 十月・旧十月……………二九

第十一節 十一月……………二九

第十二節 十二月……………二九

第九章 口頭伝承……………二九

第一節 昔話……………二九

第二節 伝説……………二九

第三節 民謡……………二九

跋……………二九

あとがき……………二九

口絵写真……………二九

題字……………二九

須永善四郎……………二九

松本 浩一……………二九

島田 幸一……………二九

鳴村 松次……………二九

字事関係職員録(明治三八年)から……………二六

南条七郎兵衛平時光、豊南洞伝……………二六

御大典を祝ふ、コスモス会……………二六

短歌俳句会……………二六

松の樹大忌……………二六

大前田栄五郎の葬式……………二六

大胡町医師……………二六

薬品販売権利申請……………二六

普化宗巻物本則……………二六

採花帖(町誌余録)……………二六

上毛古墳総覧から……………二六

田島栄五伝……………二六

大胡小学校開設当時の記録……………二六

豊園覚堂頌……………二六

大胡町関係町村誌(明治十年)……………二六

梵鐘銘……………二六

大胡町誌

わが大胡町

## 第一章 赤城山南面の中心都市



荒砥川と赤城山

『すそのは長し赤城山』（上毛かるた）の赤城山は広い地域から眺められる八お山Vなので、古くから多くの人の心の寄りどころとして自然神として崇敬されてきた。この山の南面の中心地がわが大胡町である。

勢多郡の中心都市として活躍してきたのである。古くは国指定重要文化財の山の上碑（高崎市）にある「大鬼臣（おおこのおみ）」の居住地と考えられ、その文化の高さを偲ばせ、中世の大胡城が多くの支城を各地に張り文武両道にすぐれた大胡氏を居城させてきた。江戸時代初期の牧野氏が越後国長岡藩に転封すると、ややその位置が弱まるが赤城山南面の交通・経済の中心的存在として、信頼される町として現在にまで及んでいる。

東に粕川村、北に宮城村、富士見村、西と南は前橋市に接している面積一九・七一平方軒、人口約一万五百人世帯二千三百余戸の町である。

産業別、就業者数は次の通りである。

農業 二二九三 建設業 三〇六



大胡の町並み

卸小売	七四七	運輸通信	一六六
サービス業	六六一	公務	一三四
製造業	九一八	その他	一四一

(昭和45年)

その於大の農業においても七九・八%が兼業農家で、専業農家は二〇%に過ぎない。都市周辺の業種の多様化と農業変貌の方向がみられる。

町役場は大字堀越一一一三番地。職員は事務局四十八、委員会を含めて全員八十四名。議会議員は定員二十二名で昭和五〇年に改選された。町長嶋村松次、助役須永善四郎、収入役横山良三、教育長北条教善、議長北原鶴吉、副議長北爪健次。

教育機関は大胡町立大胡幼稚園、大胡小学校、滝窪小学校、同金丸分校、大胡中学校、県立前橋東商業高校などがある。社会福祉施設として愛誠会少年の家や明光園(盲老人ホーム)があり、法務省の赤城少年院がある。また、大胡警察署や群馬食糧事務所大胡支所などの官庁があり、金融機関に大栄信用金庫の本店や群馬銀行大胡支店などがある。

大胡町は歴史の町でもある。旧石器時代の三ツ屋遺跡から堀越古墳の切石積石室、足軽町住居跡(古墳時代)など。城下町として発達した町だけに県指定史跡大胡城を始めとして横沢供養塔や大胡太郎墓などの中世・石造美術品もすぐれたものがある。

宿場町は大正時代まで中央に水路をもっていた。ここに馬市が立ち三八の六斎市と共に四方から人びとが集まった。裏日光街道という道路を軸に米野、山上、伊勢崎、前橋道や赤城道が古くからあった。

現在の交通機関には、○上毛電鉄（中央前橋―西桐生）○東武バス（伊勢崎―忠治温泉）○群馬バス（大胡―渋川）○上電バス（前橋―大胡々、物ノ木沼など）などがある。近時、自家用車も増大し朝夕のラッシュには道路は輻輳し長い列をなす。



大胡城・林橋跡



大胡城・乾燥跡



明治18年頃の地図

1—北緯 $36^{\circ}26'$  東経 $139^{\circ}12'$

2—地形 大胡町の最高点 海拔600m(ウズラ山) 大胡町の最低点 海拔145m 大胡小学校  
海拔 100m 大胡中学校海拔 163m

## 第二章 大字小字

明治十四年「地理雑件」(小字名調査)によって示す。

◎大字 大胡、上大屋、堀越、滝窪、茂木、横沢、河原浜、樋越

◎小字

○大胡町 町屋敷、向田、ハツケ峯、一本松、谷津、上宮岡、下宮岡、上山下、下山下、沼下、中宮岡

○堀越村 西今、東今、新宿、勝山、甲二本松、乙二本松、丙二本松、丁二本松、甲真木、乙真木、丙真木、新畑、

西柳、東柳、永閑寺、房岡、小此木、五十山、寺窪、上ノ町、殿町(横町)甲岡替戸、乙岡替戸(本郷)、丙岡替

戸、甲薬師(丸山)、乙薬師、中通、水押、芝山、甲西尾引、乙西尾引、甲東尾引、乙東尾引、西一丁田、並木、甲諏

訪、乙諏訪、丙諏訪、丁諏訪、甲終山(正次替戸)、乙終山、正次、利根、西白、東白、甲一丁田、乙一丁田、

丙一丁田、丁一丁田

○茂木村 上ノ町(上ノ町)、八幡、嵩(嵩)、町下、稲荷前、天神(新山)、天神風呂、柳沢、房岡、経塚、西小路(西

小路)、東小路(東小路)、佐賀、向川原、中川原、上ノ山、宮ノ前、小林、諏訪東、諏訪前(三ツ屋)、上漆田、山

神、下漆田、八反田、山ノ前(本郷)、前川原、大畑、稲荷窪、大日、横沢、蟹沢、中峯、北房岡、西久保、大道下

(足軽町)、大道上、浦山、米野道下、米野道上、二本松、真木

○河原濱村 白欠、小修(寛越)、親音前(大笠)、親音(薬師)、焼地蔵(五輪畑、石橋)、四ッ谷(坊主山)、二ッ塚

(畑島)、内野(山下)、大替戸(大島橋)、小屋敷(山下、祢カラミ)、高岡、五反田(地藏河原)、根小屋(城)、向屋敷

(地藏下)、焼場下(車坂)、一本松、山上道上(庚塚)、ハツカ峯(行人坂)、西浦(地藏谷)、新地(腰之腰)、中山、日光道、東(稻荷六)、浅見(浅見窪)、向浅見、清水、大東

○樋越村 東原、能万寺、大塚山、泥野木、六反畑(原)、東浅見、上浅見、西浅見、天王山、西久保、西前沖、東前沖、五替戸、横輪替戸、熊穴

○上大屋村 樋越界、ハツカ峯、中山、大峯、千ヶ、前山、中組、天王山、下組、向山、諏訪山、壳堀、東山

○滝窪村 前滝、前沢、西滝、平替戸、荷牛、天ノ替戸、福替戸、西原、宮窪、窪替戸(川窪)、後原、西天神、東天神、房替戸、田ノ上、石倉、上寺沢、中丸、細田、下寺沢、御堂窪、高橋、久根ノ下、吹上(前野)、西新井、道玄坂、新井原、黒沢、白草、アラキ

○横沢村 柴崎、下田、前原、窪替戸、西ノ原、内手、中田、向山、向田、宇持、上野替戸、四反田、五反田、新屋敷、大塚、出窪、元薬師、芳山、一木峯、八幡、沼田、堂城替戸、前野、新井

## 第三章 人口

### 第一節 人口と面積

大胡町の人口は昭和四十六年十月一日現在、九、八六九人で、群馬県人口の〇・六%を占め、県下七十市町村のうち第三十六位である。男子は四、八四七人、女子は五、〇二二人であり、女子の方が一七五人多い。男女の割合は、女子百人に対して、男子は九六・五人となっている。この割合を県平均九五・一人とくらべると、大胡町の方が県平均よりもやや男子が多い割合になっている。

大胡町の面積は一九・七一平方キロメートルで、群馬県総面積の〇・三%を占め、県下七十市町村のうち第六十三位である。従って、一平方キロメートル当りの人口密度は高く、五〇〇・七人を示している。これは県平均の二六三・七人を大幅にうわまわり、県下七十市町村のうち第十七位に位置している。また、勢多郡の町村のなかでは最も高い人口密度である。大胡町のなかでも人口密度が高いのは、大字大胡である。

### 第二節 人口の推移

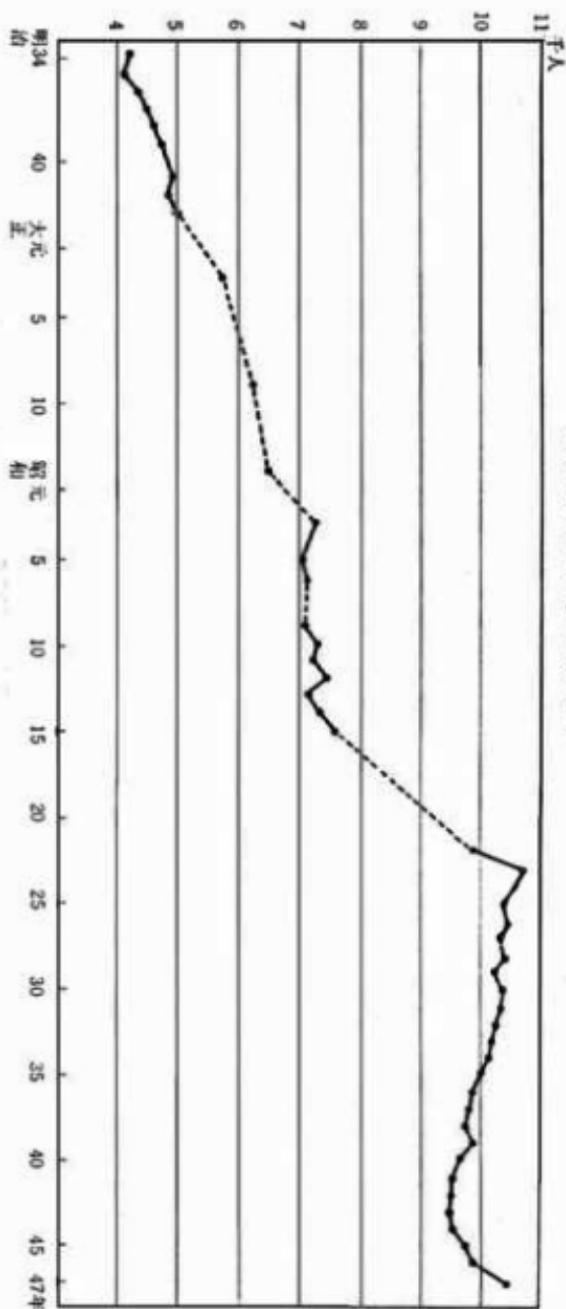
明治三十七年から現在に至るまでの人口のうつりかわりは、次に示す通りである。約七十年間にわたる人口の推移は、漸増の形をとっており、総数五、五〇〇人余り、約二・二倍の増加である。

人口増加が特に著しいのは、第二次世界大戦の前後である。この他に増加が目立つのは、明治の末期と昭和の初期

である。大胡町の人口が最も多かったのは、調査した資料によると、昭和二十三年で、一〇、七四〇人である。その後、人口は次第に減少したが、昭和四十四年以降、再び増加している。

世帯数は、この七十年間に一、六〇〇世帯ほど増加し、三・四倍に達している。人口にくらべて世帯数の増加が著しい。このことは、一世帯当りの人数にも関係し、明治の末期には一世帯当り七・一八人であったのが、最近では四・四一人と非常に少なくなっている。つまり、少人数の世帯が、増加してきたことである。昭和四十年から四十五

大胡町の人口のつりかわり



年までの入居者について、その前住地をみると、大胡町内が七四人(四一・二%)、群馬県内が八三八人(四六・四%)、県外や外国が二二三人(二二・四%)となっている。つまり、大胡町以外からの入居者が多い傾向にある。

## 人口の推移

年	世帯数	人口総数	男	女	人口密度 (平方キロ)	一世帯当り 人数
明治三三	六二〇	三、〇六〇	一、八七七	一、一八三	一一五・三	六・八一
〃 三四	六三一	四、二四九	二、〇六七	二、一八三	一三六・七	六・九〇
〃 三五	六三七	四、二〇七	二、〇五一	二、一五六	一四〇・五	六・九三
〃 三六	六五二	四、三三八	二、一一〇	二、二二八	一四九・三	七・一八
〃 三七	六五二	四、四四一	二、一三四	二、三〇七	一五三・七	七・一八
〃 三八	六七六	四、六六五	二、二四〇	二、四二一	一五九・二	七・二二
〃 三九	六八四	四、七四〇	二、三〇〇	二、四四〇	一六三・七	七・二二
〃 四一	六八四	四、九一三	二、三九一	二、五二二	一六八・二	七・二二
〃 四二	六八四	四、九一三	二、三九一	二、五二二	一六八・二	七・二二
〃 四三	六九三	五、〇〇一	二、四四二	二、五五七	一七二・七	七・二二
大正 三	八三〇	五、七二一	二、八二四	二、八九七	一八〇・三	六・八九
〃 九	一、一三四	六、一四七	三、〇八三	三、〇六四	一九〇・三	六・八九
〃 一四	一、一九〇	六、四三九	三、二四六	三、一九三	一九〇・三	六・八九
昭和 三	一、一八九	七、二五八	三、六五五	三、六〇四	二一〇・七	六・一〇
〃 五	一、二七九	七、〇三四	三、五〇〇	三、五三四	二〇六・七	五・四一
〃 六	一、二四二	七、一三二	三、五六四	三、五六八	二〇六・七	五・四一
〃 九	一、二五九	七、〇〇九	三、五〇七	三、五〇二	二〇六・七	五・四一
〃 一〇	一、三一八	七、三一七	三、六六六	三、六六二	二一〇・七	五・四一
〃 一一	一、二七二	七、二五一	三、五八九	三、六六二	二一〇・七	五・四一



〃	四三	二、〇四三	九、五一三	四、七〇三	四、八一〇	四八二・六	四・六六
〃	四四	二、〇八八	九、六五〇	四、七七六	四、八七四	四八九・六	四・六二
〃	四五	二、一八六	九、七三三	四、七九〇	四、九四三	四九三・八	四・四二
〃	四六	二、二三七	九、八六九	四、八四七	五、〇二二	五〇〇・七	四・四一
〃	四七	二、三三五	一〇、四二五	五、一五〇	五、二七五	五二八・九	四・四三
〃	四八	二、四一三	一〇、三〇九	五、〇九九	五、二二〇	五三三・〇	四・二七
〃	四九	二、四九〇	一〇、五二九	五、二二六	五、三三三	五三四・二	四・二三

## 第三節 大字別人口

大字別の人口をみると、昭和四十五年現在、最も多いのは堀越（二、二八八人）で、以下大胡（一、七二四人）、茂木・河原浜・滝窪・樋越・横沢・金丸・上大屋の順である。これを、一平方キロメートル当りの人口密度からみると、二、九七二・四人を示す大胡が最も高い数字を示している。以下、茂木・河原浜・上大屋・堀越・滝窪・樋越・横沢・金丸の順である。

明治四十三年から昭和四十五年までの六十年間において、人口増加の割合が最も高いのは、堀越であり、二・六倍を示している。次いで茂木（一・五倍）、滝窪・上大屋の順となっている。また、昭和十四年以降の約三十年間に人口増加の割合が著しいのは、上大屋（一・九倍）、茂木（一・八倍）、堀越・金丸そして堀越の順になっている。

また、明治四十三年から六十年間に世帯数の増加の割合が著しいのは、茂木（五・一倍）、樋越（四・五倍）、上大屋・滝窪・大胡である。このことから、人口および世帯数の増加の割合が著しい地区は、上毛電鉄沿線の茂木・樋越・上大屋および町の北部に位置する滝窪・金丸などである。しかし、これらの地区の人口密度は茂木・上大屋を除くと一般に低くなっている。

○明治四十三年七月一日の戸数と人口

大字	戸数	男	女	計	一戸当り人数
大	一四〇	四六〇	四四六	九〇六	六・五
茂	六八	二九一	二六八	五五九	八・二
堀	二〇八	七四	七一五	三八九	六・七
横	四三	一五八	一〇六	三六四	八・六
滝	八二	三三八	三八八	七二六	八・九
河	一〇〇	三二一	三四三	六六四	六・六
樋	二六	一〇一	九四	一九五	七・五
上	二六	九九	九九	一九八	七・六
計	六九三	二、四四二	二、五五七	五、〇〇一	七・二

○昭和九年十二月末の戸数と人口

大字	戸数	男	女	計	一戸当り人数
大	三〇六	七三〇	七二四	一、四五四	四・八
茂	一三四	三六一	三八四	七四五	五・六
堀	二九〇	八五〇	八八九	一、七三九	六・〇
横	六〇	一六九	一八二	三五一	五・九
滝	一七〇	五一〇	五一二	一、〇二二	六・〇
金	三五	八六	一〇一	一八七	五・三
河	一八九	五六三	五四八	一一一	五・九
樋	四一	一二六	一三八	二六四	六・四
上	三四	一二二	一二四	二三六	六・九
計	一、四一七	四、一七〇	四、一七〇	八、三四〇	七・二

計	一、二五九	三、五〇七	三、六〇二	七、一〇九	五・六
---	-------	-------	-------	-------	-----

○昭和十一年十二月末の戸数と人口

大字	戸数	男	女	計	一戸当り人数
大	三〇三	七二一	七三一	一、四四二	四・八
茂	一三二	三七〇	三八九	一、七五九	五・八
堀	二九八	八五八	八八七	一、七四五	五・九
横	五九	一九九	一九一	三九〇	六・六
滝	一七一	五二九	五四二	一、〇七一	六・三
金	四一	一〇二	一一四	二二六	五・三
河	一八八	五六三	五三六	一、〇九九	五・八
樋	四三	一三三	一四二	二七五	六・四
上	三七	一二四	一三〇	二五四	六・九
計	一、二七二	三、五八九	三、六六二	七、二五一	五・七

○昭和十二年十二月末の戸数と人口

大字	戸数	男	女	計	一戸当り人数
大	三二五	七七七	八〇九	一、五八六	五・〇
茂	一四六	四〇三	四一一	八一四	五・六
堀	二九六	八六〇	八八一	一、七四一	五・九
横	五九	一七九	一七七	三五六	六・〇
滝	一七一	五二九	五四二	一、〇七一	六・三
金	四一	九七	一二六	二二三	五・四
計	一、二七二	三、五八九	三、六六二	七、二五一	五・七

○昭和十四年十一月末の戸数と人口

河		上		河	
計	大	原	原	原	原
一、二八八	三、六三八	一、一七	三、七六五	七、四〇三	五・七
一八二	五四三	一三三	五四三	一、〇八六	六・〇
四五	一一七	一四二	一四二	二七五	六・四
三五	一七	一三四	一三四	二五一	七・二

○昭和十五年十月一日の戸数と人口

大		大		大	
計	大	原	原	原	原
一、二九四	三、四八四	三、七七四	七、二五八	五・六	五・六
三九	一一六	一三三	二四五	六・三	六・三
四五	一三〇	一四六	二七六	六・一	六・一
一八五	五二一	五五六	〇七七	五・八	五・八
四二	一〇	一二七	二三七	五・六	五・六
一八三	四九九	五四七	〇四五	五・七	五・七
六〇	一八六	一八七	三七三	六・二	六・二
二九一	八三七	九〇一	一、七三八	六・〇	六・〇
一三九	三七〇	四〇五	七七五	五・六	五・六
三一〇	七五	七七三	一、四八八	四・八	四・八

大		大		大	
計	大	原	原	原	原
四三二	八二〇	九〇四	一、七二四	四・〇	四・〇
三四四	六九九	七二三	一、四二二	四・一	四・一
四八二	一、一三九	一、四四九	二、二八八	四・七	四・七
九三	二二六	二五二	四七八	五・一	五・一

町	上	樋	河	金	滝	横	堀	茂	大
計	大	原							
体	屋	越	浜	丸	窪	沢	越	木	胡
明治四十三年	二五三・七	二二七・六	二二一・九	三三三・九	一三四・二	二〇五・六	二六六・一	二五七・六	一、五六二・一
昭和十四年	三六八・二	二六九・二	一七三・五	五二五・四	一三三・一	二八九・九	二一〇・七	三五七・一	二、五六五・五
昭和四十五年	四九三・九	四九七・八	三一六・九	六一八・五	二二三・五	三三四・四	二七〇・〇	六五五・三	二、九七二・四

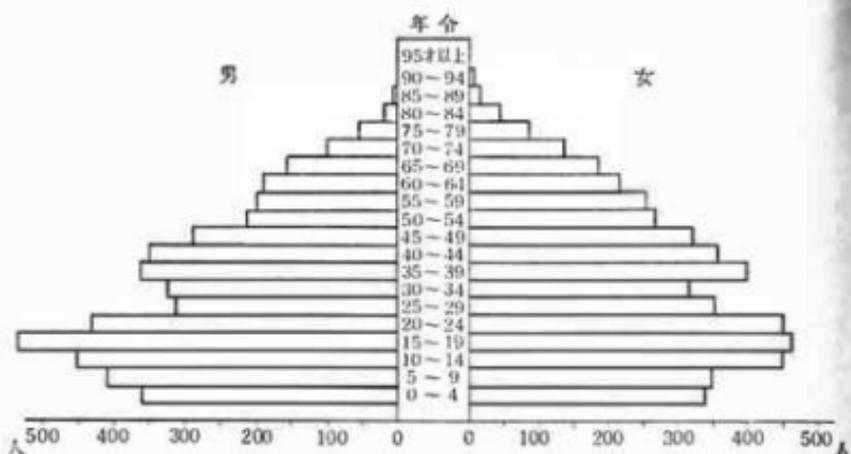
○人口密度（一平方キロメートル）の変遷

町	上	樋	河	金	滝	横	堀	茂	大
計	大	原							
体	屋	越	浜	丸	窪	沢	越	木	胡
明治四十三年	二五三・七	二二七・六	二二一・九	三三三・九	一三四・二	二〇五・六	二六六・一	二五七・六	一、五六二・一
昭和十四年	三六八・二	二六九・二	一七三・五	五二五・四	一三三・一	二八九・九	二一〇・七	三五七・一	二、五六五・五
昭和四十五年	四九三・九	四九七・八	三一六・九	六一八・五	二二三・五	三三四・四	二七〇・〇	六五五・三	二、九七二・四

## 第四節 年齢別人口

昭和四十五年十月一日の人口を年齢別にみると、○才と十四才の年少人口が二、三四五人で二四・一%、十五才と六

大胡町の年齢別人口（昭和45年）



十四才の生産年齢人口が六、六〇二人で六七・八%、六十五才以上の老年人口が七八六人で八・一%となっている。この割合を県平均とくらべると（年少人口二三・九%、生産年齢人口六八・二%、老年人口七・九%）、大胡町は年少人口と老年人口の割合がわずかに多く、生産年齢人口がわずかに少ない。この年齢別人口の割合を、昭和四十年とくらべると、年少人口が四、三%減少し、生産年齢人口が二・七%、老年人口が一・五%それぞれ増加している。この傾向は、県でも同様である。

昭和四十五年の年齢別の構成を五才ずつに区切って、その人数をみると図のとおりである。ここで、特に注目されることは、十四才以下の年少者の縮小と、二十五才～三十四才の青壮年層の縮小である。その反面、十五才～十九才の年代の人口が非常に多くなっている。

戦後のベビーブームの大きなふくらみは、県および全国においては、二十才～二十四才の年齢層にみられる。しかし、大胡町においては、この二十才～二十四才の年齢層よりも十五才～十九才の若い年齢層が多くなっている。ちなみに、十年前の昭和三十五年における大胡町の年齢別構成をみると、十才～十四才の年齢層

が非常に多い。これは、全国的な戦後のベビーブームの傾向と同一のものである。それが、十年後の昭和四十五年には、様相を一変して激減している

昭和四十五年 年齢別人口

年齢	総数	男	女	年齢	総数	男	女
〇～四才	六九二	三六二	三三〇	五〇～五四才	四七三	二二〇	二六一
五～九才	七五三	四一三	三四〇	五五～五九才	四四七	二〇〇	二四七
一〇～一四才	九〇〇	四五三	四四七	六〇～六四才	四〇三	一九〇	二一三
一五～一九才	一、〇三八	五三三	五〇五	六五～六九才	三三八	一五九	二一九
二〇～二四才	八七四	四三三	四四一	七〇～七四才	二二九	一〇〇	一二九
二五～二九才	六六四	三一五	三四九	七五～七九才	一三八	五九	七九
三〇～三四才	六三九	三二五	三一二	八〇～八四才	五九	二二	三七
三五～三九才	七五	三六八	三九一	八五～八九才	二〇	六	一四
四〇～四四才	七〇〇	三五一	三四九	九〇～九四才	〇	〇	〇
四五～四九才	六〇七	二八九	三一八	九五才以上	〇	〇	〇

昭和四十年 年齢別人口

年齢	人口	年齢別割合	年齢	人口	年齢別割合
〇～一四才	二、七三一	二八・三	二五～六四才	四、四五六	四六・一
一五～二四才	一、八三三	一九・〇	六五才以上	六三八	六・六

昭和四十年 人口の年齢別割合(%)

〇～四才	七・〇	一〇～一四才	一一・三	七・一	三〇～三四才	八・〇
五～九才	九・〇	一五～一九才	一一・八	六・五	三五～三九才	七・二

四〇〇四四才	六・四	四五〇四九才	五・一	五〇〇五四才	四・九	五五〇五九才	四・四
六〇〇六四才	三・九	六五〇六九才	二・六	七〇〇七四才	二・一	七五〇八〇才	一・七

○昭和三十五年 年齢別人口

年令	總數	男	女	年令	總數	男	女
〇〇四	八六八	四三七	四三一	五〇〇五四	四五〇	二二四	二二六
五〇九	一七〇	五八一	五八九	五五〇五九	四一四	二二二	一九二
一〇〇一四	三三八	七〇七	六四一	六〇〇六四	三一九	一四八	一七一
一五〇一九	〇〇二	五五二	四五〇	六五〇六九	二七〇	一二五	一四五
二〇〇二四	七一五	三二五	三九〇	七〇〇七四	一六二	八三	七九
二五〇二九	七六一	三五二	四〇九	七五〇七九	九六	四六	五〇
三〇〇三四	七三五	三七〇	三六五	八〇〇八四	四三	一〇	三三
三五〇三九	六四七	三〇七	三四〇	八五〇八九	一六	〇	一〇
四〇〇四四	四九五	二二三	二七二	九〇〇九四	一	〇	〇
四五〇四九	四九五	二三〇	二六五	九五以上	〇	〇	〇

○大正九年の年齢別人口

年令	男	女	計	年令	男	女	計
〇才	一一六	一四三	二五九	二〇〇二四才	一八七	二〇七	三九四
一〇一五才	四八六	四五〇	九三六	二五〇四四才	六〇四	八四九	一四五三
六一一三才	六一八	五五二	一一七〇	四五〇五九才	四九三	三一五	八〇八
一四才	四九	五三	一〇二	六〇才以上	二〇七	二四二	四四九
一五〇一九才	三二三	二五三	五七六				



明治二十二年生											明治二十三年生											
小計											小計											
三	四	五	六	七	八	九	〇	一	二	三	三	四	五	六	七	八	九	〇	一	二	三	
四〇	三九	三八	三七	三六	三五	三四	三三	三二	三一	三〇	三〇	二九	二八	二七	二六	二五	二四	二三	二二	二一	二〇	
三〇	一四	二三	二二	三一	三二	三四	三六	三七	三二	三七	二五	二〇	二二	一五	二四	一六	一五	一〇	九	三	三	
二二	一四	二一	二〇	二三	二三	三四	四〇	三七	四一	四一	三六	二五	二七	一七	三〇	一七	二三	一三	六	五	一一	
五二	二八	四四	五一	四六	五五	六八	七六	六九	六八	六八	六一	四五	四九	三二	五四	三三	二八	二三	一五	八	一四	
四一	一六	五七	四〇	九	一五	二	一	二	二	二	八	一七	九	二	二	一五	二五	三三	三七	二一	四三	
三	五	二	〇	七	九	五	一	四	九	九	八	一六	二	二	九	二	〇	三	三六	三三	四五	
七	六	八	一	五	四	一	三	一	五	二	一	一	一六	三三	一	三	二	一	三	四	五	八
三	四	一	五	二	六	〇	三	六	四	四	二	二	三三	三七	三一	三六	三六	三一	三〇	四三	四六	四二
二	一	二	四	三	三	三	三	五	五	五	〇	〇	四	四	二	二	三	三	四	三	三	四
五	九	三	四	六	六	八	八	九	八	七	七	七	四	四	一	二	二	三	三	四	三	三
五	九	三	四	六	六	八	八	九	八	七	七	七	七	七	八	六	六	七	七	七	七	七
七	二	七	二	七	二	七	二	七	二	七	二	七	七	七	七	八	六	二	八	六	二	九
七	二	七	二	七	二	七	二	七	二	七	二	七	七	七	七	八	六	二	八	六	二	九



文政二年生	小計	天保一〇年生									小計	天保				弘化				嘉永二年生				
		元	二	三	四	五	六	七	八	九		一	二	三	四	元	二	三	四	元	二			
八一	一	八〇	七九	七八	七七	七六	七五	七四	七三	七二	七一	一	七〇	六九	六八	六七	六六	六五	六四	六三	六二	六一	一	八
二	二〇	一	一	三	一	四	一	三	一	五	三	七六	一	三	六	一	九	六	一	七	四	八		
三	七	一	一	一	一	一	一	一	一	一	三	五〇	一	一	四	四	五	四	四	〇	八	〇		
五	二七	二	一	三	一	五	一	三	一	八	四	二二六	二	三	〇	五	四	〇	五	七	二	八		
五	二八	一	四	一	二	二	一	三	五	八	三	四二	二	三	四	六	三	三	一	六	二	二		
一	三二	二	四	五	一	四	一	六	一	八	一	六四	六	七	四	三	〇	四	四	四	八	四		
五	六〇	三	八	五	三	六	一	九	六	六	四	一〇六	八	〇	八	九	三	七	五	〇	〇	六		
七	四八	二	四	三	二	六	一	六	六	三	六	一一八	三	六	〇	七	二	九	二	三	六	〇		
三	三九	三	五	五	一	五	一	六	一	一	二	一一四	七	七	八	七	五	八	八	四	六	四		
一〇	八七	五	九	八	三	一	一	二	六	四	八	二二二	〇	三	八	四	七	七	〇	七	四	二	四	

合	小計	〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃													
		五	六	七	八	九	〇	一	二	三	四				
計	一	八八	八七	八六	八五	八四	八三	八二							
	三	八三六													
	三	八三六一、六七一													
	六	六七一、四七八													
	六	四七八一、五五九													
	五	五五九三、〇三七													
	一一	〇三七二、三一四													
	九	三一四二、三九五													
	八	三九五四、七〇九													
	一七	七〇九													

## 第五節 労働力人口

昭和四十五年の十五才以上の人口七、三八八人のうち、就業者は五、三八六人(七二・九%)、完全失業者は四八人(〇・六%)で、この両者を合計した労働力人口は五、四三四人になる。十五才以上の人口中に占める労働力人口の割合は七三・六%である。これを県平均の就業者率七〇・六%、完全失業率〇・七%とくらべると、就業者の割合が県平均よりも高くなっている。従って、労働力人口の割合も県平均の七一・三%よりも高くなっている。昭和四十年とくらべると、この五年間に十五才以上の人口は四六一人の増加を示し、労働力人口は四四二人の増加をみせている。そして、一五才以上の人口中に占める労働力人口の割合は七二・一%から七三・六%へとやや増加した。なお、この五年間における県の労働力人口の増加率は九・七%であるが、大湖町は八・九%で県平均をやや下まわった。

労働力人口を男女別にみると、男子は三、〇二五人、女子は二、四〇九人で、女子より男子の方が多くなっている。また、十五才以上の人口中に占める労働力人口の割合は、男子が八四・九%、女子が六三・〇%であり、男子の割

台が高くなっている。

## 第六節 産業別人口

昭和四十五年の十五才以上就業者五、三八六人の産業別の人口をみると、もともと就業者の多いのは、農業の二、二八二人（四二・四％）、ついで、製造業の九一八人（二七・〇％）、卸売業・小売業の七四七人（二一・九％）、サービス業の六六一人（一一・三％）の順になっている。これを県全体とくらべると、大胡町は農業（県二六・八％）の割合が非常に高いのが特色である。製造業（県二九・三％）および卸売業・小売業（県一六・〇％）の割合は低くなっているが、サービス業（県一二・四％）は、県平均とほぼ同じであることは注目される。

昭和四十年と比較すると、就業者総数では四三六人（八・八％）の増加である。しかし、農業の占める割合は七・一％減少している。一方、製造業、卸売業・売小業・サービス業等の割合は増加している。ちなみに、全就業者のうち農業の占める割合の変化をみると、大正九年が七〇・六％、昭和三十五年が五八・五％、昭和四十年が四九五・％、そして、昭和四十五年が四二・四％と減少の傾向をたどっている。つまり、この五十年間に農業の割合が大幅に減少したことになる。

明治四十二年の職業別人口の割合をみると、農業が六九・九％、商業が二九・二％、工業が〇・九％となつていゝ。大字大胡を除く各大字とも農業従事者が大部分を占めている。大字大胡は他の大字と異なり、七七％ほどの者が商業に従事していた。

現任人職業別 (明治四十二年十二月三十一日)

職業別	大字		大胡町	茂木村	堀越村	横沢村	滝窪村	河原浜村	礪越村	上大屋村	計
	農	工									
専業	五九	八五	二六五	七二	一一四	一〇一	四〇	四六	七九二		
商工ヲ兼業スルモノ	一一二	一四	四七	一一	一四	二五	六	七	一四六		
計	一一一	九九	三二二	八三	一三八	一二六	四六	五三	九三八		
専業	九	九	九	九	九	九	九	九	九		
農商業ヲ兼業スルモノ	一	一	三	一	一	一	一	一	三		
計	九	一〇	一二	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一二		
専業	二九五	六	二八	二	一	三三	二	一	三六六		
農工業ヲ兼業スルモノ	八	三	五	一	二	四	二	一	二五		
計	三〇三	九	三三	三	二	三七	四	二	三九一		
合計	三九三	一〇八	三四八	八六	一四〇	一六三	五〇	五三	一、三四一		

## 就業者数

職業別	男	女	計
大正九	一、八〇七	一、四七七	三、二八四
昭和三五	二、六四五	二、三二七	四、九六二
四〇	二、七六〇	二、一九〇	四、九五〇
四五	二、九九〇	二、三九六	五、三八六





## 第四章 集 落

### 第一節 集落の分布

大胡町をふくめた赤城山の南斜面は、よく開拓され、集落の分布が著しい。

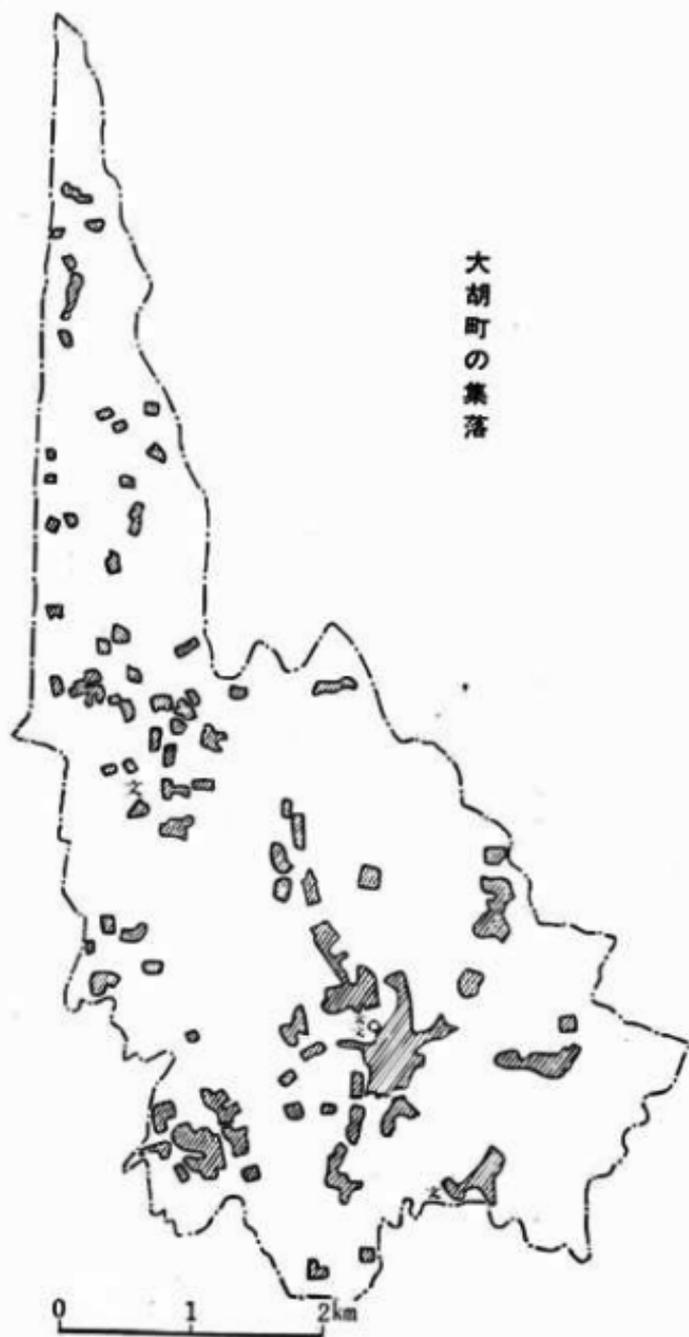
この赤城山の南斜面の中心的な集落の一つとして、荒砥川に沿った大胡がある。他の大部分は農業集落である。斜面は主として原形面を開拓した畑・桑園であり、水田は放射谷に沿い帯状または樹枝に分布している。また、斜面は火山灰層の堆積が厚いので、地下水の滲透が大きい。そのため、一般に地下水面が低く、集落の立地を制約している。

かつて、小川琢治博士は、「大胡図幅」にあらわれた村落について「洪福地に於ける模式的な集落である。」（『人文地理学研究』）とされ、「孤立住宅より、叢集村落に転化する漸移形を示す一種の散布村落である。」と指摘された。また、矢嶋仁吉博士は、この点に着目して、宮城村を中心に実証的な研究をおこなっている（『集落地理学』）。

大胡町の集落も、斜面の他の集落と同様に小村落の点在が多い。特に、開拓の新しい金丸をはじめとして、町の北西部に著しい。

大胡町で最も高い所に位置する集落は、金丸で標高約五二〇メートルである。

大胡町の集落



第二節 民家および防風林

大胡町をはじめ、赤城山斜面の特色ある民家は、今和次郎氏が名付けた「赤城型民家」である。



赤城型民家（流産、井上美智雄氏宅）

今和次郎氏は、「勢多郡の民家は、わが国でも非常に特色に富む作り方である。（略）勢多郡のものは凹形に屋根を切り落して、そこから屋根裏に光線を入れて養蚕の構えとしている。（略）それはいかにしたならば一層盛大に養蚕を経営できるかという目的で工夫したものである。わが国の民家の特色ある形態は、養蚕の目的で巧まれたものに特に多いのであるが、勢多郡のものは最も優れたものといわねばならない。」（「赤城南うくの民家」序文）と述べている。

赤城型民家の間取りの基本的な型は、土間と床の部分からなっている。床の部分は十字形の間仕切りで四つの部屋を区切った「四つ目型」が一般的である。

この赤城型民家は、最近、少なくなっている。

次に、赤城山南斜面の集落を特色づけるものに防風林がある。

大胡町の民家は、大字大胡をのぞくと、ほとんどが赤城山を背にして、南向きにつくられている。そして、母屋の北側および西側にカシ、スギ、竹などの樹木が林のように配されている。

これは、初冬から翌年の春にかけて吹き荒れる北風および北西風に対する備え



民家と防風林（足軽町新沼附近）

である。

民家の大部分が、防風林を背にして南面しているのは、卓越風の然らしめたものである。

### 第三節 大胡宿

大胡宿の形成は中世にさかのぼる、いわゆる山の手と下町（したまち）にわけるとすれば、長善寺と養林寺の南か

ら上の町の一部が山の手で大字大胡の宿が下町ということになろう。どこも同じで下町が商店街でにぎやかになる。即ち大胡宿である。

大胡城が城郭形成をととのえたと商人町をつくり宿場町が完成する。江戸時代前期の前橋藩で編集した地誌『前橋風土記』に大胡のこ  
とがある。（原漢文）

#### 大胡町

本町 古城の東にあり。道南北に通ず。北は上宿と名つけ、南を下宿という。市有り三八の日を期となす。群商ここに聚る。

横町 古城の南にあり。道東西に通ず。その東は本町の半に列り、西は北に曲折す。古城に到る道路なり。

裏町 ならびて本町の東にあり。而して本町に比ぶ。北は上宿に列り、南は下宿に通ず。商と農と厩を接せり。

右、大胡の坊街なり。



大胡のメインストリート(上町)

とある。貞享元年九月に前橋藩儒者古市剛が藩主酒井忠孝に献上した著作である。また、

大胡 市は毎月六次なり

とある。三八の日の六斎市である。江戸時代を通じて大胡町役はいわゆる村方三役（名主・組頭・百姓代）の上に庄屋があり、勝山家の世襲であった。勝山家は現在の公民館周辺を屋敷としていた。古く中世には足軽町西部の新宿の勝山（かちやま）城の城主をしており、牧野氏が大胡宿の庄屋にとり立てたと伝えている。

町の神さまは八坂神社で祇園の神。市場神である。裏町には琴平さまが橋のたもとの北側にあった。石尊様の石碑もある。上宿は天神さま、下宿は神明さまであった。

宿の中央の水路は洗い場であり、水車をかまえ、馬の水呑み場となった。水路の両側の道路は馬を走らせる鉄砲馬場ともなった。南に下ったところに馬頭観音があったのを後に道路開通により西に寄せた。下宿には馬市が立ち四方から集まりにぎわった。この馬市は昭和十七年ごろまで場所を変えて実施されていた。

大胡宿の道しるべは「東、文化六己巳六月世話人奥泉文平、江原忠兵衛」「西、前橋米野」「南、五科伊勢崎」「北日光大間々」とある。交通の要地であることを示している。四囲の道しるべも大胡への道を案内した困定、赤堀香林から子持村白井などがある。

○大胡町のえびす講の軸を見たことがある。えびすさまの像が木版画であり、その裏書に——  
文久元辛酉年十月新調

夷講発起人 蛸糸仲買業

江口 小平治

中島 房吉

高瀬 栄輔

明治参拾七年十月表具替寄附

大胡町西部船系仲買業者

とあった。商人の神であり、商売繁昌を祈った。水害流失。

○下町の児童公園に棉講中による「救世聖徳太子」の碑がある。

嘉永三歳在庚戌晩春日

横沢、河原浜、堀越、大屋のほか粕川、宮城、桂萱地区、城南地区に及ぶ。わたの生産と商品化が大胡町で扱われたことを推定する。

#### 第四節 寺の多い城下町

大胡町地内に戦前まで十三カ寺あった。最近合併が行なわれた寺もあり、数は減少したが寺の多い町である。大胡城下の町なのでそれぞれに由緒の古い寺で町の発展を示し、信仰の歴史を背負っている。

安養寺 浄土宗 大胡

勝念寺 真宗本願寺派 一法山 //

本能寺 日蓮正宗 久求山 //

満善寺 天台宗 宮柴山 勤行光院 茂木

円城寺 // 赤城山 //

龍性寺 // 大日山 実相院 //

長興寺 曹洞宗 有鷲山 松寿院 茂木

応昌寺 天台宗 慈恵山 千手院 河原浜

金蔵院 新義真言宗 豊山派 不二山

観音寺 堀越

永説寺 曹洞宗 赤城山

養林寺 浄土宗 無量山 養修院

長善寺 曹洞宗 豊国山

龍栄寺 新義真言宗 豊山派 八王山 龍窪

長善寺は大胡太郎左馬助(大胡城主)の開基と伝えている。開山は大雲和尚のち橋林寺五世の瑞誉が再建。寺室に豊臣秀頼書「豊国山」の軸と秀吉贈与の皿がある。

養林寺は大胡藩主牧野康成が天正十八年八月に家康の関東入国の時に大胡城に入り、同年十二月に当寺を創建したと伝えている。

慶長三年に康成公夫人、同十四年に康成公、同十九年に成定公夫人が逝去し、ここに葬られた。百石の朱印地があり、創建当時の山門が現存している。近頃、安養寺を合併した。

長興寺は牧野候の家老で伊勢崎藩主にとり立てられた稲垣長茂が菩提寺として建立。駒形口をやくする位置で城の南方のそなえとなった。長茂の父重宗と母の墓を建て法事を営んだ。墓はもと荒砥川畔で幕末に再建。

金蔵寺は金胎寺と大胡城内にあった玉蔵院、江木の西方寺を合併して金蔵院と称した。玉蔵院は二宮山といい赤城信仰の由緒も深い寺であった。近頃滝窪の瀧栄寺を合併した。

創建の古い応昌寺は赤城神社の別当寺を支配した。満善寺は山号寺号からも古くからの信仰がうかがえ八幡宮を支配していた。足軽町の龍性寺は新田郡世良田の長楽寺の末寺であった。町屋敷の勝念寺は真宗の布教所から発展し戦国時代に寺を創建。室町時代初期の作と推定される阿弥陀如来像をまつている。本能寺は日蓮正宗の江戸を除く関東一カ寺として日興書軸をまつるといふ。

○元禄郷帳による石高

宮関村 二〇三石一六九

(大胡町)

流窪村 三〇七、一〇〇

横沢 一六五、七〇〇

堀越 三八二、二四一

河原浜 二七三、四六四

堀越 二三三、二〇〇

上大屋 七五、七〇〇

茂木 五二一、七二六

### 第五節 大胡という地名

「おおこ」の地名の最も古いのは山ノ上の碑である。この碑ははるか西方二十キロ程の高崎市山名町字山神谷の奥まつた丘陵地の斜面にある。堅い安山岩の自然石の正面に五十三字を四行に書きわけた銘文があり、六八一年に放光寺の長利僧が自分の出身を明らかにし、母黒壳刀自(くろめとじ)について記し、傍らにある山寄りの古墳の墓碑としたものである。

佐野のみやけの健守の孫が黒壳刀自で、大見臣(おおこのおみ)と結婚して生まれたのが長利僧だといふのである。大見臣の相曾父が新川臣であり赤城山南面の地名にあり、現在の大胡町に住んだ地方豪族の一人とみることが

きる。古墳時代後期のことである。

山ノ上古墳は山寄せ墳であり、切石の切組み積みである。これに近いのが堀越古墳であることから大兄臣関係の古墳と考へる。

古代の勢多郡の豪族は上毛野氏（かみつけぬのうじ）であった。大化改新になり本家は中央政府に移ったが、その分家は勢多郡少領（郡長）としてこの地に居た。粕川村月田の北部にみやけと呼ばれる地があり天皇私費の料としての宮料であると思われる。大胡町地内には上大屋がある。その南が下大屋であり、両者をあわせた地域が大屋料で支配者豪族の居住地であった時期を推定することができる。

大胡が赤城山南面の一つの中心地であったことを示すものであろう。胡というのは中国における西北方の外国人を意味する。山ノ上碑は兎を使っているが音を取ったとみてよからう。大胡や多胡はやはり帰化人の多い地なのであろう。上毛野氏の関係で多胡よりも古くこの地に住み養蚕、製糸の技術と文化を伝えた人が移り住んだと思われる。

鎌倉時代に創建された長楽寺（新田郡尾島町世良田）に文書が所蔵され大胡郷として建武二年（一三二五）から数年の間に出てくる村は野中、神塚、三俣、上泉、堰口などがあり、室町時代の彦部文書に大胡荘に字坪井、長安、小屋原、今井、大島、片貝、小島田の村名がある。

江戸時代の文書では大胡東領、大胡西領とあり、東領は現在の新里、粕川、宮城の三カ村、西領は大胡町と前橋市の城南地区、芳賀地区、桂萱地区などを含んでいる。

利根川の旧流の東岸に及ぶ地域が大胡郷であった。広い地域の名であった。

○明治三年まで大胡名主 大川 太平

明治五年五月 大小区制実施

明治四年 // 田村栄次郎

（第八大区第三小区に大胡八カ村が入る）

明治十一年七月—明治二十一年

(大胡八カ村の連合戸長時代)

群馬県令第十九号

明治二十二年四月一日ヨリ施行ス

大胡町 茂木村 河原浜村 堀越村 滝窪村 横沢

村 樋越村 上大屋村

以上合併シテ大胡村ト称ス

新町村に至るまで村長事務を——大胡町外七ヶ村

大胡村

戸長 勝山 鶴寿

### 第六節 八十年前の大胡町の姿

——明治三十年頃——小暮高源(「すぎ久会々誌」二一七・昭三三年)

先ず一番地は下境新助(塙屋)、立川武八(棟屋)、高橋つた(伊勢屋)、役場(昔の大鏡院)の入口立川の長屋、天神様、江原兼五郎(杵屋)、越中屋、天神横町、箕輪竈屋、高橋饅頭屋、沢屋、石瀬床屋、本間平吉、勝山鶴寿、竹内井筒屋、鶴剣長平(酒造店)、提灯屋、警察署、次が城山へ入る通りを隔てて勝山車があり、その北は竹藪であった。

上町の南側は川の洲に裏町へ通ずる細い道があって、小商いの店下境鍛冶屋、下境伝さんという飯食店、大川橋からこの辺まで一段と低い土地なので俗に坂下といった。

次が下境の婆さん(三文商いで子供相手)大塙(下境)石井高次郎、長谷川・大川本家、裏町をへだてて隠居(大川)斎藤久次郎(肥料屋)、丁字屋、南雲龍松(玩具屋兼ねブリヤ屋)魚屋、ダンゴ屋、次が角の局となる。普通ここまでを上宿といった。

中宿から下宿の真中に小川が流れていた。川には両側から洗いものなどをするために、川ダナがあった。一段か二



大塚源二郎（英作父）、下の谷屋（しるこ屋兼料理）たばこ屋（阿久沢某無職）、鞆柄屋（萩原）、鍛冶屋（井上延永父）、長屋、山本（長十郎―常房の父千代吉の父）、高橋常吉、千吉良高吉（これが一番南の端で南は田）。

西側は八坂神社が孤格子の中に納っている。人力車（木村誠吉―下町桶屋の父）、勝山正作、伊勢屋、高平屋魚店、間々田屋（古着商友吉）岡田屋、この裏が泉屋の本宅。

下境金治郎（糸買）、日野屋（椎名勝久造）、美濃屋旅館、豆腐屋（山崎屋安造）、四ツ角高瀬屋（休み場）、長谷川木貨宿、笹屋の新宅、笹家東家（立川芳章―甚作の父）、大工・岩野美八・新井吉五郎（美吉の父の伝二郎の父）、高橋仲次郎、永井清三郎、星野源兵衛、少し離れて矢島（忠太郎の父の父）、通里から南へ田圃。

裏町（琴平町）。これは僕の生まれた処であり、一番遊び慣れたところ。米屋の裏に藤屋の婆さんと呼ぶ三文商の店。小暮家、下境伊三郎（境屋の新宅ともいう）、石屋（山口長太郎）、四ツ角、上へヒゲ甚という老夫婦、はてい屋（阿久沢）、新井（畳屋、料理屋もする）。

東側亀屋の店、南口に大島醤油屋（間もなく今の百十一番地へ新築移転する）、戸田屋豆腐店、川端（三川）。川東に下車（永井源吉）があり、川端の前の石尊様、東に琴平様がある。四ツ角東南の区画には小野寅吉と大川原政吉の二軒だけ。

勝念寺の南に三川伝吉、ぐっと上って下駄万（岡田万太郎という―今、弥造の養父清斎の父）が歯入をしていた。岸野伝次郎（運送）が四ツ角の西南に一軒ある西の畑に塚越龍吉（農先太郎の父）が百姓をしていた。

自

然

## 第一章 位 置



大胡町より東を望む

大胡町は、首都東京より直線距離にして約一〇〇畑へだたった関東平野の内陸北西部、まさに関東平野がひらこうとする所で赤城火山南面の雄大な裾野上に立地している。町域は、面積一九・七一畑、東西約五畑、南北約一〇畑、裾野の傾斜に沿った南北に長い境域はヤマトイモ形を呈する。町の東・西・南・北四極の経緯度は次のようになる。町役場の位置は東経約一三九度九分三八秒、北緯約三六度二四分五四秒である。

極東 東経約一三九度一分一四秒（大字樋越字東原）

北緯約三六度二四分四五秒

極西 東経約一三九度七分二一秒（大字滝窪字西原）

北緯約三六度二六分一一秒

極南 東経約一三九度九分二八秒（大字茂木字前川原）

北緯約三六度二三分四五秒

極北 東経約一三九度八分一八秒（大字金丸）

北緯約三六度二九分九秒

本町の西と南は前橋市に接し、東は勢多郡宮城村、粕川村と接する。市街地は、大胡城の台地の下、荒砥川畔に立地し、江戸時代は日光裏街道の宿として

赤城南面の交通要地であった。

町には私鉄上毛電鉄が走り、県都前橋と緑都桐生へ通じる。道路は主要地方道前橋・大間々・桐生線を軸に放射状に発達し、前橋・渋川・伊勢崎・桐生等の周辺都市と本町を結合するパイプの役割を果たしている。この交通位置関係つまり周辺上位都市群に対して大胡町が持っている位置の価値は、今後の町の発展にとって最も重要な要素となる。

赤城の裾野の美しさはつとに有名である。標高三八〇mの白草付近に立てば、北に鍋割、荒山の雄姿が至近に迫り、眼下に関東平野がひらけ、その向うに秩父・関東山地の山なみを眺望することができる。

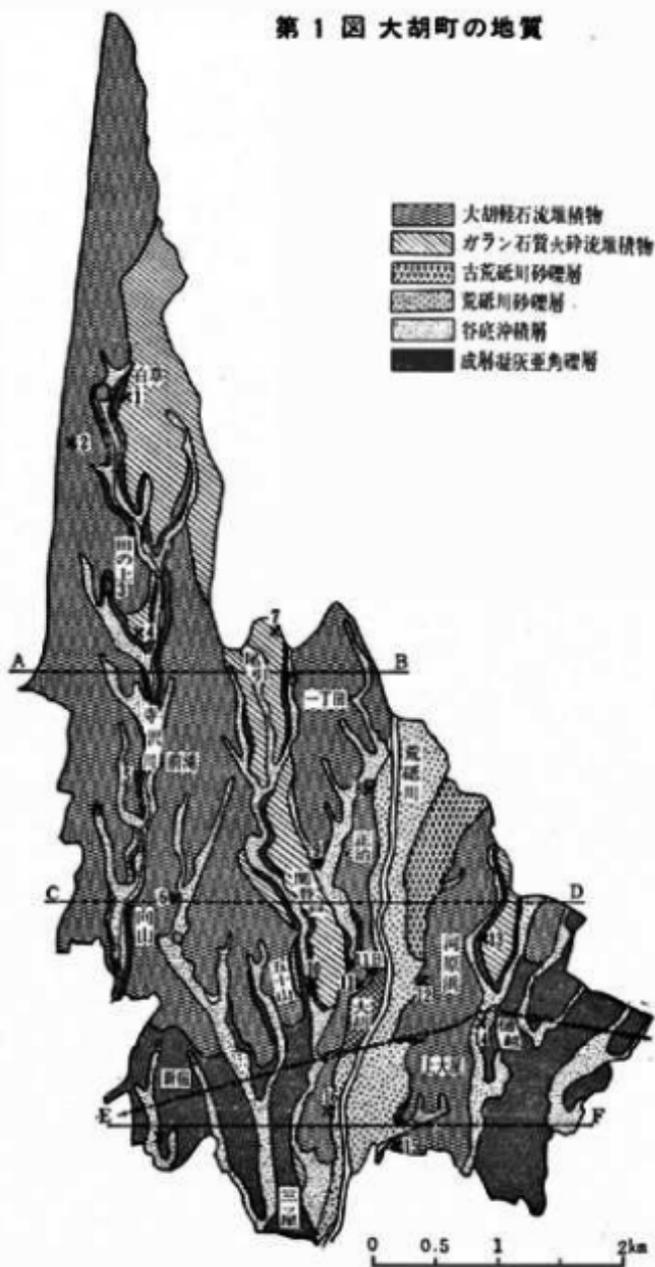
## 第二章 地形・地質

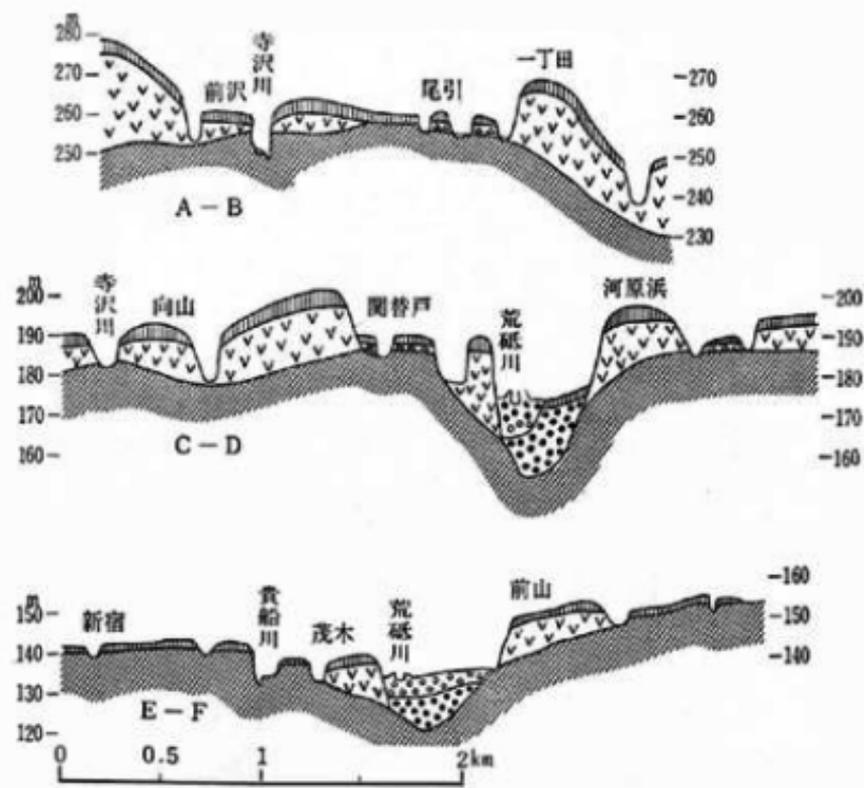
大胡町は、カルデラ型火山赤城の南麓裾野上に位置している。この火山裾野は、赤城火山から供給された火山物質とそれを侵食して流れる河川の堆積物との二種類の地質で構成されている。火山物質は火砕流堆積物と火山泥流状堆積物とで溶岩はない。裾野を形成した火山物質は、荒砥川・寺沢川などに侵食されて高い崖をもつ台地地形となり、その上を関東ローム層が厚くおおって堆積している。

### 第一節 先第四系（基盤岩層）

赤城火山は、新生代第四紀に入って活動を始めた。この火山堆積物以前の地層は、町内に全く露出していない。高崎の観音山には第三紀中新世の地層（板鼻層）が分布する。また新田郡藪塚本町・笠懸村の丘陵や勢多郡新里村の火山泥流におもわれた小丘にも中新世の地層がある。新里村の小丘の標高（一五〇〜一七〇m）は大胡市街地と同高度で、しかも同じ裾野にある。これと県下の地質構造とを合わせ考えると、本町の地下にも厚い火山物質に埋積されて第三紀層が伏在していると推定される。その深さは不明だが、深井戸資料からみて一三〇m以深である。

第 1 図 大胡町の地質





凡例

- 関東ローム層
- 大胡軽石流堆積物
- グラン石質火砕流堆積物
- 古荒砥川砂礫層
- 荒砥川砂礫層
- 成層凝灰歪角礫層

第 2 図 地質断面

## 第二節 第四系

### (一) 関東ローム層

台地の切割りを見ると、黒色の表土の下に厚さ数mの褐色土層が発達している。これが関東ローム層で「赤土」ともよばれる。元来は黒色の火山灰であるが、数万年間の風化作用によって褐色に変色している。

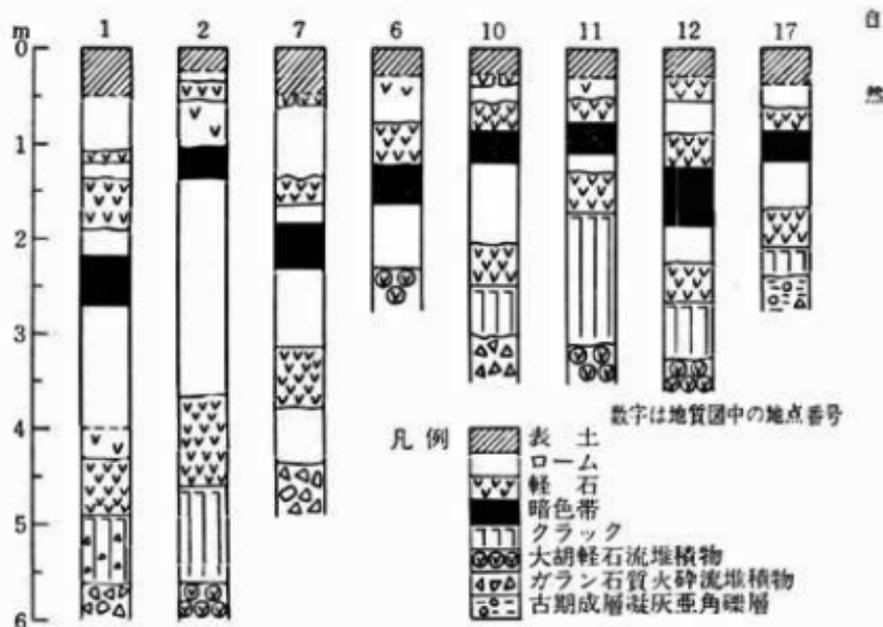
群馬県に分布する関東ローム層は、主に赤城・榛名・浅間火山から噴出されたもので、この中には含まれる軽石層や暗色帯を鍵層にして上部ローム層・中部ローム層・下部ローム層に三区分される。しかし大胡町には下部ローム層は分布していない。第三、四図に代表的柱状図と重鉱物組成を示した。町内の関東ローム層は、層厚三〜五mほどで北から南へ薄くなってゆくが層序はすべて同一である。

### ○上部ローム層

上部ローム層は、浅間火山起源の火山灰と軽石とからなる。層厚は白草で約一・四mあるが南部では六〇cm前後に薄くなる。一般に、黒土層直下に黄色細粒(粒径三〜四mm)の板鼻黄色軽石層が薄層あるいはレンズ状に認められる。下半部は全体に軽石質ロームで、この中に赤褐〜褐色細粒(五mm前後)の板鼻褐色軽石層がある。板鼻褐色軽石層は町内全域で三〇〜五〇cmの明瞭な層を成すが、板鼻黄色軽石層は南部では散在的で不明瞭となる。火山灰は、中部ローム層以下のものに比べて粘土化の程度が低いために軟質でサラッとした感触がある。色調も淡色で明褐色を呈し、乾燥断面では淡黄褐色になる。重鉱物組成はしそ輝石、普通輝石、磁鉄鉱などで角せん石を含まないことが特徴である。上部ローム層の下限の年代は今から約二・四万年前、板鼻黄色軽石層は約一・一万年前に噴出された。

### ○中部ローム層

第3図 関東ローム層柱状断面図



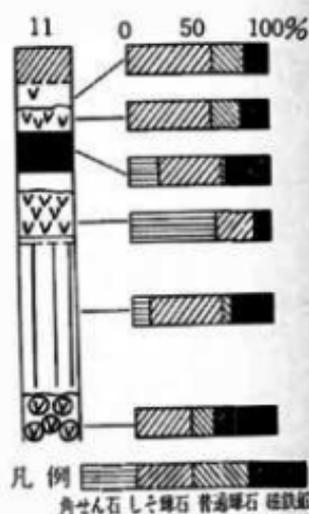
大胡付近に分布する中部ローム層は、主に榛名火山起源の火山灰と軽石からなり、距離的に近い赤城火山の火山灰は少ないとみられる。層厚は白草・石倉で三〜四mあるが、南部では二m程度になる。上部ローム層より粘土質でかたい。色調も褐色から暗褐色を呈して暗くなる。重鉱物組成は、しそ輝石・角せん石・普通輝石・磁鉄鉱などからなる。角せん石は榛名火山噴出物の特徴である。

上部ローム層との境界は、暗色帯の上面においている。暗色帯の厚さは三〇〜五〇cmほどで、新鮮な露頭では明瞭な黒バンドとして認められるが、乾燥断面では消し炭色になり、表面にタテの細かいき裂(クラック)が生じる。暗色帯には植物腐植起源の有機炭素と有機窒素が、褐色ロームの部分に比べて非常に多く含まれる。これは現在の表土(黒土)と同じ性質の土壌である。つまり、中部ローム

五〇一m)、粒形は角ばって不規則である。また軽石の間には径二〜五mm程度の安山岩角礫が相当含まれる。なお盆栽土で有名な鹿沼土は、赤城火山起源の鹿沼軽石層のことで、暗色帯と八崎軽石層の間に位置するが、町内には分布しない。八崎軽石層の下は厚さ〇・五〜一m、チョコレート色の硬い粘土質ロームになる。これが乾燥すると大変硬くなり、タテの大きいクラックが生じる。この下は火砕流堆積物や成層凝灰亜角礫層となり、下部ローム層の堆積がみられない。

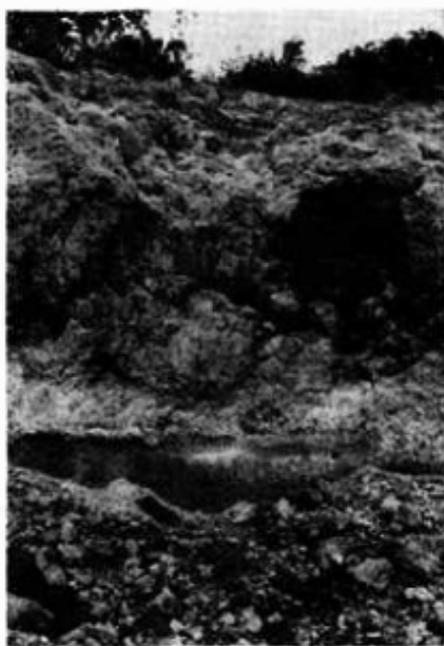
ところで、赤城南面に位置しているながら鹿沼軽石層

第4図 関東ローム層の重鉱物組成



△層堆積後に植物が繁茂し、土壌形成に必要な長期間にわたって火山灰の降下がなかったわけである。日本の旧石器文化発見で有名な岩宿—文化層は、これと同一層準の暗色帯に含まれている。

暗色帯の下部〇・五〜一mに淡黄色の八崎軽石層がある。層厚は北から南へ八〇から四〇cmと薄くなる。重鉱物組成の特徴は、角せん石を五〇%前後も含むことで、榛名火山から噴出された。軽石は角せん石安山岩質で粗粒(〇・



河原浜下組にて

など赤城火山起源の噴出物が分布しないのは次のような理由による。火山爆発の噴煙は、爆発後数分にして五〜六千 m の上空に達する。この高度の日本上空は一年中偏西風が吹いているので、軽石や火山灰はすべて噴出火山体の東方に分布することになる。また中部ローム層の厚さが北方へ厚くなる現象は、榛名火山の噴煙のなびく中心線が、本町の北方を走っていたことを意味する。

#### □ 火砕流堆積物

大胡町の台地は、一〇〜三〇 m の高い崖をもって沖積低地からそそり立っている。崖の断面には粗粒の軽石層が露出している。白草付近の露頭では火山角礫層が見られる。この軽石と角礫の層が、赤城火山から流出してきた火砕流堆積物である。

#### ○ 「火砕流」とは

火山は、地下の高温のマグマを次の三つの様式で地表へ放出堆積する。

(イ) 降下火砕堆積物（火山灰、降下軽石）

(ロ) 火砕流堆積物（軽石流、石質火砕流）

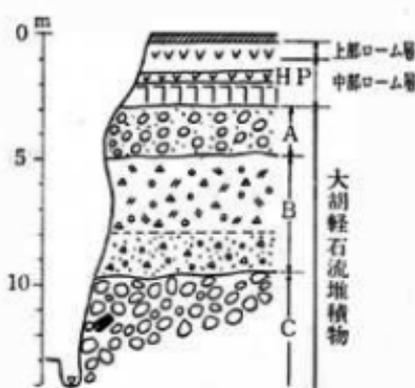
(ハ) 溶岩

マグマが火道内で急激に発泡すると、マグマは破砕されて(イ)、(ロ)が生じる。細粒物質は高空に噴き上げられた後落下して(イ)となる。火砕流（火山砕屑流）は(イ)と(ロ)の中間的な様式で、マグマの粗粒破片が火山ガスと一体になって、重力の作用で山腹を走り下る現象である。

火山砕屑物と高温高圧のガスの混合体は、一団の黒雲となって雪崩のように流下するので「熱雲」ともよぶ。熱雲は時速三六〜三六〇 km（秒速一〇〜一〇〇 m）という高速で走る。大胡の台地を作る火砕流堆積物もこのようにして

赤城火山から噴出されたのである。発泡の程度によって軽石と岩塊（石質火砕流）とに分れる。

○大胡軽石流堆積物



第5図 大胡町公民館北の露頭

といてよい。次に三部層をやゝ詳しく観察する。

A 部層……層厚一・五〜二m。紫赤〜紫桃色の特徴的な色調を帯びる粗粒軽石層。軽石は硬質で内部は灰白色である。平均粒径三cm前後で一〇〜二〇cm大が散在し、分級がわるい。粒形は亜角〜亜円礫で角はとれている。軽石の間は砂質火山灰が充填し、その量が多いためか層の固結度がゆるく容易に崩れる。

B 部層……火山灰と細粒の角礫・軽石の混合物質で、帯紫灰〜帯桃紫灰色を呈し、層厚四・五m。上部三mは、粉体状火山灰を主とし、径一〜三mmの角礫と粘土化した軽石粒を含む。下部一・五mは砂質火山灰に径一〜三mmの角礫を多数含むのが特色で、同粒径の白色軽石粒が散在する。上・下ともよくしまっている。

赤城火山は四方に軽石流を噴出しているが、鍋割山の西、白川の谷を通過して南麓に堆積したものを大胡軽石流堆積物とよんでいる。台地の崖や坂道の切り割りで観察できるが、公民館の北から中学校へ行く坂道の露頭を見てみよう。(第五図)

全体を概観すると、粗粒軽石が上部(A)と下部(C)にあり、その中間(B)はのっぺりした壁状を呈する。軽石流堆積物はA・B・Cの三部層に細分できる。各部層間の境界は明瞭で、互いに平行に堆積し、大きい凹凸はない。したがって各部層間に長い侵食期間はなく、地質学的時間尺度でみれば連続的に堆積した

C部層……最も軽石流らしい地層で、粗粒軽石がびっしり密集し、火山灰や角礫はごく少量しか含まれない。灰色を呈し、層厚約六m（下限不明）。軽石の粒径は、全体に五cm前後のものが最も多いが、一〇～三〇cm大をかなり含み、最大は八五cmあった。形は亜円／＼円形。灰白色硬質軽石である。軽石を割ると断面に長さ一～五cmの細長い穴が一定方向に沢山並んでいる。これは火山ガスが抜け出た穴で、マグマの発泡を示している。

また本部層の所々に木炭のあった穴があり、押し流された樹木片がむし焼きにされている。この木炭から、流出時の軽石流の温度が約三〇〇～三五〇度Cという高温であったと推定されている。（群馬大学教授新井房夫理学博士の資料による）

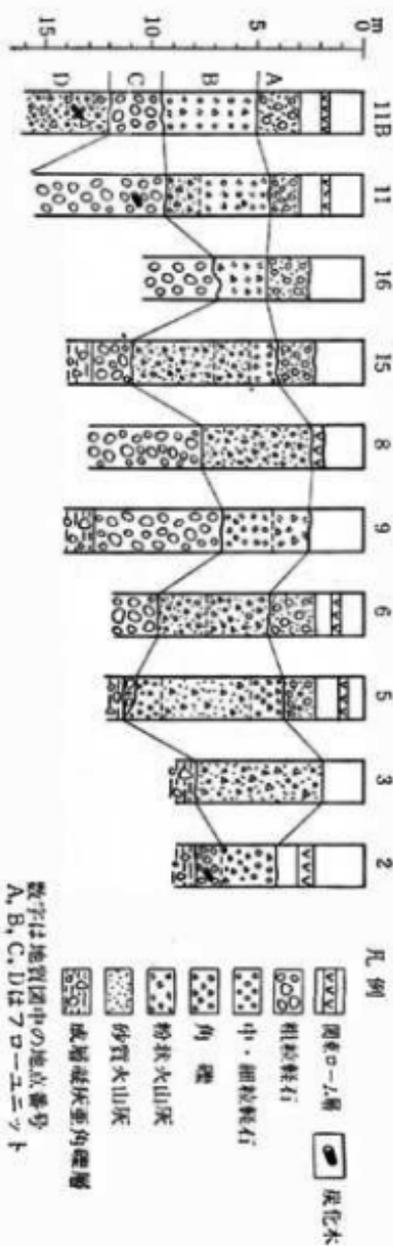
#### 大胡軽石流堆積物のフロユニット

大胡軽石流堆積物の代表的な断面を第六図に示した。個々の露頭断面はバラエティーに富んでいるが、全体を見通すと軽石流の堆積順序に規則性が読みとれる。すなわち、公民館北で見たA・B・Cと本丸跡東の坂に露出するDの四部層である。一回の火山活動で流出してきた一枚の堆積物をフロユニットという。各部層が一つのフロユニットにあたると思われる。次に各ユニットの特徴を述べる。

フロユニットA……層厚約一・五～二m。表面が紫赤～紫褐色を呈する灰白色、硬質の粗粒軽石層。同色の火山灰質充填物を多量に含み、層の固結はゆるい。軽石の粒径は二～五cmが一般的で、一〇～二〇cm大のものをかなり含み分級されていない。

フロユニットB……層厚約二・五～七m。細粒の軽石と安山岩角礫を含む火山灰質軽石流。より火山灰質な上部とより角礫質の下部とに細分できる所がある。上部は粉体状のフカフカした火山灰を主体とし、径二～三cm程度の粘土化した軽石と角礫を含むが、いずれも散在していで量は少ない。この部分は帯紫桃灰～桃紅色を呈する。下部は角

第6図 大礫軽石流堆積物の柱状断面



11B 本丸跡東の坂 11 公民館北 16 米小路 15 前坂東側製炭段 8 正治 9 関津戸 6 向山 5 滝窪小学校南 3 田の上 2 石倉

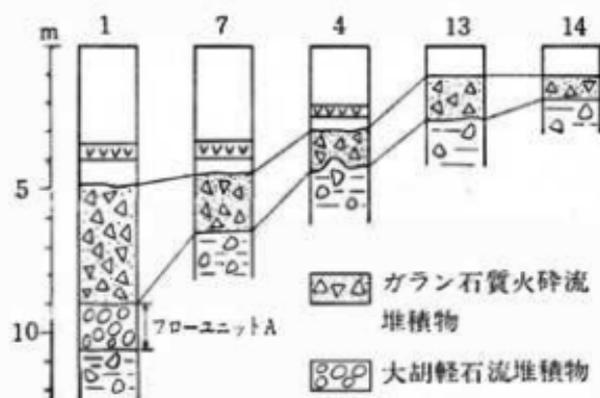
礫が増加し角礫質砂質火山灰層から凝灰角礫岩といった岩相でよく固結し、灰〜灰褐色を呈する。下部に含まれる軽石(径一〜三B)は白色で硬い。田の上(地点番号3)ではこの下部層に高さ約六mの滝がかかっている。この上・下部は独立の二つのフローユニットとも考えられるが、こゝでは一括しておく。

フローユニットC……層厚約二〜六・五(m)。最厚でも一〇m程度と推定される。文字通りの軽石流堆積物で、平均粒径五〜一〇cm、二〇〜三〇cm大を相当含む粗粒軽石層。軽石は灰白色で硬くよく発泡している。充填物質は少な

く軽石がぎっしり密集し固結がよい。しばしば炭化木を含んでいる。

フローユニットD……層厚約三〜一(十)m。町内では旧大胡城本丸跡東の坂の最下部に三m(十)で露出し、宮城村堀の内では一m(十)でいずれも下限不明である。

硬質軽石が散在する。充填物質は砂質火山灰で、層全体が強く固結している。



数字は地質図中の地点番号

1.白草沼東 7.尾引北 4.前沢北 13.河原浜北 14.種越

第7図 ガラン石質火砕流堆積物の柱状断面

以上本町内の大胡軽石流堆積物に四〜五のフローユニットを認めた。町内の軽石流堆積物の厚さは、最大で一〜一三m、宮城村堀の内では二八mでいずれも下底は見えない。しかし厚さが三〇mを超える所は少ないと思われる。これだけの軽石が少なくとも五回の火山活動によって赤城火山から噴出されてきたわけである。しかも軽石流は下部から上部へ角礫質→軽石→火山灰・角礫質→軽石とリズムカルに変化する。

○ガラン石質火砕流堆積物

粕川源流の「銚子のガラン」に最も厚く(約二〇〇m)堆積するのでこの名がある。破碎された溶岩片つまり安山岩の角礫層である。町内では白草付近に最も広く分布し、こゝから寺沢川の谷と尾引と関特戸へ分れる。またもう一方河原浜東部にも分布する。したがって石質火砕流は、金

丸の方向と荒砥川方向との二方向から流下してきたといえる。また本層の分布する場所は、軽石流台地面より地形的に約5m前後低い。(第二図)

層厚は白草で最も厚く約4mあるが、他の場所では一・五mと数十cmと南へ急激に薄くなる。白草・尾引・河原浜では径5cm前後の青黒色安山岩の角礫層で、径20cm大が点在する。充填物質は帯紫灰色の砂質火山灰であるが量は少ない。前沢・横沢(三〇cm)、関替戸(六〇cm)、樋越などの薄層部では砂が多く、砂相には水成堆積を示す水平葉理が発達する。白草で本層直下に大胡軽石流のフロユニットAがあるので、軽石流堆積後に流出したことが分る。

#### ○成層凝灰亜角礫層

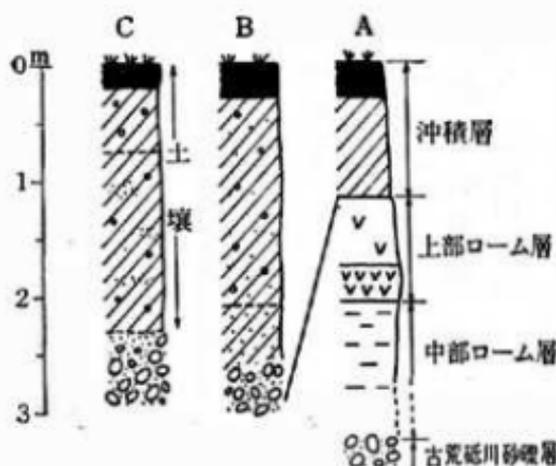
本層は既述の火砕流堆積物の基盤層をなしている。また新宿、三ツ屋、樋越など火砕流が到達しなかった南部地域では、関東ローム層が直接本層の上に堆積している。火砕流台地を刻む寺沢川などの谷では、谷壁下部から谷底に露出するが、荒砥川右岸側の崖では全く見られない。

層相は露頭毎にまことに多様だが、一般に褐色〜灰褐色ローム質粘土・砂に安山岩角〜亜円礫が含まれる。滝窪小学校東や河原浜(13地点)では、角礫凝灰岩といえるほど角礫が密集固結して急流や滝を作るが、全体的には礫が細粒物質に含まれる相である。礫はすべて安山岩で、角の取れた程度のものが最も多いが、円礫も見られる。礫径は一〇〜三〇cmが多いが〇・五〜一m大の巨礫がどの露頭にも存在する。また粘土の部分に葉理が発達する所や層理の認められる場所もある。

これらのことは本層が水流の影響下に堆積したことを示している。しかし礫径が不揃いの上円磨度が低く、粘土・砂が多量である点、通常の河川堆積物とは異なる。火山泥流と河川堆積物の中間的性質である。赤城火山裾野の原形―火砕流堆積物を剥ぎ取った面―はこの成層凝灰亜角礫層が形成した。

## ○古荒砥川砂礫層

荒砥川の平野は、ひと続きの沖積平野のように見えるが、左岸側根古屋の東部から北へかけての東半分は、関東ローム層におくわれる洪積平野である。厚さ九〇cmの上部ローム層の下位に、ベトベトに粘土化した中部ローム層が一m以上あるが八崎軽石層は認められなかった。実際には見えないが、この下にある砂礫層を古荒砥川砂礫層と名づける。厚さはボーリング資料から約二〇mていと推定する。(第二図・第八図)



第8図 荒砥川低地の地質断面

## ○沖積層

沖積世の地層は、荒砥川低地と台地の侵食谷に堆積している。

荒砥川砂礫層は、古荒砥川砂礫層を削って堆積しており、層厚は五〜一〇m程度と推定される。(第八図) 砂礫は径一〇cm前後の安山岩円礫で固結はゆるい。この上に厚さ二m余の小円礫や砂の混じる黒色、やゝ粘性のある土壌が堆積する。谷底沖積層は、基盤の成層凝灰亜角礫層の上に厚さ一m前後、最大でも二mていと堆積している。これは既存の地層、特に関東ローム層が侵食されて再堆積したもので、土壌化している。

### 第三節 地 形

#### (一) 地 勢

赤城火山の裾野に立地する大胡町は台地と谷の町、したがって坂の多い町である。とりわけ台地地形は広く、本町総面積（一九七一ヘクタール）の七三%をしめ、低地は二七%しかない。

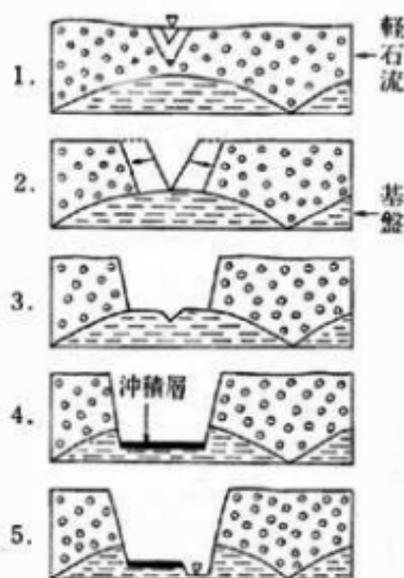
町内の標高をみると、最高所は町の最北端で約六四〇m、最低所は最南端で約一二〇m、この差五二〇mで平均傾斜約三度である。白草を通る通称南面道路（約三八〇m）以南だけをみると約一・五度、一〇〇m行つて約二・五m高くなる勾配である。

傾斜別面積では〇〜三度が一四七七ヘクタールで七五%、三〜八度が四九四ヘクタールである。標高別面積では、海拔一〇〇〜二〇〇mの土地が一〇九九ヘクタール、五六%で過半数をしめる。

#### (二) 台地と谷

谷底や低地から一〇m以上の崖をもってそそり立っているのはすべて軽石流台地である。台地面はかなり平坦な所もあるが、南方から入りこんだ侵食谷の影響を受けて、東西方向の断面でみると数m程度のゆるやかな起伏がある。侵食谷谷頭部の延長上はきままって凹所になっている。

ところで、寺沢川や貴船川の谷では、谷幅（五〇〜一〇〇m程度）のわりに崖が著しく高い。とりわけ寺沢川筋に顕著で、田の上から白草沼の間は崖高二五〜三〇mを有するみことな谷地形を展開する。これらにくらべ尾引から南のガラン石質火砕流がのる台地の谷は、崖高五m前後、一〇mをぬく所はまれである。侵食谷の深さを規定するものは何だろうか。それは第〇図から、基盤（成層凝灰亜角礫層）の上の火砕流堆積物の厚さであることが分る。つまり



第9図 台地侵食谷の形成過程

侵食されやすい軟質の軽石流堆積物が厚い所で谷が深いのである。侵食谷の形成過程を第九図に模式化して示したので、図に従って説明する。

(1) 基盤(成層凝灰角礫層、以下同じ)の凹凸を埋めて堆積した軽石流を河川が下刻侵食し、急速にV字谷を形成する。

(2) 侵食が硬層の基盤に到達すると、下刻侵食は鈍り、側方への侵食が優勢になって谷幅を拡大する。

(3) 河川が基盤をえぐりこむに至って側方侵食はやみ、谷幅は固定する。

(4) 基盤に刻みこまれた河川は、下刻をしながら谷幅を(3)段階の広さまたはそれよりやゝ広くした。やがて侵食力が減衰して、谷床に沖積層を堆積する。

(5) 再び侵食力が復活して、河川は基盤をさらに下刻した結果、谷中谷を形成する。沖積層堆積面は段丘化して今日に至る。

荒砥川低地 町内で平野らしい広さを有する低地は、荒砥川沿いの低地のみであるが、その幅は四〇〇〜八〇〇m程度である。この低地は、洪積世の古荒砥川砂礫層と沖積世の荒砥川砂礫層とから形成された扇状地性の堆積平野である。

#### 第四節 大胡町の自然史

##### 赤城火山古期活動

赤城火山は、洪積世のはじめごろ活動を開始した。第三紀層の低い丘陵の上に、両輝石安山岩質の溶岩を噴出し、しだいに円錐形火山に成長していった。高度が増すと、台風・豪雨などによって山体の構成物質は侵食され、そのつど山麓に運搬されて堆積（成層凝灰亜角礫層）し、広い裾野を形成していった。山頂が黒檜山（一八二八m）より高くなって後、火山活動は休息状態に入った。山体はこの期間急速に侵食され、裾野も谷の発達によって起伏に富むようになった。

##### 赤城火山新期活動

その後赤城火山は再び活動を始めた。こんどは火砕流だけを流出させる激しい噴火活動である。火砕流は山体の低所をぬって四方に流下し、裾野の谷を埋めて堆積した。大胡町へは、活動の比較的後半になって、少なくとも四〜五回の軽石流が白川の谷を通して押し寄せてきた。裾野の起伏はならされて、荒涼とした軽石原が出現した。軽石流堆積物は直ちに侵食を受けて、浅い谷がつけられた。この一段低い所に、ガラン石質火砕流が流れこんでくる。

かくて大量の火砕岩を放出した赤城火山は、山頂部が陥没してカルデラを生じた。黒檜山、荒山、長七郎山などを外輪山とするカルデラの中に、やがて中央火口丘・地蔵岳が成長していった。

##### 台地と谷の形成

軽石流・石質火砕流で埋積された裾野は、それ以後新たに形成された河川に侵食される一方である。軽石流堆積物はかなり急速に下刻されて、V字谷底に軽石流流出以前の裾野面が再び現われる。河川はさらに旧裾野の硬層をうがって、軽石流堆積面を台地地形と成した。谷底からの高さ一〇〜三〇mの崖の形成には、約五万年かゝっている。

第1表 大胡町の第四紀編年

時代分	大胡町付近の主なできごと
沖積世	荒砥川氾らん原・谷底沖積層
後	板鼻黄色軽石降下(1万年)
	板鼻褐色軽石降下(1.3万年) (2.4万年)
中	荒砥軽石降下赤城中央大口丘成立
	八崎軽石降下(4万年)
前	カラン石質大砂流流出
	岡の口軽石降下(5万年?) 赤城カルデラ形成
更新世	大胡軽石流流出
	大砂流のみ流出
更新世	赤城火山新期活動開始
	火山活動休止 → 大侵食期 円盤火山成長
更新世	主に溶岩流出
	赤城火山活動開始
更新世	低い丘陵
更新世	秋間層堆積

て河床が上昇し、段丘化した古荒砥川河床面との高度差が不明瞭になった。

荒砥川低地の形成 荒砥川は、軽石流堆積後に現在の低地地域へ流路をとった。軽石流堆積物を侵食して、扇状地性の低地を形成したのが古荒砥川である。約三万年前ごろ、その河床が低下し始め、河道も西へずれてかつての河床は段丘化し、その上に関東ローム層が降下堆積した。荒砥川は、右岸の台地を侵食しながら氾濫原をひろげ、正治から東小路の間に急崖を形成した。

沖積世に入ると、荒砥川砂礫層の堆積によつ

## 参考文献

- 新井房夫(一九六二) 関東盆地北西部地域の第四紀編年 群馬大学紀要一〇巻四号  
守屋以智雄(一九六八) 赤城火山の地形及び地質

### 第三章 土壤と土地利用

大胡町の土壤分布ならびに土地利用の様式は、地形によって決定されているといつても過言ではない。すなわち、台地と低地とでは土壤の性質が異なり、水田は低灌漑水利のおよぶ地に限られる。

#### 第一節 土 壤

大胡町に分布する土壤は、すべて関東ローム層を母材として形成されている。町内には、一、赤城火山灰質土壤（黒色）二、赤城火山灰質土壤（暗褐色）三、赤城火山灰質水積土壤の三種類の土壤が分布する。これらの分布は地形によって決定されており、一と二は台地に、三は低地（侵食谷底と荒砥川低地）に分布している。

一と二の赤城火山灰質土壤は、別名「黒ボク土」ともよばれ、一六四四ヘクタール（町面積の八三%）をしめる。

○赤城火山灰質土壤（黒色）

この土壤は、海拔五〇〇m以上の山腹斜面に主に分布するので、町内では金丸にわずかに分布するのみである。一般に表層が厚く、その色が著しく濃い黒色を呈し、きわめて腐植に富んでいる。ペーハーは6前後で、林野土壤としては酸性が弱い。

○赤城火山灰質土壤（暗褐色）

赤城南面では海拔五〇〇m以下の地域に分布し、本町の約八割をしめる。一般に表層は厚い場合が多いが、色はそれほど黒くない。赤城火山灰質土壤（黒色）にくらべてやゝ酸性が強、弱酸性を示す。腐植含有量も少ない。全炭

## 凡例

赤城火山灰質土壤(黒色)



赤城火山灰質土壤(暗褐色)



A 6



A 7



A 8



A 9

赤城火山灰質水積土壤



A 10



A 11



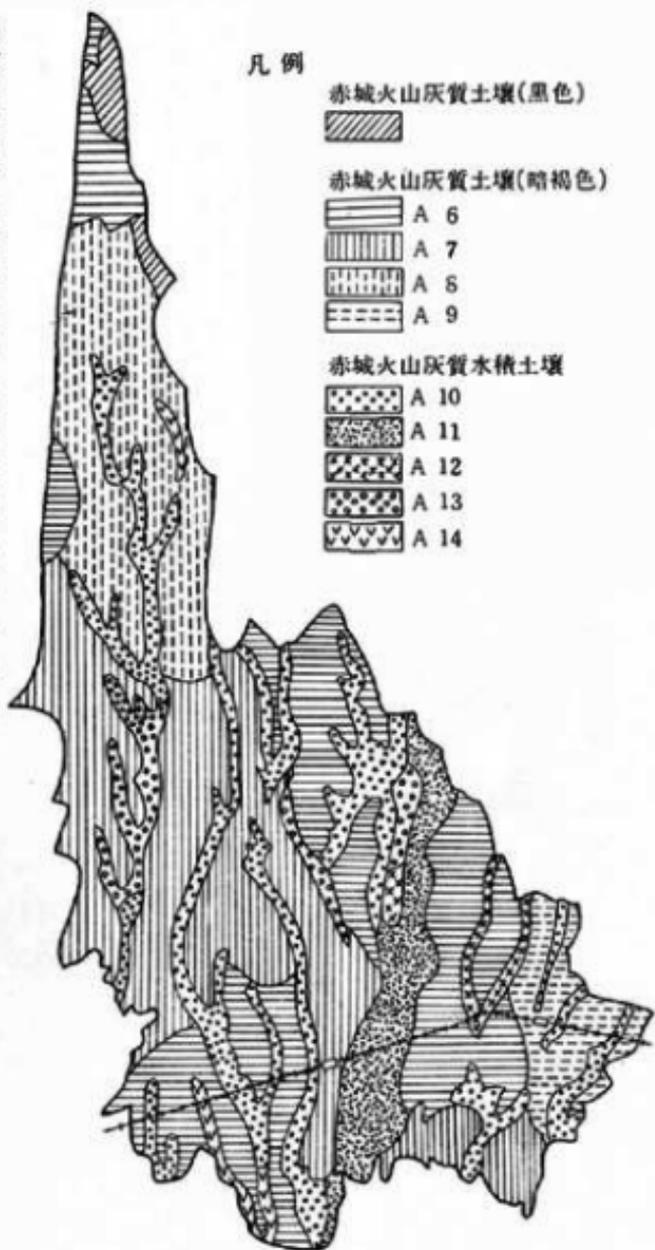
A 12



A 13



A 14



素量で見ると、「黒色」は七〜一二%含むのに対して、「暗褐色」では一・五〜四・二%でいどである。全体が容積重の小さい軽質な火山灰性土壤であるから、春先の「空っ風」による風食やはげしい降雨による水蝕を受けやすい。本土壤はさらに細分されるので、各々の土壤断面形態の特徴を簡単に記す。

A 6……表層は暗褐色腐植層で砂壤土。次に腐植を含む黄褐色層があり母材(関東ローム層)に漸移する。

第10図 大胡町の土壤分布図(経済企画庁・群馬県1956を改訂)

A 7……表層の暗褐色腐植層の直下に、「黒ニガ層」とよばれるさらに黒いか、またはち密な腐植層がある。

A 8……海拔三〇〇m以上の地域に分布する。暗黄褐色で腐植に富む表層の下に、褐色の腐植を含む下層土があり、この下に埋没土と考えられる腐植に富む黒褐色暗褐色の土層がある。

A 9……暗褐色く褐色を呈する土壌で、A 8までのような表土・下層土という土層の層序が発達していない。

#### ○赤城火山灰質水積土壌

この土壌は「水積」つまり関東ローム層が侵食され、流水によって再堆積したものを母材にして形成されている。したがって分布は、侵食谷底（A 10・12・13・14）と荒砥川低地（A 11）に限定され、面積は二五九ヘクタールを占める。すべて水田に利用されるが、普通の水田土壌と異なって軽密なため、養分の保持力が劣る。

A 10……谷間に再堆積した火山灰質腐植層を母材にした、全層暗褐色ないし黒色の斑鉄を有する水田土壌。

A 11……再堆積した腐植の少ない火山灰質母材から形成された斑鉄を有する水田土壌で、A 10とは分布地域と色

（灰褐色）の点がちがう。

A 12……斑紋を有するグライ化した埴土の上に形成された暗褐色または褐色の土壌。埴土が不透水性のため通水不良で湿田が多い。

A 13……暗褐色ないし褐色の斑鉄を有する土壌で、下部が河床砂礫になっている。

A 14……暗褐色く黒褐色の土壌で、下部が泥炭層または泥炭質になっていて、排水不良の多湿な水田土壌である。

## 第二節 土地利用

大胡町の土地利用状況は、水田・普通畑・桑園および林地等の農林関係が主体である。（第二表）そして土地利用

第2表 大胡町の土地利用 (経済企画庁 1970)

普通田	一毛田	84.3ha	266.1ha
	二毛田	181.3	
畑	普通畑	526.2	830.3
	樹園地	302.2	
	内桑園	298.5	
	果樹園	3.7	
	その他	1.8	
原野	利用地	1.0	4.0
	未利用地	3.0	
林地	人工林	146	246.0
	内針葉樹	146	
	天然林	83	
	内広葉樹	83	
	その他	17	
	内竹林	12	
代採跡地	5		
宅地		98.9	98.9
公共用地その他		525.7	525.7
総計			1,971.0

は、既述のように粘土質である。この下は1m余のガラン石質火砕流、基盤に粘土質の多い成層凝灰亜角礫層となるので、台地地形であっても用水さえ豊富なら水田化は可能になるわけである。

さて水利のきかない台地上は、普通畑と桑園として利用される。台地端の崖上や緩斜面状の崖は林地の場合が多い。なかでも寺沢川上流の石倉、白草付近の比高二〇〜三〇mの崖斜面には、群馬大学演習林を含む杉の立派な人工

の様式は、地形によって決定されていると  
 いてよい。地形によって土壌の分布が規  
 定されることは先に述べたが、土地利用上  
 より決定的なのは、水利の有無が地形に制  
 約されることにある。

本町の水田面積二六六ヘクタールという  
 数字は、赤城火山灰質水積土壌の分布面積  
 二五九ヘクタールとほとんど一致してい  
 る。つまり荒砥川低地と侵食谷底に限ら  
 れ、一毛田は後者の谷田である。狭い谷田  
 では、減反政策もあって耕作が放棄され荒  
 地化した湿地が散見される。一方尾引地内  
 では、群馬用水の水で台地を新規開田して  
 いる。厚い関東ローム層の中部ローム層

林が育成されている。

また農村集落の立地もすべて台地上を選んでいる。旧大胡城もこの台地地形をたくみに利用して築かれている。ただ本町の中心集落である大胡市街地だけは、荒砥川右岸低地に形成されている。近世の大胡宿は、日光裏街道の宿として、また赤城南面における重要な市場町として栄えたようであるから、街道と用水の関係からこゝに立地したのであろう。

参考文献

経済企画庁（一九五六） 土地分類基本調査〔前編〕

## 第四章 水 系

### 第一節 河 川

荒砥川 荒砥川は、荒山の東側の谷に源を發し、伊勢崎市内で広瀬川に合流する全長二三・二畑の河川で、赤城白川・粕川とともに赤城南面における三大河川の一つである。宮城村三夜沢で山地を離れて荒砥川扇状地を形成し、鼻ヶ石西方で鳴沢川、芳見沢川を合わせてから本町内を約二畑流れる。この合流点より上流の集水面積は三四一三ヘクタールある。

昭和二二年九月一五日のカスリン台風ときには、上流山地に発生した五五ヶ所の山崩れによる土砂礫が、土石流（山津波）となって本町を襲い、沿岸低地に大きな被害を与えた。土石流発生時の最大流量（一時間平均）は毎秒二八四立方メートル、台風の出水による流出土砂量は約八、三万立方メートルと推計されている。当時の荒砥川は、河幅一〇mていどの小河川であったが、土石流の氾濫によっていっきに五〇m余に広がった。この水害後の河川改修の結果、河幅は数倍に拡大され堤防、護岸、水制などで堅固に統御された近代的河川に改造された。荒砥川の水は、農業用水に利用されるほかに、本町上水道の水源として一日当り二七五〇トン供給することに水利権が設定されているが、今のところ一日七〇〇一五〇トンていどを供給している。

寺沢川 金丸南部の台地内に源を發し、前橋市内で桃の木川に合流する。全長一二畑、町内を約三畑余流れ、本町の最長河川である。寺沢川は、軽石流台地を深くえぐった幅の狭い侵食谷底を流れ、七本の支谷を樹枝状に台地への

ばしている。河道は谷底沖積層下の成層凝灰亜角礫層中に刻まれ、谷中谷を形成する。その水は白草の寺沢沼に貯水され、谷底にひらかれた水田を灌漑している。

神沢川 宮城村三夜沢橋で荒砥川から分水してくる河川で、前橋市下増田町で再び荒砥川に合流する。全長一四・一㎞。樋越の東方を流れ、成層凝灰亜角礫層から成る台地面を三・四m下刻している。

葉師川(西川) 尾引地内から水押・関替戸の西を通り五十山・茂木・三ツ屋に流れる小河川。前橋市富田町内で貴船川に合流する。河道は成層凝灰亜角礫層中に形成されている。

貴船川 尾引地内から向山・堀越・足軽町・三ツ屋に流れる小河川。前橋市筑井町で桃の木川から分水する八坂用水に入る。三ツ屋付近では台地面を五・六m下刻する。

大正用水 大正七年に県会で建設が議決されたのでこの名がある。坂東橋上流で取水する広瀬桃木兩用水の余水を、赤城南麓の用水補給に使う。昭和一九年に着工されたが、完成したのは戦後二三年である。同二五年から県営となり水路を舗装した。全長二四㎞、町最南部を海拔一四〇m等高線沿いに流れる。

群馬用水 奥利根の矢木沢ダムに貯水した水を沼田市岩本で取水し、赤城南麓と榛名東南麓を灌漑する。大胡町へは赤城幹線(全長三二・八㎞)で達する。水路は海拔二五〇mと二六〇mの間を、南北に発達する台地と谷を横断して流れる。前沢西方や一丁田の高い軽石流台地はトンネルで、尾引付近のگران石質火砕流の低い台地は暗キョで抜き、寺沢川の谷はサイホン(長さ一一五m)で河床下を潜って越え、一丁田沼北の谷は水路橋で渡っている。大胡町の田畑約七〇〇ヘクタールがこの用水を利用する。水資源開発公団によって昭和三九年に着工、四四年に完成した。

## 第二節 池 沼

大胡町には大小ハコの池沼があるが、すべて灌漑用の人工貯水池である。いずれも侵食谷の地形を利用し、谷を横断する堰堤を築いている。次に所在を略記する。

千貫沼(大字上大屋) 面積五・五五ヘクタールで町内最大である。白欠水の未流を引水し、養鯉が行なわれている。

寺沢沼(字白草) 寺沢川最上流部の谷を堰止した寺沢用水の貯水池。養鯉が行なわれている。

二本松沼(字向山) 貴船川の上流部に築かれ、養鯉が行なわれている。その他に一丁田沼(字一丁田)、新沼(字勝山)、蛇の目沼(字新屋敷)、五十山沼(字五十山)、今城沼(字勝山)などがある。

## 第三節 地下 水

大胡町の台地では、だいたい深さ五〜一〇mの間で地下水面に達する。このことは大胡軽石流堆積物が帯水層であることを示している。ところが金丸地区では、水を含まない火山灰質物質が厚いために井戸が深い。およそ一五〜一八mで帯水層の火山角礫岩層に達する。そのため金丸地区既存の農家は、芳見沢川の近くに立地し、その川水を利用していた。奥の九戸は、海拔五五〇m地点の湧水から、竹管で引水していた。昭和三三年に、この湧水を水源にして金丸簡易水道組合が町より一足先に上水道を完成させている。

次に町内の深井戸(被圧地下水井戸)ボーリング資料を記載しておく。

第3表 大胡町の深井戸ボーリング資料

No. 2

ボーリング位置・名称	
少年の家 大字上大屋	
工事年	昭和43年
深 度	40m
揚水量	500ℓ/分
深度m	地 質 名 称
7	表土
15	火山系玉石
30	玉 石砂 利
35	砂利
40	青粘土
ストレーナ 一 位 置	50~35m

No. 3

ボーリング位置・名称	
大胡町宮ブール 大字五十山	
工事年	昭和42年
深 度	112m (完成深度80m)
揚水量	500ℓ/分
深度m	地 質 名 称
7	表土・ローム
31	小砂 利交り砂
34	玉 石交り砂 利
41	礫交り火山圧土
61	火山灰土交り礫
78	火山灰土交り砂
112	青粘土
ストレーナ 一 位 置	25~34m

No. 1

ボーリング位置・名称	
大胡町上水道水源 大字白草	
工事年	昭和45年
深 度	120m
揚水量	800ℓ/分ℓ
深度m	地 質 名 称
3	表土・ローム
7	軽石交火山灰砂 利
12	軽石交玉 石砂 利
17	玉 石
24	砂 利・玉 石
26	砂 利
32	軽石交砂 利
42	玉 石交砂 利
45.5	ローム交り砂
48.5	玉 石交砂 利
51	ローム
53.5	軽石交玉 石砂 利
67	溶 岩交り砂・砂 利
98	小玉 石交り溶 岩礫交り砂砂 利
120	小礫交り砂
ストレーナ 一 位 置	54~65m、70~92.5m、 98~109m

## No. 4

ボーリング位置・名称 東邦繊維株式会社 大字大湖	
工事年	昭和42年
深 度	65m
揚水量	400ℓ/分
深度m	地 質 名 称
2	表土
6	黒粘土
26	火山系砂利
38	火山系砂利土を含む
60	火山系荒砂土を含む
65	土砂
ストレーナ 一 位 置	43~53m、59.5~65m

自然



足軽町所見

## 第五章 気象

群馬県は、海なしの内陸県であるため、その気象にも内陸的性格を帯びる。また北西部の山地と南東の平野地帯とは、気温・降水量などに相当の地域差がみられる。大胡町の気象は、その地形的位置と同様に山地と平野との漸移帯的性格をもつが、どちらかといえば平野部の性格が濃い。以下各要素を述べるが、町内の観測資料がないので、鼻ヶ石測候所（宮城村立宮城中学校・海拔二五五m。本町では一丁田南部・尾引南部・新井・前沢付近の高度）の資料をもって代用する。

### 第一節 気温

県全体の気温分布をみると、平野地帯が最も温暖な地域である。県北山岳地帯とは年平均気温にして六度の差があるが、山岳地の平均気温八度という値は北海道函館市に等しい。

大胡付近の年平均気温は約一三度で、前橋より〇・八度低い。一年の最暖月は八月で二四・七度、最寒月は一月で二・三度、年較差二二・四度である。七・八・九の夏季三ヶ月は平均気温二〇度を越えるが、前橋にくらべると約一度ほど涼しい。関東平野内陸部上州の夏は大変高温で、平野部八月の日最高気温は平均値でも三〇度をこえるが、本町では二八・八度で前橋に比べて約一度低い。

日最低気温の平均値では、一月がマイナス三度で最も寒いが、やはり前橋より約一度低い。前橋との温度差は、兩者の高度差一四三mの結果である。

第4表 月別平均気温(℃)

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
赤ヶ石	2.3	2.8	5.6	11.7	15.6	19.7	23.6	24.7	21.1	15.2	9.9	4.9	13.1
前橋	3.1	3.5	6.6	12.3	16.6	20.8	24.7	25.6	21.8	16.1	10.7	5.6	13.9

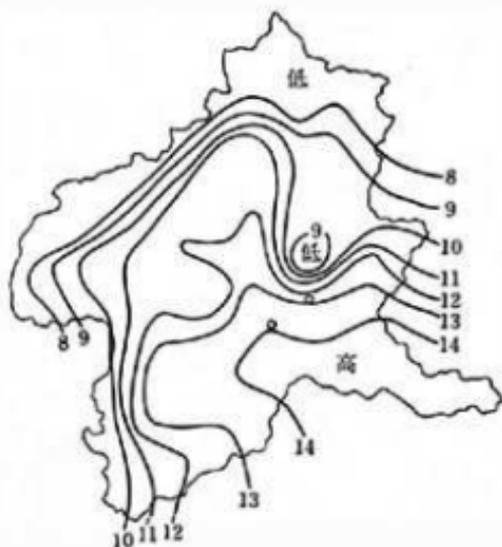
ところで、真夏の日中に大胡市街地から海拔四〇〇〜五〇〇mの金丸地区へ登ると、肌にいささか涼味を覚える。

桜の開花は大胡地区より平均一〇日おそく、春蚕の掃立てつまり桑の芽吹きも一週間遅れる。分校付近では酪農が盛んになるまでは蚊取線香すら不要であった。またコタツを全く使用しないのは七・八の二ヶ月だけである。同じ町内でも高度差によってかなりちがいがある。

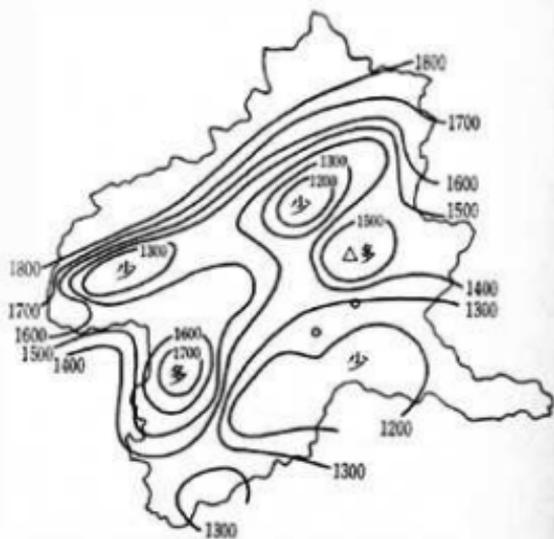
## 第二節 湿度と降水量

群馬の内陸性は湿度の面に最もよく現われる。前橋の年平均湿度は六九%、乾燥の著しい一〜三月の三ヶ月は平均六〇%以下で、全国的にも最も乾燥した地域である。乾燥が最も強いのは二月で、前橋の平均湿度五七%、熊谷、東京はともに六〇%である。

県内の年降水量分布は、県北の山地地域に多く、平野部に少ない。このような降水量分布は、夏と冬の全くちが



第11図 年平均気温(℃)  
(群馬県気象観測年報)



第12図 年降水量(mm) (群馬県気象観測年報)

った形式の降水量を重ね合わせた結果である。冬の三国山脈には季節風が多量の雪をもたらすが、平野部では月の六割が快晴日という少雨期である。

大胡付近の年降水量は一二四二mmで、前橋・熊谷・東京より少ない。一〇〇mm以上の降水量があるのは五月から一月までの六ヶ月間である。これは梅雨、雷雨、台風がもたらす雨で、九月の台風シーズンに最も多い。一雨一〇〇mm以上の大雨も九月が最も多い。一月から四月までの半年間、特に一二、一、二の三ヶ月は少雨期で、合計しても一〇〇mmに満たない。最少の一月は二四mmにすぎないが、県北水上町では一四四mmの降水(雪)がある。降水日数は年間一〇〇余日あるが、五〜一〇月の半年で七割をしめる。

第5表 月別平均降水量(mm)

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
前橋	23	37	55	81	106	165	194	196	209	129	47	25	1,260
奥ヶ石	24	38	56	83	113	158	174	192	208	135	41	26	1,242
赤城	73	58	136	147	285	344	258	299	406	300	84	49	2,478

第6表 降水量 (1.0m以上)

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
雪日	3	4	7	8	9	13	14	12	12	9	5	3	100
曇り日	3	5	8	9	11	13	15	12	13	10	5	4	107
晴日	13	9	12	11	15	21	21	18	19	15	8	8	109

金丸付近では、大胡地区に比べて梅雨が長くその間の降水日数も多い。麦刈り(六月中旬)前に畑で芽が出たり、刈取後の乾燥日が少なくて困ったという。トマト・キュウリも長雨でベト病が発生し、庭木専門に転業した農家もある。これは赤城山の気象の影響とみられる。赤城山は関東でも有数の多雨地域であるが、その降水量・降水日数が梅雨期にきわめて多いという独特の性格がある。六月の降水量は三四四mmで九月に次ぎ、降水日数は実に二一日におよぶ。晴天の下(大胡地区)から見ても、鍋割山から雲が張り出している時は、金丸では雨の場合が多い。

さて、過去の大雨の記録をみると、昭和一〇年九月二四日の二〇五・〇mmが最大である。しかし観測資料はないが、カスリン台風(昭和二年九月一五日)の前橋の降水量は三五七・四mmで過去六〇年間の極大値であることから、大胡町でも最大の記録と思われる。

大胡町の雪は少なく、年々少くなる傾向にある。前橋と比べると、気温が低いので積雪日数は多い。雪の場合も、南面道路の上と下では異なり、降雪および積雪日数そして積雪量も上の金丸の方が幾分多いようである。

上州の冬は、乾燥が強いうえに名物「空っ風」が吹きまくる。「赤城風」の名があるが、実は県下一番の強風地域は前橋で、その月平均風速(毎秒)は、一月四・七m、一月五・一m、二月四・九m、三月五・一m、四月四・六mと冬から春先にかけて著しく強く夏季の二倍近い。一月の最多風向をみると、鼻ヶ石では北西が六八%をしめる

第7表 月間雷日数

月	1	2	3	4	5	～	11	12	年平均
前橋	6	6	3	0			0	3	18日
鼻ヶ石	4	6	3	0			0	2	15日
赤城	17	14	13	7	1		5	10	68日

第8表 月間積雷日数

月	1	2	3	4	5	～	11	12	年平均
前橋	3	4	1	0			0	1	10日
鼻ヶ石	6	9	4	0			0	3	23日
赤城	31	28	29	10			4	17	120日

が、前橋では北が二三%、北北西二四%、北西一九%となる。どんな風の吹きまわし」という言葉があるが、利根川の谷を吹き下ろしてきた季節風が、赤城の裾野を吹きまわしてくるために大胡付近では北西寄りの風向が多くなるわけである。

空の風の強い日は乾燥も強い。こんな日に両毛線の車中から赤城南面を見ると、まさに黄塵万丈、褐色の砂煙が裾野をおよい尽している。軽鬆な火山灰質土壌が霜で凍上し、乾燥されて飛ぶ。麦畑には埋めわらを立てて、土壌の風食を防ぐ。そして農家は、屋敷の北と西をカギの手に防風林をめぐらして守る。大胡町の防風林は、平野部に多いカシぐねとけやきの形式に杉をまぜたものが多い。杉の多いのが特にめだち、金丸では杉と松とを混植した平野部では見られない形式が多い。松は杉が育つまでの強風よけで、やがては伐つてしまふ。

群馬、長野を襲った晩霜では、大胡町の桑園二二八ヘクタールが被害を受けた。ところが金丸地区には全く被害がなかった。晩霜は海拔三〇〇m以上の土地には少ないようで、金丸では過去三〇年間に一〜二回あった程度らしい。雹害の場合も同じような現象であるらしい。

## 第六章 生物

大胡町の標高は、南部がおよそ一四〇メートル、北部がおよそ六四〇メートルあり、その差は、なんと約五〇〇メートルもの大きい標高差がある。そのために丘陵帯の生物から、低山帯の生物までの垂直分布が見られるが、特に昆虫は、赤城山頂部付近の亜高山帯系のものも飛んで来ている。

しかし、調査日に制約をうけて、渡りを示す鳥類や、魚類など資料不足であり、特に微小な生物群や、水生生物群の採集調査回数は極めて少ないため末記録になった。当地内の池・沼群のほとんどが養鯉場で生物調査のための採集が困難であったためである。

それでも、薬師沼内のヒメフラスコモ・グンマフラスコモなどの車軸藻類と、同沼辺のミミカキグサや、養林寺境内のクモノスズダとか、国経オオムラサキをはじめとした昆虫相など、分布上や、生態上興味深い生物が認められた。

さらに個体数はもちろん、その種類数もかなり豊富である当地内の、これらの自然の貴重な生物たちが、一部魚類（タナゴなど）に見られはじめている。自然破壊からくる環境の変化によって消滅してしまうということのないように、より保護保存のための具体的な見とおしと実践を希望してやみません。

次に、当地内で確認した生物と一部生物研究の仲間からの資料を得て、当町内生物の種名を列記してみよう。

## 第一節 動物

### 脊椎動物門

哺乳綱 モグラ・イエコオモリ・ヤマウサギ・ニホンリス・イネズミ・ハタネズミ・ドブネズミ・ホンドイタチ。

### 鳥綱

ハシボソガラス・ハシブトガラス・オナガ・カケス・ムクドリ・スズメ・シメ・イカル・コカワラヒワ・マヒワ・アオジ・ホオジロ・ホオアカ・カシラダカ・ヒバリ・ハクセキレイ・セグロセキレイ・キセキレイ・イワミセキレイ・メジロ・シジュウカラ・ヤマガラ・エナガ・モズ・アカモズ・キレンジャク・ヒレンジャク・ヒヨドリ・サンコウチ・ウ・キビタキ・オオルリ・ウグイス・ヤブサメ・オオヨシキリ・コヨシキリ・セツカ・ルリビタキ・ジョウビタキ・コルリ・ツバメ・カワセミ・アカシヨウビン・アオゲラ・アカゲラ・コゲラ・カクコウ・ホトトギス・コノハズク・ハヤブサ・トビ・コサギ・シラサギ・カルガモ・コガモ・カイツブリ・カワラバト・キジバト・ウズラ・コジュケイ・キジ・ヤマドリ。

### 爬虫綱

アオダイショウ・ヤマカガシ・マムシ・ジムドリ・シロマダラ・シマヘビ・ヒバカリ・トカゲ・カナヘビ。

### 両生綱

ヤマアカガエル・トノサマガエル・ダルマガエル・ヒキガエル・ツチガエル・ウシガエル・アマガエル・イモリ。

### 魚綱

メダカ・ナマズ・タナゴ・カマツカ・モツゴ・ウグイ・アブラハヤ・フナ・コイ・ソウギョ・ドジョウ・ホトケドジョウ・シマドジョウ・ウナギ・ライギョ・カジカ。

### 軟体動物門

### 斧足綱

マシジミ・マメシジミ・タガイ・カラスガイ。

### 腹足綱

モノアラガイ・カワニナ・タニシ・ナメクジ・ヒダリマキマイマイ。

### 節足動物門

蜘蛛綱 コガネグモ・アシナガグモ・ジョロウグモ・オニグモ・ジグモ・ヒラタグモ・フクログモ・クサグモ・ササグモ・ザトウムシ・ハエトリグモ・アリグモ。

### 昆虫綱

### 直翅目

トノサマバッタ・オンブバッタ・イナゴバッタ・ヒシバッタ・シヨウリョウバッタ・クワムシ・スズムシ・マツムシ・セシジツユムシ・クサヒバリ・クビキリ。

ヤブキリ・キリギリス・ウマオイ・マダラカマドウマ・エンマコオロギ・オカメコオロギ・ケラ・ナナフシ・オオカマキリ・ヤマトコキブリ・チャバネゴキブリ・ハサミムシ。

### 横翅目

カミムラカワゲラ・オオヤマカワゲラ・フタスジモンカゲロウ・マダラカゲロウ・アカマ

ダラカゲロウ・ユミモンヒラタカゲロウ・シロハラコカゲロウ。

蜻蛉目 キイトトンボ・カワトンボ・ハダロトンボ・オニヤンマ・ギンヤンマ・カトリヤンマ・ハラビロトンボ・シオカラトンボ・ウスバキトンボ・ショウジョウトンボ・チョウトンボ・ミヤマアカネ・ナツアカネ・アキアカネ・ナニワトンボ。

半翅目 ミズカマキリ・アメンボ・トゲナベバタムシ・タガメ・タイコウチ・マツモムシ・ミズムシ・アワフキ・ツマドロオオヨコバイ・アオバハゴロモ・ニイニイゼミ・アブラゼミ・ミンミンゼミ・ツクツクホウシ・ヒタラシ・ハルゼミ。

脈翅目 ヘビトンボ・クサカゲロウ・ウスバカゲロウ・ホシウスバカゲロウ・キバネツノトンボ。

毛翅目 ムナグロナガレトビケラ・ウルマシマトゲケラ・コシマトビケラ・コカクツツトビケラ・ヒゲナガカワトビケラ。

鱗翅目 ヨツメノメイガ・ツトガ・クワノメイガ・イネコミズメイガ・オオウスベニトガリメイガ・カギバアオシヤク・クロスジアオシヤク・キマエアオシヤク・ズドロツバメアオシヤク・ユウマダラエダシヤク・ホシシヤク・キマダラツバメエダシヤク・ホタルガ・アゲハモドキ・ムラサキイラガ・イラガ・キンモンガ・イカリモンガ・

ホシカレハ・オビカレハ・マツカレハ・ツガカレハ・タケカレハ・アカヒゲドクガ・スギドクガ・マイマイガ・ドクガ・モンシロドクガ・ナシケンモン・オオケンモン・クロギシギシヤガ・ウスベニコヤガ・カブラヤガ・リンゴケンモン・カラスヨトウ・アメリカシロヒトリ・カノコガ・イボタガ・フクラスズメ・エビガラスズメ・クチバスズメ・モモスズメ・クロホウジヤク・セシスズメ・コスズメ・ベニスズメ・アオスジアゲハ・アゲハ・キアゲハ・クロアゲハ・オナガアゲハ・カラスアゲハ・モンキチョウ・キチョウ・ツマドロキチョウ・スジボソヤマキチョウ・モンシロチョウ・スジダロチョウ・ツマキチョウ・アサギマダラ・テングチョウ・ヒメウラナミジャノメ・ジャノメチョウ・ヒメジャノメ・コジャノメ・ヒカゲチョウ・クロヒカゲ・サトキマダラヒカゲ・コムラサキ・ゴマダラチョウ・オオムラサキ・スミナガシ・イチモンジチョウ・アサマイチモンジ・コミスジ・オオミスジ・ホシミスジ・サカハチチョウ・キタテハ・シータテハ・アカタテハ・ヒメアカタテハ・ヒオドリシチョウ・クジャクチョウ・ルリタテハ・ウラギンヒョウモン・ウラギンスジヒョウモン・ミドリヒョウモン・メスダロヒョウモン・クモガタヒョウモン・アカシジミ・ウラナミアカシジミ・ウラゴマダラシジミ・ミズイロオナガシジミ・ミドリシジミ・オオミドリシジミ・トラフシジミ・ゴイ



クジヤクチヨウ

シシジミ・ベニシジミ・クロシジミ・ミヤマシジミ・ヤマトシジミ・ルリシジミ・ツバメシジミ・ウラナミシジミ・ウラギンシジミ・ミヤマセセリ・ダイミヨウセセリ・アオバセセリ・ギンイチモンジセセリ・キマダラセセリ・コチャバネセセリ・オオチャバネセセリ・チャバネセセリ・イチモンジセセリ。

**精翅目** カブトムシ・ノコギリクワガタ・ミヤマクワガタ・コクワガタ・ヒラタクワガタ・アカアシクワガタ・カナブン・アオカナブン・クロカナブン・センチコガネ・ダイコクコガネ・エンマコガネ・テントウムシ・ナナホシ

テントウ・ニジユウヤホシテントウ・ジンガサハムシ・ウリハムシ・アオバアリガタハネカクシ・シロスジカミキリ・ノコギリカミキリ・トラカミキリ・ハナムグリ・オオゾウムシ・ゲンゴロウ・ミズスマシ・ヘイケホタル。

**膜翅目** セグロアシナガバチ・キアシナガバチ・フタモンアシナガバチ・コアシナガバチ・キイロスズメバチ・オオスズメバチ・モンズズメバチ・トクタリバチ・ドロバチ・スズバチ・セイホウ・アメリカジガバチ・ルリジガバチ・ベッコウバチ・クマバチ・ヒゲナガバチ・ニホンミツバチ・キバチ・ハバチ・ウマノオバチ・バラハキリバチ・ルリチユウレンジバチ・トゲアリ・ムネアカオオアリ・クロオオアリ・オオクロヤマアリ・フヤマアカアリ・サムライアリ・シロアリ。

**双翅目** ガガンボ・ウスバガガンボ・ブユ・ユスリカ・シギアブ・ハナアブ・アカウシアブ・シオヤアブ・イニバエ・キンバエ・ニクバエ。

**多足綱** アカヤスデ・オビヤスデ・ムカデ・ゲジ。  
**甲殻綱** スカエビ・サワガニ・アメリカザリガニ。

**環形動物門**

シマイシビル・イトミミズ・ブラナリア。

第二節 植物

種子植物門

裸子植物亞門

イチョウ科 イチョウウ。

イチイ科 カヤノキ。

イスガヤ科 イスガヤ。

マツ科 カラマツ・アカマツ・クロマツ。

スギ科 スギ。

ヒノキ科 ヒノキ。

被子植物門

双子葉植物綱

離弁花植物亞綱

ドクダミ科 ドクダミ・ハンゲシヨウ・フタリシズカ・ヒ

トリシズカ。

ヤナギ科 ヤマナラシ・アカメヤナギ・ナガバカワヤナギ・

ネコヤナギ・イヌコリヤナギ・シバヤナギ・オノエヤナ

ギ・キツネヤナギ。

クルミ科 オニグルミ・サワグルミ。

カバノキ科 ミヤマヤシヤブシ・ヤマハンノキ・ハンノキ・

ダケカンバ・シラカンバ。

ブナ科 クリ・アラカシ・シラカシ・クスギ・カシワ・シ

ズナラ・コナラ・エノキ・ハルニレ・ケヤキ。

タワ科 コウゾ・ハリグワ・タワサキ・カナムグラ・ヤマ  
グワ。

イラクサ科 オニヤブマオ・ヤブマオ・カラムシ・クサコ

アカソ・メヤブマオ・コアカソ・アカソ・トキホコリ・

ウワバミノウ・ムカゴイラクサ・ヤマミズ・アオミズ・

イラクサ。

ビヤクダン科 ツクバネ。

ヤドリギ科 ヤドリギ。

ウマノスズクサ科 ウマノスズクサ・フタバアオイ。

タデ科 ミズヒキ・シンミズヒキ・ハルトラノオ・イシミ

カワ・オオケダケ・サクラタデ・ホソバイスタデ・オオ

ミゾソバ・ヤナギタデ・サナエタデ・イヌタデ・サデク

サ・ハルタデ・タニソバ・ヤノネグラ・ウナギツカミ・

アキノウナギツカミ・ママコノシリスタイ・オオイスタ

デ・ミゾソバ・ミヤマタニソバ・ネバリタデ・オオネバ

リタデ・ニオイタデ・ハナタデ・ミチヤナギ・イタドリ・

ケイタドリ・スイバ・ヒメスイバ・ギシギシ。

アカザ科 シロザ・アカザ・ホソバアカザ・ケアリタソウ・

アメリカアリタソウ・コアカザ・ホウキギ。

ヒユ科 ヒナタイノコヅチ・イノコヅチ・ヤナギイノコヅ

チ・ヒユ・ホソアオゲイトウ・アオゲイトウ・イヌビ

ユ。

オシロイバナ科 オシロイバナ。

ヤマゴボウ科 ヨウシユヤマゴボウ。

ザクロソウ科 ザクロソウ・ツルナ。

スベリヒユ科 スベリヒユ。

ナデシコ科 ノミノツヅリ・ミニナグサ・ナンバンハコベ・

カワラナデシコ・フシダロセンノウ・フシダロ・オオヤ

マフスマ・ワチガイソウ・ツメクサ・ムシトリナデシコ・

ノミノフスマ・ウシハコベ・サワハコベ・コハコベ・ハ

コベ・オオヤマハコベ。

カフラ科 カフラ。

キンボウゲ科 ヤマトリカブト・ニリンソウ・イチリンソ

ウ・ヤマオダマキ・キバナヤマオダマキ・オオバシヨウ

マ・ポタンツル・ハンシヨウツル・タサボタン・センニ

ンソウ・ミツバオウレン・レイジンソウ・ヤマシヤタヤ

ク・オキナグサ・ケキツネノボタン・ウマノアシガタ・

キツネノボタン・タガラシ・カラマツソウ・ミヤマカラ

マツ・アキカラマツ・モミジカラマツ。

アケビ科 アケビ・ミツバアケビ・メギ・イカリソウ。

モクレン科 ホオノキ・タムシバ・チョウセンゴミシ・マ

ツブサ。

タスノキ科 ヤマコウバシ・ダンコウバイ・ミヤマクロモ

ジ・クロモジ・シロダモ・アブラチャン。

ケシ科 ヤマブキソウ・タサノオウ・ムラサキケマン・ヤ

マエンゴサク・ミヤマキケマン・タケニグサ。

アブラナ科 ハタザオ・ヤマハタザオ・ナズナ・コンロン

ソウ・イヌナズナ・マメダンバイナズナ・オランダガラ

シ・ミチバタガラシ・イヌガラシ・スカシタゴボウ・ダ

ンバイナズナ。

ペンケイソウ科 ホソバノキリンソウ・コモチマンネンダ

サ・キリンソウ・ミツバペンケイソウ。

ユキノシタ科 チダケサシ・アカシヨウマ・トリアシシヨ

ウマ・ゴトウヅル・クサアジサイ・ツルネコノメソウ・

ネコノメソウ・ウツギ・ヒメウツギ・コアジサイ・ヤマ

アジサイ・ノリウツギ・ウメバチソウ・バイカウツギ・

イワガラミ。

マンサク科 マンサク。

バラ科 ヤマブキシヨウマ・シモツケ・コゴメウツギ・キ

ンミズヒキ・ヘビイチゴ・ヤブヘビイチゴ・シモツケソ

ウ・アカバナシモツケソウ・ダイコンソウ・ヤマブキ・

ヒメヘビイチゴ・カワラサイコ・ミツモトソウ・キジム

シロ・ミツバツチダリ・オヘビイチゴ・ノイバラ・テリ

ハノイバラ・ミヤマニガイチゴ・クロイチゴ・ニガイチ

ゴ・モミジイチゴ・ナワシロイチゴ・エビガライチゴ・

クマノイチゴ・ワレモコウ・ヤマザクラ・ソメイヨシノ・

クサボケ・ズミ・オオウラジロノキ・ワタゲカマツカ・

カマツカ・ナナカマド・サビバナナカマド・ウラジロノキ。

**マメ科** ネムノキ・カワラケツメイ・エビスグサ・サイカチ・タサネム・ヤブマメ・ホド・ゲンゲ・ヤブウルズキ・フジキ・フジカンゾウ・ヌスビトハギ・ケヤブハギ・ヤブハギ・マルバスビトハギ・ノアズキ・コマツナギ・ヤハズソウ・ヤマハギ・メドハギ・マルバハギ・ネコハギ・イスハギ・マキエハギ・ミヤコグサ・イスエンジュ・ウマゴヤシ・クズ・トキリマメ・タシキリマメ・ハリエンジュ・タララ・アカツメクサ・シロツメクサ・ツルフジバカマ・ミヤマタニワタシ・タサフジ・スズメノエンドウ・ヤハズエンドウ・ヨツバハギ・カスマダサ・ナンテンハギ・フジ。

**フウロウソウ科** ゲンノシヨウコ・ミツバフウロ。

**カタバミ科** カタバミ・アカカタバミ・エンタチカタバミ・ムラサキカタバミ。

**ミカン科** イスザンシヨウ・コトサギ・キハダ・サンシヨウ。

**ニガキ科** ニワウルシ・ニガキ。

**ヒメハギ科** ヒメハギ。

**トウダイグサ科** エノキグサ・ニシキソウ・コニシキソウ・アカメガシワ・ヒメミカンソウ・トウダイグサ・タカトウダイ・ナットウダイ。

**ドクウツギ科** ドクウツギ。

**ウルシ科** ツタウルシ・スルデ・ヤマウルシ・ウルシ。

**モチノキ科** アオハダ。

**ニシキギ科** ニシキギ・ツルマサキ・ツリバナ・カントウマユミ・クロヅル。

**ミツバウツギ科** ゴンズイ・ミツバウツギ。

**カエデ科** アサノハカエデ・ウリカエデ・カジカエデ・コミネカエデ・イタヤカエデ・エンコウカエデ・メダスリノキ・イロハカエデ・オオモミジ・ヤマモミジ・ウリハダカエデ・イタヤメイゲツ・ミネカエデ。

**トチノキ科** トチノキ。

**アワブキ科** アワブキ・ミヤマホウソ。

**ツリフネソウ科** キツリフネ・ツリフネソウ。

**ブドウ科** ノブドウ・ヤブガラシ・ツタ・ヤマブドウ・エビヅル・サンカタブル。

**シナノキ科** カラスノゴマ・シナノキ。

**アオイ科** イチビ・ウスベニアオイ。

**マタタビ科** サルナシ・マタタビ。

**ツバキ科** サザンカ・ナツツバキ・チャノキ。

**オトギリソウ科** トモエソウ・オトギリソウ・コケオトギリ。

**スミレ科** ヒゴスミレ・エンザンスミレ・タチツボスミレ・サクラスミレ・アオイスミレ・コスミレ・マルバスミレ。

ケマルバスマミレ・スマミレ・ニオイタチツボスマミレ・アカ  
ネスマミレ・オカスマミレ・フモトスマミレ・アケボノスマミレ・  
スマミレサイシン・ツボスマミレ・ヒカゲスマミレ。

キブシ科 キブシ。

シユウカイドウ科 シユウカイドウ。

ジンチョウゲ科 ミツマタ。

グミ科 ツクバグミ・ナツグミ・アキグミ。

ミソハギ科 エゾミソハギ・ミソハギ・キカシグサ・ミズ

マツバ・ウリノキ。

アカバナ科 ヤナギラン・タニタデ・ミズタマソウ・アカ

バナ・オオマツヨイグサ・マツヨイグサ。

アリノトウグサ科 アリノトウグサ。

ウコギ科 コシアブラ・ヒメウコギ・ヤマウコギ・ウド・

タラノキ・タカノツメ・キヅタ・ハリギリ。

セリ科 ノダケ・アマニユウ・ノダケモドキ・シシウド・

ホタルサイコ・セントウソウ・ドクゼリ・ミツバ・ノチ

ドメ・オオチドメ・チドメグサ・イブキボウフウ・セリ・

ヤブニンジン・ウマノミツバ・カノツメソウ・ヤブジラ

ミ。

ミズキ科 ゴゼンタチバナ・ミズキ・クマノミズキ・ハナ

イカダ。

### 合弁花植物亜綱

ツツジ科 ミツバツツジ・レンゲツツジ・ヤマツツジ・コ

メツツジ・アブラツツジ・ナツハゼ・ウスノキ。

ヤブコウジ科 ヤブコウジ。

サトラソウ科 オカトラノオ・コナスビ・タサレダマ。

カキノキ科 ヤマガキ・マメガキ。

エゴノキ科 オオバアサガラ・エゴノキ・ハクウンボク。

モクセイ科 トネリコ・イボタノキ。

フジウツギ科 フジウツギ。

リンドウ科 リンドウ・ハナイカリ・アケボノソウ・セン

ブリ・ツルリンドウ。

キョウチクトウ科 テイカカズラ・キョウチクトウ。

ガガイモ科 イケマ・スズサイコ・ガガイモ・オオカモメ

ズル。

ヒルガオ科 ヒルガオ・ネナシカズラ。

ムラサキ科 ハナイバナ・オニルリソウ・ムラサキ・ホタ

ルカズラ・キュウリグサ。

タマツヅラ科 ムラサキシキブ・ヤブムラサキ・クサギ。

シソ科 キランソウ・ジュウニヒトエ・ジャコウソウ・ト

ウバナ・イヌトウバナ・ヤマトウバナ・ナギナタコウジ

ユ・セキヤノアキチヨウジ・ヤマハツカ・ヒキオコシ・

カメバヒキオコシ・オドリコソウ・ホトケノザ・キセウ

タ・メハジキ・シロネ・ヒメシロネ・ラシヨウモンカズ

ラ・ハツカ・ヒメジソ・イヌコウジュ・ウツボグサ・ア

キノタムラソウ・ミヤマタムラソウ・キバナアキギリ・

タツナミソウ・ヤマタツナミソウ。

ナス科 クコ・ハシリドコロ・イスホウズキ。

ゴマノハグサ科 アゼナ・トキワハゼ・ムラサキサギゴケ。

ママコナ・ミゾホウズキ・シオガマギク・コシオガマ。

オオヒナノウスツボ・ヒキヨモギ・アゼトウガラシ・ウ

リクサ・タチイスノフグリ・クワガタソウ・イスノフダ

リ・オオイスノフグリ・タガイソウ。

タヌキモ科 ミミカキダサ。

キツネノマゴ科 キツネノマゴ。

ハエドクソウ科 ハエドクソウ・ナガバハエドクソウ。

オオバコ科 オオバコ。

アカネ科 ハナムダラ・ヒメヨツバムダラ・キタムダラ・

キスタソウ・ヤマムダラ・オオバノヤエムダラ・ヤエム

ダラ・ヨツバムダラ・ホソバノヨツバムダラ・オクタク

ラムダラ・ヘタソカズラ。

スイカズラ科 ツクバネウツギ・ベニバナツクバネウツギ・

メツクバネウツギ・スイカズラ・ガマズミ・コバノガマ

ズミ・オオカメノキ・オトコヨウゾメ・ヤブデマリ・ゴ

マキ・ニシキウツギ・キバナウツギ。

オミナエシ科 オミナエシ・オトコエシ。

マツムシソウ科 ナペナ・マツムシソウ。

ウリ科 アマチヤヅル・カラスウリ・キカラスウリ。  
キキョウ科 ソバナ・ツリガネニンジン・シヂンヤジン・

ヤマホタルブクロ・ホタルブクロ・ツルニンジン・ミゾ  
カクシ・サワギキョウ・キキョウ。

キク科 ノコギリソウ・ヤマノコギリソウ・ノブキ・ブタ

クサ・ヤマハハコ・ヤハズハハコ・オトコヨモギ・イス

ヨモギ・ヤマヨモギ・ヨモギ・シロヨメナ・ノコンギク。

ヒメシオン・ゴマナ・シラヤマギク・ハコネギク・オケ

ラ・コバノセンダングサ・センダングサ・アメリカセン

ダングサ・コセンダングサ・モミジガサ・コウモリソウ。

ヤブタバコ・コヤブタバコ・ガントビソウ・ミヤマガン

タビソウ・トキンソウ・アワコガネギク・リュウノウギ

ク・ノアザミ・タイアザミ・ノハラアザミ・ダンドボロ

ギク・ヒメジオン・アレチノギク・ヒメムカシヨモギ・

ハルシオン・ヤナギバヒメジオン・オオアレチノギク。

アズマギク・ヒヨドリバナ・ミツバヒヨドリ・ヨツバヒ

ヨドリ・フジバカマ・サワヒヨドリ・ハキダメギク・ハ

ハコダサ・アキノハハコダサ・チチコダサ・キツネアザ

ミ・ヤナギタンポポ・オグルマ・カセンソウ・タカサゴ

ソウ・ニガナ・シロニガナ・シロバナニガナ・オオバナ

ニガナ・オオジシバリ・ユウガギク・カントウヨメナ。

アキノノゲシ・ヤマニガナ・ムラサキニガナ・タビラコ。

ヤブタバコ・センボンヤリ・ウスユキソウ・マルバダ

ケブキ・オタカラコウ・カシワバハダマ・フキ・コウゾ  
リナ・フクオウソウ・オオニガナ・ミヤコアザミ・セイ

タカトウヒレン・コウリンカ・キオン・ノボロギク・タムラソウ・コメナモミ・メナモミ・アキノキリンソウ・オニノゲシ・ノゲシ・ヤブレガサ・ハバヤマボクチ・オオヤマボクチ・エゾタンポポ・カントウヤマボクチ・エゾタンポポ・カントウタンポポ・オナモミ・ヤクシソウ・オニタビラコ。

#### 単子葉植物綱

イネ科 アオカモジダサ・カモジダサ・コスカダサ・ヤマヌカボ・ヌカボ・スズメノテッポウ・コブナダサ・トダシバ・ヤマカモジダサ・サイトウガヤ・ヒメノガリヤス・カモガヤ・メヒシバ・アブラススキ・イスビエ・オヒシバ・カゼタサ・ニワホコリ・オオニワホコリ・オニウシノケダサ・ウシノケダサ・トボシガラ・オオウシノケダサ・ドジョウツナギ・ウシノシツペイ・コウボウ・チガヤ・チゴザサ・ミノボロ・ネズミムギ・コメガヤ・ススキ・タチネズミガヤ・ネズミガヤ・コチヂミザサ・チヂミザサ・スカキビ・スズメノヒエ・タサヨシ・ヨシ・ツルヨシ・スズメノカタビラ・ナガハダサ・アキノエノコロダサ・キンエノコロ・エノコロダサ・ムラサキエノコロ・オオアブラススキ・ネズミノオ・キツネガヤ・メガルガヤ・カニツリダサ・シバ。

カヤツリダサ科 オオイトスゲ・シヨウジヨウスゲ・シバスゲ・ヒメカンスゲ・カサスゲ・イトスゲ・マスタサス

ゲ・ヒゴクサ・ヒカゲスゲ・アオスゲ・カンスゲ・タガネソウ・アゼスゲ・チャガヤツリ・クダガヤツリ・ヒナガヤツリ・コゴメガヤツリ・カヤツリダサ・ウシクダ・ハリイ・シカタイ・ヒメヒラチンツキ・ノチンツキ・チンツキ・ヤマイ・ホタルイ・アブラガヤ・マツカサスキ。

#### サトイモ科

モキシヨウ・ムラサキマムシダサ・ウラシマソウ・カラスビシヤク。

#### ウキタサ科

ウキタサ。

#### ツユクサ科

ツユクサ。

#### イダサ科

イ・コウガイゼキシヨウ・ホソイ・タサイ・スズメノヤリ・ヤマスズメノヒエ。

#### ユリ科

ネバリノギラン・ノビル・ヤマラッキョウ・キジカタシ・ウバユリ・ツバメオモト・スズラン・ホウチヤクソウ・カタタリ・ヤブカンゾウ・ノカンゾウ・ユウスゲ・コバギボウシ・オオバギボウシ・ヤマユリ・ヒメヤブラン・マイヅルソウ・ノギラン・ジャノヒゲ・オオバ

ジャノヒゲ・ツクバネソウ・ワニダチソウ・アマドコロ・ツルボ・ユキザサ・サルトリイバラ・タチシオデ・シオ

デ・タケシマラン・ヤマジノホトトギス・ヤマホトトギ

ス・エンレイソウ・シユロソウ・アオヤギソウ。

ヒガンバナ科 ヒガンバナ・キツネノカミソリ。

ヤマノイモ科 タチドコロ・ヤマノイモ・コウモリドコロ。

キクバドコロ・オニドコロ

アヤマ科 ノハナシ ヨウブ・ヒメシヤガ・アヤメ。

ラン科 エビネ・ギンラン・キンラン・シユラン・カキラン・オニノヤガラ・タモキリソウ。

シダ植物門

ヒカゲノカズラ科 ヒカゲノカズラ・マンネンズギ・タチマンネンズギ・トウゲシバ。

トクサ科 スギナ・トクサ。

ハナワラビ科 ナツノハナワラビ・フユノハナワラビ。

ゼンマイ科 ヤマドリゼンマイ・オニゼンマイ・ゼンマイ・ヤシヤゼンマイ。

イノモトソウ科 タジヤクシダ・ヒメウラジロ・イスシダ・オオレンシダ・タチシノブ・ワラビ・イノモトソウ。

シノブ科 シノブ。

オシダ科 ナンタイシダ・サトメシダ・ミヤマメシダ・イヌワラビ・ニシキシダ・ヤマイヌワラビ・ヘビノネゴザ。

ヒロハヘビノネゴザ・ホシダ・ヤブソテツ・ミヤマシダ・シラネワラビ・オシダ・ベニシダ・タマワラビ・ミヤマ

タマワラビ・オオイタチシダ・ヒメイタチシダ・ホソバシヤシダ・シヤシダ・オオヒメワラビ・ハクモウイノ



タモノスシダ

デ・イヌガンソク・クサソテツ・タチヒメワラビ・ゲジゲシシダ・ミヤマワラビ・ツヤナシイノデ・イワシロイノデ・イノデ・ジュウモンジシダ・スリワラビ・ハリガネワラビ・シロジクハリガネワラビ・ニッコウシダ・ヒメシダ・ヒメワラビ・ミドリヒメワラビ。

シシガシラ科 シシガシラ・コモチシダ。

チャセンシダ科 トラノオシダ・コバノヒノキシダ・イワ

トラノオ・クモノスシダ。

ウラボシ科 ミツデウラボシ・ホチイシダ・ヒメノキシノ

車軸藻植物門

ブ・ノキシノブ・ミヤマノキシノブ・ビロードシダ・イ  
ワオモダカ。



桑畑のつづく道

シヤジクモ科 ヒメフラスコモ・ダンマフラスコモ・シヤ  
ジクモ・カタシヤジクモ・アメリカシヤジクモ・ハダシ  
ヤジクモ。



大胡金丸地区のたばこ畑



歴

史



大見監（山の上の碑から）

## 第一章 古代

## 第一節 先土器時代

群馬県内及びその周辺には火山が多い。これらの火山がさかんに爆発をくりかえし、それに伴う火山灰が多量に降下して、現在のローム層（赤土）をつもらせた頃、すなわち、今から数万年前から、この日本列島には人間が生活していたといわれる。

この時代の人々は、まだ土器は使わず、うちかいた石器を道具として使っていたのであり、この時期を先土器時代と称している。ローム層が形成されつつあった時代であるから、この頃の人々が使用した道具、すなわち石器は、このローム層（赤土）の中から出てくる。

大胡町でも、この時代の石器が発見されている。この頃からすでに本町にも人々が生活していたのである。

この時代の大胡町の遺跡については、岩宿遺跡の発見者である相沢忠洋氏によって調査されたものが多い。調査された遺跡は次のようなものである。（河出書房、日本の考古学「先土器時代」日本先土器時代主要遺跡地名表による）

- (1) 水押遺跡（堀越字水押） 尖頭器、剝片石器等
- (2) 三屋遺跡（茂木字三屋） 尖頭器、搔器、石錘、刃器、剝片等
- (3) 一本松遺跡（河原浜字一本松） 搔器、削器、刃器、石核、剝片等
- (4) 上大屋遺跡（上大屋） 尖頭器、剝片石器等

右のうち、三屋遺跡については相沢忠洋氏によっても報告されているが、『日本の考古学―先土器時代』（河出書房）によると、「三屋遺跡は粗悪な黒曜石を原料としてもちいた、片面調整の尖頭器を出した遺跡としてはやくから紹介されている。その尖頭器の片面を調整した剝離技術からいえば、古式の尖頭器文化とみえるが、その技術や石器の組成からすれば、それほど古い文化ではない」とある。（戸沢充則、関東地方の先土器時代）

ここで言う尖頭器とは、先端のところがた石器であり、「石槍」または「槍さき形尖頭器」という意味をもつものである。（日本の考古学―先土器時代・戸沢充則「尖頭器文化」）

右の各遺跡の他に、最近では滝窪の公民館裏・堀越字東尾引・茂木字西小路等でこの時代の石器が発見されている。いずれにせよ、この地域にも遠い赤土の時代から人々の生活が営まれていたのであり、そこに見い出せる石器一つにも、人間の長い歴史の跡が秘められているのである。

## 第二節 縄文時代

### 一 概 要

先の石器だけの文化に対し、石器の他に土器を使用するようになった時代である。使用した土器の表面に縄目の文様をつけたものが多いので、これをとって縄文式土器と称し、この土器を使っている時代ということで縄文時代といっている。

縄文時代は、紀元前三世紀の頃まで、数千年という長い期間にわたって続いた。この時代以後現在までの約二千年の間に急速な進歩をとげた文化に対し、この時代は、その数倍という長い年月を経過しているが、文化発達の歩みは



縄文式土器(中期) (茂木字上ノ山出土、福祉センター保管)



石棒(河原真字山上遺出土・品川時次郎氏蔵)

遅く、その生活は、狩猟、漁撈、植物採集といった採集経済に基礎をおいたものである。最近では縄文時代終末期には農業生産の芽生えがあったという学説も出ている。

この時代は、一般に早期、前期、中期、後期、晩期の五つに分けているが、その生活の様子は、発掘調査によって明らかにされてきている。しかし、本町の場合発掘が行われたのはほんの一、二の例にすぎない。一方畑等においては、この時代の土器片を多く採集することができる。これは、長い間の畑等の耕作にともなって、地中にあった土器が掘りおこされたものであり、これらが散布している地域では、その下にこの頃の遺構、すなわち、住居の跡等の存在が推定されるのである。それ故に、これらの土器片を表面採集することによって、この頃の生活を知る一つの手がかりは得ることができる。以下、本町に住む山岸賢司君が町全域にわたってこまめに歩いて採集し、それをまとめた地名表があるので、これがかかげておく。

散布地	標高(m)	早期	前期	中期	後期	晩期	備 考
滝窪 字 金丸	五〇〇	○					金丸分校の北約三〇〇メートル、道東へのびる台地上、散布は極少。
"	四七〇	○					金丸分校東南約四〇〇メートル、小川に接する三角状の台地上、散布多い。
"	四一〇	?				○	寺沢沼北側の台地、散布多い。
" 白草	三九〇			○			白草十字路をはさんだ周囲の台地上、散布は極少。
"	三八〇	○					白草のはぼ中央で、県道の南約一五〇メートル、台地の東端水田との比高約四メートル、散布極少。
" 細田	三三〇	?	○				田ノ上の北、寺沢川東の舌状地東南端、散布範囲は狭いが散布量多い。現在削平のため無し。
" 黒沢	三三〇		○				田ノ上の東、西側を谷に囲まれた舌状台地の南端、散布範囲は広く、散布量やや多い。
" 田ノ上	三三〇	○	○				田ノ上地区のはぼ中央、畑地、散布範囲広く散布やや多い。
" 西天神	二八〇	?					田ノ上の西方、山林を背にした舌状台地、散布少ない。
" 西原	二八〇		○				齊藤一雄氏宅周辺の台地、群馬大学史学研究室で一部調査。
" 道元坂	二八〇		○				県道四ツ塚線北側、寺沢川東の台地上、散布範囲広く、散布やや多い。
" 新井	二七〇	○	○				群馬用水の上の台地、散布多い。
" 吹上	二五〇		○				新井稚蚕飼育所の南一帯、散布量少ない。
" 堂城皆戸	二五〇			○			滝窪公民館の南約三〇〇メートル、寺沢川西に接する台地散布範囲やや広く散布多い。
" 平皆戸	二六〇		○				滝窪小学校の北三〇〇メートル、飼育所のある台地、散布少ない。
" 前滝	二三〇	○	○				前滝の十字路南の舌状台地、散布範囲やや広いが散布量少ない。

横沢字沼田	二四〇						瀧窪小学校の西で、水田を越えた台地の東側、散布量極少である。
〃 字持 四反田	二二〇						横沢部落北東方で、江木 <sup>台地</sup> から上る道路東側、散布範囲やや広く、散布多い。
〃 五反田	二二〇						寺沢川の西に接する舌状 <sup>台</sup> 、大半は蟹地により破壊 <sup>壊</sup> 。
〃 内出	二二〇						寺沢川西に位 <sup>置する高</sup> 、散布範囲、散布やや多い。
〃 西原	二〇〇						横沢の神社の北側台地、少量散布。
〃 久保勢戸	一九〇						横沢部落の最西南、散布範囲やや広いが、散布量は少ない。
〃 前原	一八〇						横沢部落南、寺沢川西の舌状畜地、散布広く、散布多い。
〃 向山	一九〇						向山 <sup>落馬辺</sup> の畑地に広く散、散布やや多い。
〃 此 <sup>木</sup> 崎	一八〇						寺沢川東の台地に広く散布、切り通れには住居跡の断面が出ている。
堀越字一丁田	二六〇						部落周辺の畑地一帯にかなり広く散、散布量も多い。
〃	二四〇						飼育所東方の舌状台地、山林中に少量 <sup>散布</sup> 。
〃 東白	二四〇						浄水場の北北東、六〇メートルの丘陵上。
〃 西白	二四〇						浄水場北の丘陵上、散布やや多し。
〃 諏訪	二四〇						浄水場西の丘陵上にやや広く散布、散布多い。
〃 東尾引	二四〇						一丁田の西、舌状台地の東側、土地 <sup>改良</sup> により破壊。
〃 西尾引	二三〇						西側に水田の開ける舌状台地の中央散布少し。
〃	二四〇						台地の東側、土地 <sup>改良</sup> により破壊か。



永閑寺	一八〇	〇	〇	〇	五十山部落西、米野街道三又路西側台地、散布少ない。
足軽町字米野道下	一六〇	?	〇	〇	足軽部落北、米野街道南の東傾斜の台地、散布範囲やや広いが、散布少ない。
西久保	一五〇	〇	〇	〇	少年の家の西、鉄道南の台地の東側散布はごく少ない。
勝山	一五〇	〇	〇	〇	新沼東側の北にのびる台地、散布量は少ない。
東今城	一四〇	〇	〇	〇	足軽町土師遺跡発掘の際発見、関山期のもの、群馬大学調査、今城跡の東五〇メートル、石器片とともに土器片散、散布量は極少である。
東今城	一四〇	〇	〇	〇	新沼の南、大正用水の前後にのびる台地に少量散布。
西今城	一四〇	〇	〇	〇	新沼の西南方、上毛電鉄の批の台地に少量散布。
河原浜字二ツ塚	二〇〇	〇	〇	〇	荒砥川東の鼻毛石方面から張り出す扇状地に散布、土地により散佈。
西浦	二〇〇	〇	〇	〇	応昌寺西側の道切り通しに、跡骸面が見られる。
新地	一九〇	?	〇	〇	河原浜集会所周辺の畑地に広く散、量も多い。
八ツヶ峯	一九〇	〇	〇	〇	集会所東約二五〇メートル、小川の西の舌状台地、散布は少ない。
日光道東	一九〇	〇	〇	〇	集会所東約三〇〇メートル、小川の東台地、散布多い。
向浅見	一八〇	〇	〇	〇	河原浜部落の南方、荒砥川東の大きな台地上に、量も多い。
山上道	一八〇	〇	〇	〇	東邦織造の東の台地にごく少量散布。
一本松	一七〇	〇	〇	〇	河原浜部落北方の台地、宮城境からのびる。散布は広く量も多い。特殊磨石出土。
大胡字雷電山	一七〇	〇	〇	〇	金蔵寺川の西側台地、散布はごく少ない。
上浅見	一八〇	〇	〇	〇	
西浅見	一八〇	〇	〇	〇	
六反田	一八〇	〇	〇	〇	



標高	100~150m	151~200m	201~250m	251~300m	301~350m	351~400m	401~450m	451~500m	501m以上	合計
早期	4	8	3	1	1	1	0	2	0	20
前期	17	26	19	4	3	0	0	0	0	69
中期	8	16	11	4	2	1	0	0	0	42
後期	8	18	9	1	1	0	0	0	0	37
晩期	0	1	0	0	0	0	1	0	0	2
合計	37	69	42	10	7	2	1	2	0	170

右の表は、前述のように、あくまでも現在表面に散布している土器片、石器等を採集することによってまとめたものである。表面採集には、おのずとそれなりの限界がある。すなわち、現在山林などになっている場合には採集ができないこと、また、当時の遺構は地下に埋まっているものであり表面に出ている土器の散布からは、その遺構の規模、住居が何戸位ままとまってあったか（集落の規模）等の核心にふれる資料は得にくい。しかし、この時代のことを考える手がかりは与えてくれる。右の地名表を、時期及び標高別にして一表にまとめてみると上の表のようになる。

この表を一見して気のつくことは、標高三〇〇メートル以下の地域の遺跡数が、それ以上の地域に比較して少ないことである。しかし、これは本町の場台、標高三〇〇メートル以上の地域は、滝窪字田ノ上から上であり、その幅は、二・五キロメートルと一・五キロメートルと幅が狭く、本町全体の面積に比較

(山岸賢司作成)

して、その占める比率が小さいということにも原因がある。そこで、標高三〇〇メートル以上の地域を広くもつ隣村の宮城村の縄文式土器の散布状態も参考にして両町村をあわせてみると、上の表のようになる。(参照「宮城村誌」)

標高 時期	100~ 200m	200~ 300m	300~ 400m	400m 以上	計
早 期	10	7	9	6	32
前 期	43	37	28	8	116
中 期	25	20	10	2	57
後 期	26	17	7	3	53
晩 期	1	0	2	1	4
計	105	81	56	20	262

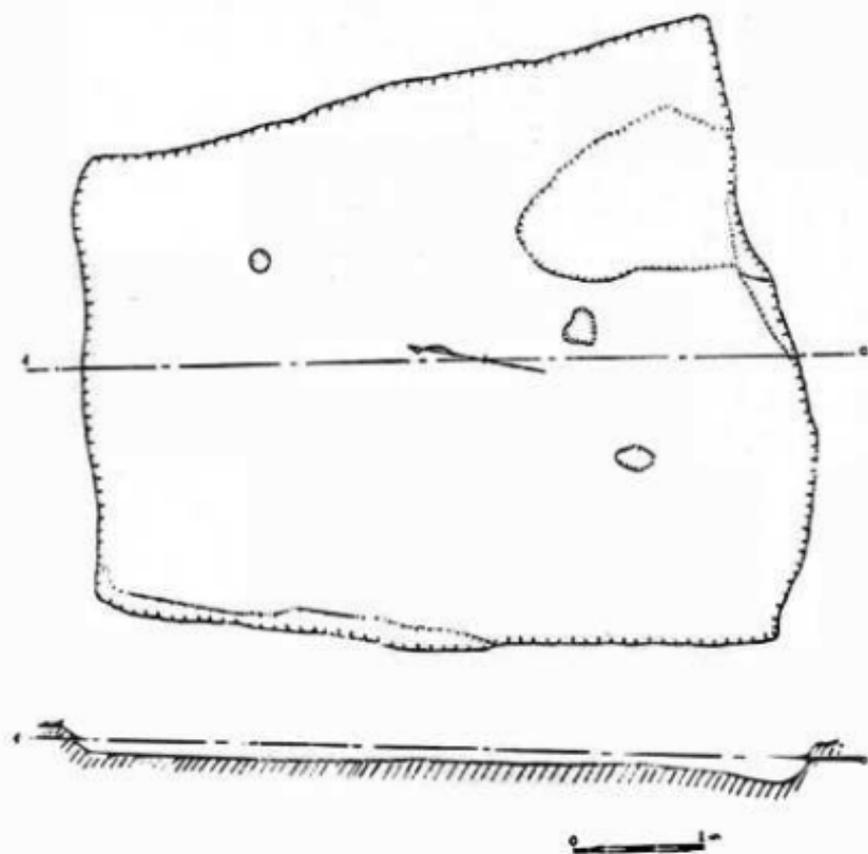
集落の発掘調査による正確な資料と、当時の自然地形・気候条件等も加味して考察する必要がある。

しかし、本町で発掘調査が実施されたものはわずかに二例にすぎず、集落に関するくわしいことは明らかでない。発掘調査の実施された遺跡について、その概略は次のとおりである。

## 二 足軽町五号住居跡（「すぎく会誌」4松島栄治「大胡町足軽町遺跡の発掘調査」による）

遺跡は堀越字新宿に位置し、北より南に向って走る小舌状台地の東側、西より東に傾斜するところにある。

本住居跡は縄文式文化前期土器を使用する住居である。しかし、惜しいことには、開田作業においてその大部分は



足軽町遺跡第五号住居跡実測図（群馬大学史学研究室実測）

けずりとられてしまい、壁はもちろん、床面まで破壊されわずかにその輪郭をとどめる程であった。その形は南面が開き、少々南から東にふれた台形で、その大きさは南北二、八〇メートル、東西はその中央で約二、二〇メートルである。周溝らしいものは、西辺の北に寄った部分に多少認められるが、そのものについてはなお検討の余地がある。炉跡、柱穴の位置は床面が荒されているために不明である。

遺物はすでに開田作業の際大部分出土してしまい、今回の調査ではわずかに残された土器片と縦形の石匙、他に粗く打ちか

いた石片の二、三の出土をみたにすぎない。

なお、土器片はその胎土中に多く繊維を含み、その施紋はいわゆる前期の関山式ならびに黒浜式に類するものがあった。

この他に、住居跡の一部及び遺跡の一部が調査されたものが二例ある。

### 三 滝窪縄文遺跡（滝窪字西原三四八）

住居跡の炉とその周辺部が調査された。住居跡全体を発掘したのでないため、その規模及び炉の住居跡内に占める

位置等は明らかでない。

炉は割れ石を用いてほぼ長方形にかこったものである。炉の東西は長さ四〇センチほどの石各々一石を使用し、南北は二〜三石の石を以って囲っている。その大きさは内側で計測すると、東西巾は三五センチ（南）と三八センチ（北）で、南北巾は四〇センチ（西）と三〇センチ（東）である。炉の南約五〇センチのところには大型の甕型土器がその約半分までを住居跡床而下に埋め込んだかたちでおいてあった。土器の底部は欠除していた。この他に土器口縁部等の土器破片が数個出土しているが、いずれも中期（加曾利EⅡ）に属するものである。

遺物はこの他に打製石器が六片出ている。

### 四、正治のふせ埴（棚越字正治）



炉と土器出土状態（滝窪）



(彌治字正治出土)  
(大御町教育委員会保管)

畑の平夷中畑に接する道端に発見されたもので、荒砥川西の台地東端に位置する。土器は、赤土といわれる関東ローム層に穴を掘って、そこに口を下にして埋め込まれていた。土器の底の部分はすでになくなっていたが、最初から底をかいて埋めたものか、後世かいたものか明らかでないが、発見者の山岸賢司君の言によると、埋め込んだ土器の上に川原石がおかれてあったとのことであり、これが当初からおかれたもので動いてないとすれば、土器を埋めるとき意識して底をかいいたものと考えられることまでできる。この土器はローム層中に単独に埋められたもので、住居跡内に埋められていたものではない。

土器の大きさは、高さ六八センチ、口縁部の直径五一、五センチ、胴部の直径四八センチとかなり大型である。土器内部には、まわりの土とはちがう黒褐色土がいつばいにつまっていたが、およそ半分から下には、長さ五センチ内外の木炭片が多く含まれていた。特に下約四分の一位の所に多かった。

この土器は、縄文時代後期の初期に属するものである。文様は写真に見るような曲線的な構図をもつ沈線文が描かれ、土器表面はよく研磨されていて縄文はみられない。

このように甕を埋めこんだものは他の地域においても甕棺葬としていくつか報告されている。この正治の例も骨粉等は見い出すことはできなかったが、この甕棺葬の一種と考えることができようか。なおこの場合、人体を直接入れるのではなく、洗骨等の方法で白骨化したものを埋葬したとも推察されている。(河出書房『日本の考古学Ⅱ縄文時代』埋葬)

なお、この甕の出土した付近は、甕の時期とはややずれるが縄文時代中期の住居跡もいくつかあったようで、伊跡



副越字正治出土の土器(中期)  
(大胡町教育委員会保管)

と思われる焼け土も出ていたが、平夷された後で調査は出来なかつた。

以上のように調査例は少ないが、その散布の密度はかなり高いことからして、赤城南麓に位置する本町一体は、縄文時代の頃にも、現在のわれわれが生活舞台としている地域を中心にして、かなりの数の人たちがその生活を営んでいたと考えられるのである。

なお、先土器時代から縄文時代に属する本町の出土品は、故鹿沼蔵三氏が個人的趣味をもって多く収集していた。これらの出土品もほとんどが表面採集によるもので、学術的調査を経たものはないが、貴重な資料も含まれているので、その写真を掲載しておく。現在これらのものは、埼玉県秩父総合博物館で保存している。



〔石槌〕(横沢出土)



〔石 槌〕  
(左から、堀越八幡峯・木押・紫崎出土)



縄文式土器前期(芽木三ツ屋出土)



〔土偶・土製腕環その他〕  
(土製腕環 東株出土)



〔縄文式土器、中期(勢形式)〕  
(横沢紫崎出土)



〔縄文式土器・晩期〕  
(堀越西山出土)

大胡町内の出土品 (秩父総合博物館蔵)



〔打製石斧〕(左から、横沢・横沢・白草・芽木・横沢・横沢出土)



〔磨製石斧〕

(上段左から、水押・横沢・一本松・横沢・水押・堀越終・河原沢)  
(下段左から、五十田・栗崎・金丸寺沢・一本松・三ツ屋出土)



〔礮器〕(尾引出土)



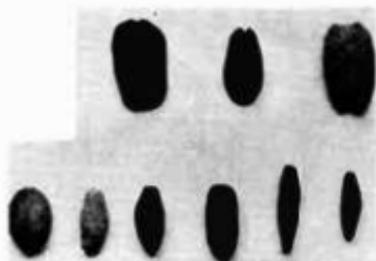
〔石皿〕(堀越・阿佐美出土)

大胡町内の出土品(秩父総合博物館蔵)



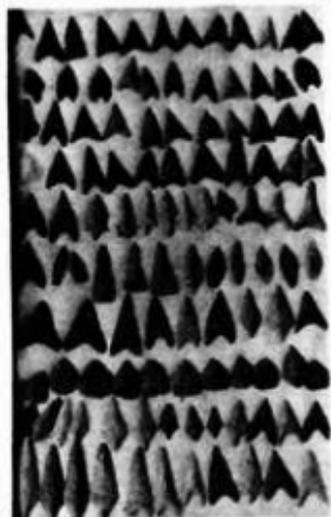
〔石 槍〕

(左から、五十山・田ノ上・浅見(越  
越)・堀越出土)



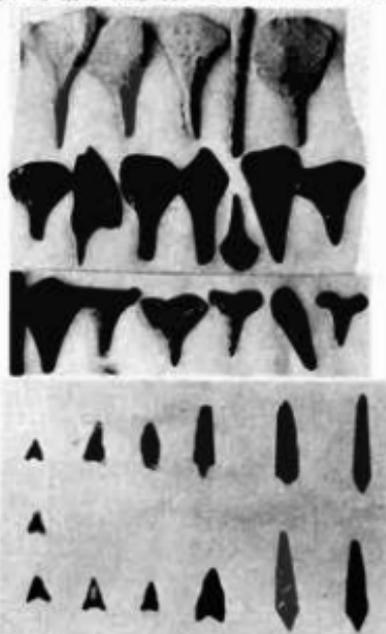
〔石鏢・土鏢〕

(上段左から、東終・木押・茂本新山)  
(下段左から、東終・堀越高牧・堀越・白草・窟町・堀越)



〔石鏢〕町内各地

〔鏢〕一



〔石鏢・石槍〕

(上段左から  
栗鉦・滝窪・白草・大胡・大胡・木押)  
滝窪  
白草・窟滝・五十山・横沢・堀越・木押)



一 〔石鏢・鏢〕町内各地

大胡町内の出土品 (秩父総合博物館蔵)

### 第三節 弥生時代

#### 一 概要

狩猟・漁撈・植物採集といった採集経済に基礎をおいた縄文時代に対し、水稲耕作がはじまり、農業生産を基礎として発展したといわれる時代である。この新しい文化も縄文時代から急激に変化したものではない。それまで長い期間にわたってつちかわれてきた縄文文化を基礎とし、その上に発展したものである。このことは、本町金丸出土の弥生式土器の上にもあらわれている。

本町におけるこの時代の様子を山岸賢司君の分布調査の結果でみると次表のとおりである。

所在地	標高	備	考
滝窪字金丸	四一〇m	寺沢沼北側山林のやや西の舌状台地上。土器出土。	
堀廻字東尾引	二五〇	一丁田の西方、丘陵性舌状台地の東側。	
並木	二二〇	台地上、畑地および一部宅地、有孔磨製石鏝、石剣（現在不明）等も散布	
新畑	二二〇	菜師沼南方約三百米、東側の山林に接する傾斜地、およびこれより南数十米の畑地、土器片散布、東山林への広がりも予想される。(?)	
新畑	一八〇	長善寺の西方の台地、分布範囲広く100m×200m、土器片散布(?)	
五十山	一五〇	上大屋の最も東寄り。八光沼の北約三百米にある低台地の西側の畑及び宅地一帯、土器片散布。	
上大屋字東山	一五〇	上電大胡駅の西方約二百米の台地上の現地、一部宅地(?)	
茂木字天神	一三〇	天神より続く台地上、大正用水南の畑地（深沢啓一蔵）(?)	
諏訪東			

(山岸賢司作成)

右は縄文時代の分布調査同様表面採集による調査であり、発掘調査によって確認されたものではない。

これをみてまず気の一つことは、縄文時代に比較してその散布地が非常に少ないことである。また、その散布地の標高は、金丸遺跡の四一〇メートルを除くと二五〇メートル以下のところに多い。しかし、隣村の宮城村を見ると三一〇メートルから四四〇メートルの間に七ヶ所の散布地が認められており、(宮城村誌)赤城南面においては一概に標高の低いところに集中しているとも言いがたい。

弥生時代は大きく前期・中期・後期の三つに分けられるが、本県にその影響があらわれるのは中期の時期からである。本町においても発見される土器片は中期のものが多く、金丸遺跡においては、偶然のことから完形の土器が発見されたが、これらは中期の前半の頃に属するものと考えられ、本県弥生文化のうちでも早い頃に属するものである。

## 二 金丸遺跡

この遺跡は学術発掘はされていない。そのため土器の出土状態やどんな遺構があったかは不明である。おそらく弥生時代の住居跡があったものと考えられるがその形や規模はわからない。しかし、出土した土器は、本県弥生文化を考える上でも貴重な資料である。ここでは、出土した土器についてその特長を記述しておく。なお、この記述にあたっては、本県の弥生文化を研究している神沼恵介氏に実測図の提供と御教示をいただいたことを付記しておく。



木葉痕 1



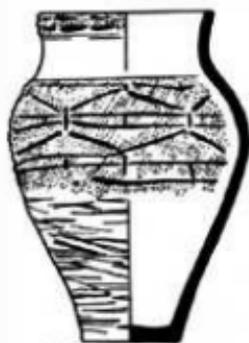
2



3



5



網代痕 4



6



7

(1) 壺形土器 (図版番号1)



壺形土器 (1)

煤が附着しており、火にかけられた様子がうかがえる。

(2) 壺形土器 (同2)



壺形土器 (2)

口縁部には折り返しがあり、最大幅を上の方にもつ縦長のやや丸味をもった胴部と接合する。口縁部上端はやや小波状に凸凹がある。文様は全面に縄文をつけているが、筒状の頸部だけ磨消して無文にしている。1の土器と同様に煤の附着が認められ火をうけた痕跡を残している。

(3) 壺形土器 (同3)

口縁部と底の部分が欠けている。胴部最大幅は中位より上にあり、頸部から最大幅にかけて大きく張り出す器形である。胴下部は筒状窯による条痕文が乱雑にある。

(4) 壺形土器 (同4)



壺形土器 (4)

口縁部には折り返しがあり、最大幅を中位より上にもち頸部からの張り出しのよい胴部と接合する。底には網代の圧痕が見られる。口縁部の折り返しの部分には、縄文を地にしその上に篋描の刻みを二段入れている。頸部は磨消している。胴部の上半分は縄文の地に二段の連繫三角文を施し、下半分は櫛状篋による朱痕文をやや横向きにつけている。土器表面には煤が付着しており、剝落も見られ、火をうけた様子がみられる。内面には輪積み製作の痕跡が部分的に残っている。

(5) 甕型土器 (同5)

底の部分が欠けている。口縁部はやや外反していて、頸部は短かく、胴の部分は上位でややふくらむ器形である。文様は全面に櫛状篋による横走、あるいは、斜走の条痕文をつけた後、口頸部だけは篋で消している。内外ともに煤の付着、剝落が明瞭で、火をうけた痕跡をはっきりとどめている。

(6) 脚付土器 (同6)

短かい脚部を残すだけで、この上につく器形は明らかでない。文様は縄文を見るだけである。

(7) 小型土器 (同7)

上半分を欠くが、現状ではコップのような形を示している。底は上げ底である。文様は縄文をころがした上に「U」字文を上下各交互に横に配している。

これらの他に、口縁部がやや外反し、口唇部に篋による押圧を施し、口縁部に斜走する朱痕文をつけた甕型土器や木の葉の圧痕や網代痕を残す底部破片、縦走羽状条痕文をつけた胴部の破片等が出ている。

これらの土器は、その文様の上で縄文時代からの強い影響が見られるとともに、伊勢地方や東海地方の条痕文土器からの影響も見られる。

弥生文化は、稲作を中心とした農耕を基礎として発展したものであるが、この金丸の地は標高四一〇メートルの高所であり、地形上からも、水田耕作に必要な水利上からも稲作にはむかない地域であり、現在でも畑作を中心とした地域である。その他水温・気温の上からも稲作には不向きであったろう。これらの点からこの地に発見された弥生文化が稲作中心の農耕に生活の基礎をおいたとは考えられない。出土した土器も、本県弥生文化の初期に属するものであり、その土器に縄文文化の影響が強くあらわれているが、それは単に土器だけでなく、生活そのものもまた縄文時代の延長線上にあったものと推測されるのである。

#### 第四節 古墳時代

##### 一 古墳

##### (一) 概要

古墳は墳墓である。本県においては、四世紀後半から八世紀前半にかけてつくられている。

昭和十年に群馬県下一せいに古墳の分布調査が行われ、その結果が『上毛古墳綜覧』としてまとめられた。それによると県下全体で八千四百基余りが確認されている。このうち、大胡町では四十一基である。

この『上毛古墳綜覧』をもとにして、大胡町の古墳の分布を大字毎にまとめてみると、次の頁の表のようになる。

これを見ると、古墳の大部分は、荒砥川より西の地域に多く分布していることがわかる。特に、横沢、茂木、堀越の三地区に集中している。

大字名	古墳数
横 沢	一二
茂 木	一一
編 越	八
滝 窪	四
上大屋	四
樋 越	一
河原浜	一

また、古墳を形の上から見ると、前方後円墳、円墳、方墳等に分けられるが、大胡町の場合、前方後円墳は、茂木字東小路に一基あったのみで、他はすべて円墳である。これら四十一基の古墳も、その後破壊されたものも多く、現在確認できるのは、その痕跡をとどめているものまでも含めて、二十六基にへってしまっている。このうち、横沢南部の地域（柴崎・向山地区）には、まだ畑中に五基の古墳が残り、古墳群としての面影をとどめている。

(1) 横沢地区の古墳

横沢地区には、『上毛古墳総覧』にもれていた古墳もあり、十四基の古墳があった。これらの古墳は、北部の小字大塚・五反田地域と、南部の柴崎・向山地域の二群に分けることができ、北部の地域に七基、南部の地域に七基がまとまって分布していた。この十四基はすべて円墳である。このうち、三基が発掘調査されている。

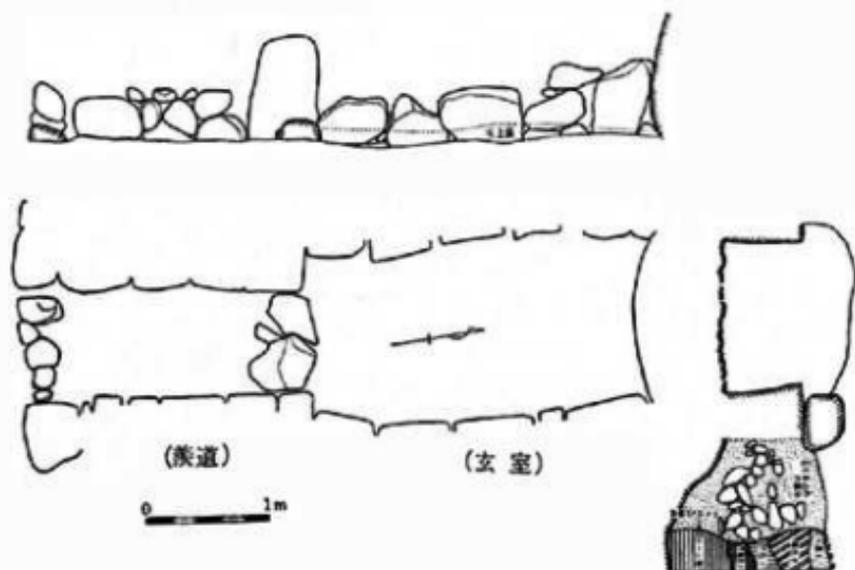
① 横沢一号古墳（上毛古墳総覧・大胡町34号・横沢字大塚六三九所在）

赤城山南麓には幾条もの谷が放射状に形成され、その間には多くの台地ができている。そのうちのひとつ、寺沢用水西のゆるやかな傾斜をもつ台地上にある。

本古墳の墳丘は、すでにすべて除去され、内部主体である石室の石が畑中に露出していたものであり、墳丘の規模やその構造は明らかでない。また墳丘規模を



横 沢 の 古 墳 群



横沢1号古墳石室実測図

確認するための調査においても、その手がかりは得られなかった。しかし、まわりの古墳や石室の様子・古墳総覧の記載等からして円墳であったと考えられる。埴輪はなかった。

内部主体は、横穴式の両袖型の石室であり、自然の石を加工せずにそのまま積み上げている。

石室もその上部の大部分はこわされていたが、幸い石室を築く際当時の地表面をいくぶん掘り下げてから構築していたため、壁のいちばん下の石は残っており、その形は確認することができた。

すなわち、石室は、築造当時の地表面であった浮石質角閃石安山岩（この石は樺名山のニッ岳の爆裂によって噴出したもので、七世紀の前半に降ったものである）尾崎喜左雄『横穴式古墳の研究』を含む黒色土層から切り込んで、褐色土層、軟かい関東ローム層を経て、硬いローム層上面まで約九〇センチ掘り込んで掘りがたをつくりこの中から壁石を積み上げたものである。この掘りがたの壁面と石室の側壁の石との間には、およそ一メートルの間隙があるが、



横沢1号古墳石室

ここには、石室壁石の裏込めの石が詰められていた。

石室の平面形を見ると、両袖型であり、玄室は中央部が広くなる胴張りを呈している。特に、右壁は奥壁から袖壁にむかってきれいな弧を描いている。玄室の入口には、他の壁石より縦長の石を用い、門柱に仕上げた玄門を設置している。また羨道の部分は、その前・奥の両端（石室入口部と玄門部）に石を横に並べ（柵石）その間、すなわち羨道いっぱい石をつめて石室を閉じていた。

石室の床面は、羨道の部分は川原石を敷き並べているが、玄室は奥壁付近に川原石を敷き、他は硬いローム層の上に玉砂利を二〇センチほど敷きつめていた。

石室各部の寸法は次のとおりである。

玄室長	二・六七	羨道長	二・四四
玄室奥幅	一・二九	羨道奥幅	〇・八三
最大幅	一・五〇	前幅	〇・九六
前幅	一・三〇	石室全長	五・一〇

この寸法を見ると、石室全長（五・一〇）羨道長（二・四四）玄室長（二・六七）等は、三〇の倍数かそれに近い数値を示している。石室を構築する際には、ある一定の尺度を用い、あらかじめ設計された企画にしたがっている。

すなわち、本古墳では、一尺が三〇センチにあたる唐尺を使用して構築していると考えられ、石室全長が唐尺一七尺、玄室長が唐尺九尺（九尺の二・七〇メートルに三センチ不足するが）、羨道長が唐尺八尺にあたる。しかし、奥幅の一・二九mは、三の倍数にはやや誤差が大きく宛尺にならないが、これも唐尺三尺の裏尺（ $\sqrt[3]{2}$ 尺）をとると一・二六メートルとなり、誤差も少ない。玄室長は奥幅の約二倍である。

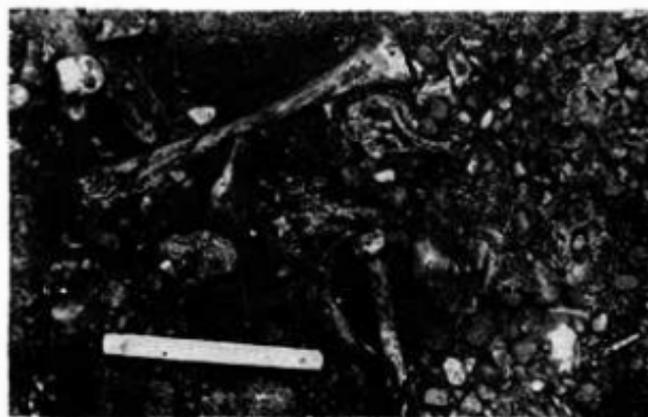
また、この石室は、玄室右壁がきれいな曲線を描いているが、この曲線は、石室全長の十七尺を半径とした円の弧と一致する。（松本浩二「横穴式石室における胴装りに関する一考察」古代学研究51号）

副葬品は、すでに盗掘にあっているためほとんど見当らなかつた。しかし、玄室中央部に落ち込んでいた天井石を除去したところ、その下に、ほとんど荒されていない状態で床面が検出され、その上に頭蓋骨・上腕骨・大腿骨・歯等が一体分出土した。上から石が落ちていたため、各々の骨は散乱しており、埋葬時のままの形では残っていないが、ほぼ石室の中央に、頭を北にしておかれてあったようである。

②横沢Ⅱ号古墳（上毛古墳群・大胡町33号横沢字大塚所在）

横沢Ⅰ号古墳の北約二〇メートルのところにある。

古墳は円墳であるが、墳丘の上半分は内部直体である横穴式石室の玄室天井石とともにすでに除去されていた。



横沢Ⅰ号古墳人骨出土状態

しかし、石室のまわりには、石室壁石をおおえた裏込めの石と、これを止めたまわりの石積み（裏込め被覆）がほぼ楕円形にきれいに残っていた。この裏込めは、石室奥壁の後では壁面から一・七〇メートル、左側壁の後では壁面から一・三〇メートルの厚さに玉石と砂利をつめこんであり、このくずれをとめるため、外側に裏込め被覆の石積みをしたものである。埴輪はない。



横沢Ⅱ号古墳裏込めの石積み

内部主体は、両袖型の平面形を呈する横穴式石室である。天井石はすでに除去されていたが、この除去に伴って壁石のくずれがひどく、玄室中央部においては、両側壁及び天井石が裏込めの石とともに玄室内に落ちこんでいた。このため、調査も困難をきたし、これを除去するための充分な器材と日数の不足のため残念ながら石室の完掘にはいたらなかったが、その規模・構築についてはおおよそその解明はできた。

石室のくずれは、玄室の中央部が特に著しいが、奥壁の部分はほぼ原形をとどめていた。奥壁は、大形の石二石を横積みにし、その高さおよそ一・八〇メートルである。また、石室羨道の部分は、石室をうめた石がぎっしりとつまり、ほぼ完全に残っていた。石室に使用している石はすべて自然石であり、加工はしていない。

石室は床面まで全面に掘り出していないので正しい数値は出てこないが、およその寸法は次のとおりである。

玄室長 二・九四 羨道長 三・二〇

玄室奥幅 一・五〇 羨道奥幅 〇・九二

前幅 一・六四 前幅 〇・八〇

この寸法も一号古墳と同様に唐尺を使用したものと考えられる。すなわち、玄室長が十尺、同奥幅五尺で、玄室長は奥幅の二倍となる。羨道長は十一尺、同幅三尺である。

また、玄室と羨道の境には玄門をたて、羨道入口の前面にはまわりを石垣でかこんだ広場（前庭）が付設されていた。（前庭については後述の彌越古墳の項参照）

副葬品は床面までの精査がすまず明らかでない。（大胡町教育委員会調査）

③五反田古墳（古墳略図記載漏・横沢字五反田五五四）

横沢一号古墳の南約二〇〇メートルのところにある。墳丘の大半はくずされ、墳丘及び石室の一部が残っていたものを、昭和三十五年群馬大学史学研究室で調査した。

墳丘規模はすでに破壊がすすんでいたため不明である。石室と関連して、横沢一・二号古墳と同様に石室壁の裏込めが石室のまわりをまわっていることが奥壁のまわりで確認された。この裏込めは、横沢一号古墳と同様に、古墳築造当時の地表であった黒色土層をローム層までおよそ六〇センチほど掘り下げ、このローム層から石室を構築しているため、石室の壁石と掘りがたとの間に石を投げ込んでいるものである。この間隙は左側壁後、奥壁後ともに壁面から一・四〇メートルである。

内部主体は横穴式石室である。奥の部分は奥壁、側壁ともよく残っていたが、玄室中央部から前は根石だけが残り、羨道部はその根石も取りはずされていた。石室の平面形は右壁に袖の部分が残り、これが玄門を意図していることから、両袖型であったと考えられる。使用している石は自然石であり、加工はしていない。



五反田古墳石室

玄室の床は、ローム層の直上に玉石を敷センチ敷きつめ、その上に扁平な川原石を敷石として敷きつめている。

石室の寸法は次のとおりである。

玄室長 二・一五

奥幅 一・二二

前幅 一・三三

羨道の規模は明らかでない。石室構築の際使用した尺度は、横沢Ⅰ・Ⅱ号古墳と同様唐尺であると考えられる。すなわち、玄室長七尺、奥巾四尺である。(群馬大学中文学研究室調査)

以上の横沢地区の古墳三基について、その特色をまとめてみると次のようになる。

(1) いずれも円墳であり、埴輪はない。

(2) 石室は構築時の地表であった黒色土層をローム層まで掘り下げた

中から構築している。すなわち、石室の下部は地表下になる。

(3) 石室の裏込めは、石室のまわりを楕円形にまわる。

(4) 内部主体は自然石乱石積の横穴式石室であり、いずれも両袖型である。

(5) いずれも玄門がある。

(6) 石室構築に際しては、唐尺を使用している。

(7) 1号古墳は玄室に胴張り有し、2号古墳は前庭を有する。

これらの特色のうち、(1)の埴輪を配列しなくなること及び(5)・(6)・(7)の特色は、本県の古墳をみた場合末期古墳に共通するものである。このことから以上三基の古墳は、七世紀末及至八世紀初めの頃に構築されたものと考えられる。横沢地区にある他の古墳は未調査なのではっきりしないが、埴輪の破片は見当らないものが多く、時期的には右の三基とさほどかけはなれていないものと思われる。すなわち、この地域では七世紀も中ば以降に古墳が構築されていたものと考えられる。

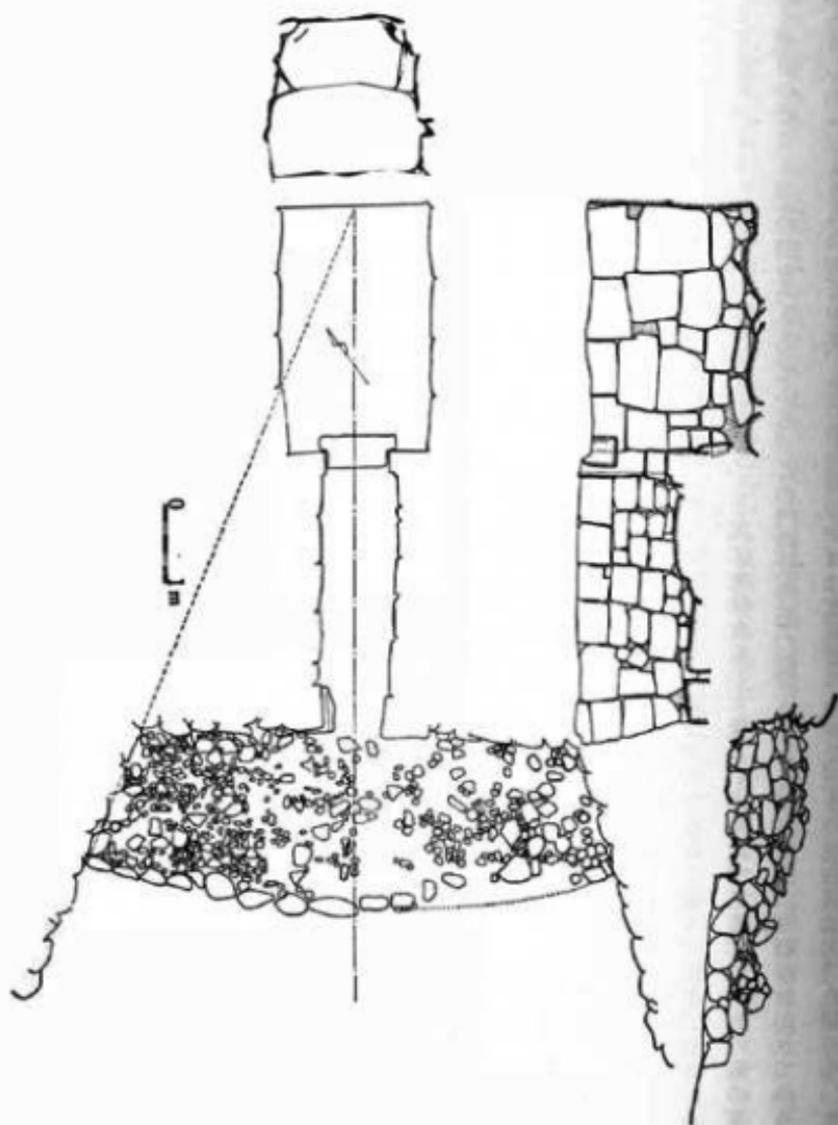
## (2) 堀越地区の古墳

堀越地区には七基の古墳が『古墳総覧』に記載されているが、このうち現存するのは五基である。これらの古墳は、五十山から房関にかけて南東方向にのび、複雑に入り組んだ低地帯に沿って発達する丘陵の東・西端に占地している。

右の古墳のうち、内部主体がわかっているものは三基であり、調査されたものが二基ある。

### ① 堀越古墳（上毛古墳総覧・大胡町第一五号・堀越字房関八六一所在）

この古墳には従来特別な名称がなかった。上毛古墳総覧では大胡町第一五号墳にあたっているが、その石室が代表的な構造であるので、取扱いの便宜上堀越古墳とよんでいる。赤城山麓の裾野地帯にできた小谷地に面する南稍々西向きの傾斜地の中腹に、いかにも抱かれているように構築されている。山寄せに築造されているもので、墳丘は径二五メートルであり、この墳丘の外側に幅約二・五メートルの濠が南半分に半周している。（北側は、山寄せであり濠はない）約一〇度の傾斜のところへ土地を約二・五メートル掘りくぼめて、そこに奥壁が設置されている。傾斜方向に



III 墓古墳実面図

したがって石室の口があいているので、床面が平な関係上、入口付近の部分は奥壁付近の掘った土を前にならして平坦にしたものである。埴輪は存在していない。葺石は墳丘の裾部に見えていたが、すでに相当くずれ、原型はとどめてない。

石室は葺石切組積である。既に明治二年に発掘せられ、小刀その他の出土品があったと伝えられているが、その出土品の行方も不明である。それ故この古墳の調査の目的は主として石室に向けられてくる。その実測の結果は次表のとおりである。

全長	左 壁	m	6.83
	右 壁		6.95
玄室長	左 壁		3.20
	中 央		3.14
玄室幅	右 壁		3.20
	奥 壁		1.88
玄室高	中 央		1.92
	前 方		1.75
玄門	奥 壁		2.10
	前 方		2.00
玄門	間口	前後	0.78 0.81
	奥行	左右	0.31 0.29
	高		0.94
	狭道長	左 壁	3.30
狭道巾	右 壁		3.45
	奥		0.91
狭道高	前		0.76
	奥		1.25
	前		1.45

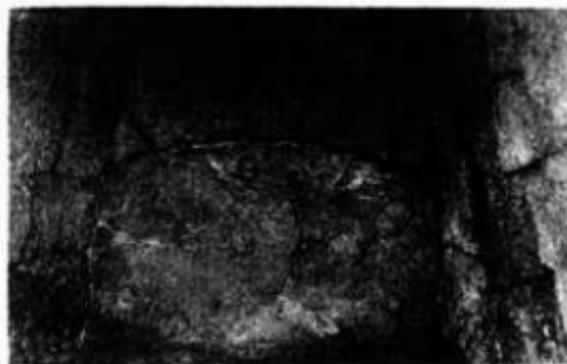
石の扱方は葺石積といっても、宝塔山古墳や中塚古墳にくらべて可成り粗末である。切組積でない部分が多く通目積といった方が好い位であり、乱石積の部分もある。天井も整然としていない。羨門の設備も特に目立たない。しかし、玄門は頗る精巧である。その柱石は羨道の左右側より僅かではあるが約五センチ程出しており、右柱は造出しになっている。楣石も天井石から造出されているのであり、下端に丸味をもった美しい面拵えである。これらの石の玄室側はいずれも垂直の面で、玄室の壁をつくっている。この門柱状の石の間にはさまれて、床面に掘石がおかれてあるが、玄室側からさし込んだようになっており、その前後幅の中ばは玄室部にあつて、その左右幅は玄門の間が八〇センチ、玄



瀬越古墳石室 羨道から玄室を見る  
(入口下の大石が側石、三方の突き出している部分が支門)



瀬越古墳石室 玄室から羨道を見る



瀬越古墳石室奥壁

室の方は九五センチある。高さも高く三〇〜三五センチで前後幅の中央が高く、その上幅は三六センチ、下幅は四五センチ位である。この細石が特徴をなしている。床には玄室では礎をしきつめ羨道では、細石の近くに敷石をしいているのが認められた。壁の石の抜けているところから裏面をみると、壁の石の厚さは二五センチ位、横の面は荒く削ってあり、裏の面は自然のままである。裏込めの石は壁の直後の径二〇〜二五センチの河原石、その外側に径七〜八センチの小石がつめてあり、それらの石の間には土が混っており、その土は意識的に詰めたようにみえる。壁の石は平積、横積いずれもあり、中には小口積のものもあるようで一定していない。

玄室の平面図形は前方の幅が稍狭められた矩形である。その長さとの比は一・六四強乃至一・八三であり、その実測値のとり方によって著しい変化があらわれる。それ故この実測値による比では、はたして当初いかなる企画のもとに実施されたかはわからない。よって実測値を当時使用の尺度に換算してみると

玄室長よりみれば三〇センチ一尺の唐尺十尺三・〇〇メートルより、三五センチ一尺の高麗尺九尺三・一五メートルにより近いものである。玄室幅からみても、前幅が高麗尺五尺の完尺一・七五メートルであり、中央幅は高麗尺の五尺より延び完尺にならないが、高麗尺四尺の裏尺 $(\sqrt{2})$ をとるとちょうど合う。また、羨道の長さをみると、厳密に玄門の柱より外方であるので、玄室の長さとの和三メートル五〇を全長より引き去った長さとなる。この和三メートル五〇は高麗尺十尺にあたる。石室全長は六メートル九五であるから、その差すなわち羨道長は三メートル四五である。この六メートル九五は七メートルに近く、高麗尺二〇尺である。また羨道長三メートル四五は三メートル五〇に近く高麗尺十尺である。羨道の幅は奥で九一センチ、前で七六センチである。九一センチを基準にすると唐尺で三尺、高麗尺で二尺五寸余となる。即ち、右の如く高麗尺が概して各寸法に近いので、この羨道幅も二尺五寸をとり、玄室の前方幅をとれば五尺となり、羨道幅は玄室幅の $1/2$ となる。これを玄門の各部分からみれば、奥行はやや短いが高麗尺一尺、間口はやや延びているがおそらく高麗尺二尺を意図したものではなからうか。ただ楣石の上辺から楣石の下面までの間が六〇センチであって、この間だけが最も正確に寸法通りに構築し得るものであり、基準とするのに好都合の部分である場所であるが、高麗尺では端数が大であり、唐尺では二尺となる。他の多くの部分は大體高麗尺とみられるに抱らず、ここのみは唐尺の方が妥当のようである。よってこの部分は疑問としてとどめ、要するに本石室は高麗尺を用いたものであり、玄室の長さ九尺、幅五尺で造られたものと推定する。即ち大化改新の制に合致したものであるが、はたして被葬者の地位も新制によって推定し得るものかどうかは不明である。ただ山ノ上

碑（高崎市山名町）に「大鬼臣」の名が見え、「新川臣」とともに出ているので、これを新里村新川及び大胡に推定すれば新川の中塚古墳を比較し、山ノ上古墳と比較し、ある程度の想像は可能であろう。従って七世紀末ないし八世紀初頭とみてよいのではなかろうか。（尾崎喜左雄「勢多郡誌・古墳」の項参照）

前庭



前庭 古墳 越 堀

本古墳の石室は、前述のように明治二年に開口していたが、その入口は現在残る墳丘の裾から三メートル五〇センチほど奥の方に入ったところであり、この様子から羨門前に石室に付随した施設があると予想され、昭和四十七年八月大胡町が主体となって調査を実施した。この結果、ここに前庭の存在が確認された。

この前庭は図に見るように南に開く台形状をした広場で、奥と左右の三方は石組によってかこまれている。奥の石組は石室入口を中

心としてその左右に築かれ、五メートル六〇センチの幅をもっている。この両端で石組は左右ともに南へ折れ曲るが、その角度は右（東）で一〇六度、左（西）で一三三度である。左右の石組の現状で長さは、右が四メートル三〇センチ、左が三メートル八〇センチである。この長さを見ると、奥幅の五メートル五十八センチは高麗尺十六尺にあたる五メートル六〇センチにごく近く、石室と同様高麗尺を使用し完尺十六尺を意図しているものであろう。

前庭を有する石室は、県内でも多く調査されているが、本古墳の前庭で特筆すべきは、図や写真で見えるように前庭の中央やや奥寄りのところに、横に一列孤状に川原石が並べられ、前庭を前後に二分していることで、奥部は前部より三〇センチほど高く、大小の川原石を敷きつめて上面をほぼ水平にしているのに対し、前部はローム層上に褐色土を盛ってならし、外部の濠に向ってゆるやかな傾斜で下っている。この前庭は墓前祭のような祭をした場所と考えられるが、本古墳の場合も奥の石敷の部分で、石の上に土師器の坏が出土しておりこの部分が祭の場であったことが考えられる。すなわち、前庭の前後の区分は形態上のちがいでなく機能上からも区分されていたものであろう。また、前後の境にある川原石の孤状の列は、玄室奥壁の midpoint を中心とし、九・一〇メートル（高麗尺二六尺）を半径とした円の弧にあたっていることから、設計上からもこの列石が石室と同時に企画されていることがわかる。

このような特色をもつ本古墳は、県内の他の古墳と比較して考えると、その築造年代は前述されているように七世紀末から八世紀初頭にかけてのものであり、古墳の末期に属するものである。

なお本古墳は、昭和四十八年六月、群馬県の史跡として指定された。（群馬大学史淵・大胡町教育委員会調査）



本古墳前庭 土器出土状態

②大胡一八号古墳（上毛古墳総覧・大胡町第一八号、堀越字五十山九七六）

昭和三十五年開墾のため平夷されたが、その際石室の一部を調査した。

墳丘はすでに平夷されてなく、その形は不明であるが、おそらく円墳であったろう。まわりには埴輪の破片は見当らず、埴輪はなかったものと考えられる。

内部主体は大型の石（奥壁は、一・七〇メートル×〇・九〇メートルの石が一石、東壁は一メートル×〇・七〇メートルの石二石が残る）を用いた自然石乱石積の横穴式石室であるが、調査時点においては、石の大方は無く奥壁及び東西両側壁の根石が二石ずつ残っていたのみであり、石室の形は明確にはつかみ得なかった。しかし、玄室の幅から考えておそらく両袖型の石室であったと思われる。

石室の構築は、当時の地表面からローム層上まで掘り下げ、この上から壁石を積み上げている。玄室の床面は、このローム層上に川原石をしき、その上に二〇〜三〇センチの厚さに玉石をしきつめていた。

玄室の規模ははっきりしないが、奥幅は川原石をしきつめた面で一・七七メートルである。玄室長は三・三〇〜三・四〇メートル位と推定される。この奥幅は唐尺の六尺の完尺に近いものである。（群馬大学史学研究室調査）

③大胡一七号古墳（上毛古墳総覧・大胡町一七号、堀越字五十山九八一）

一七号古墳のすぐ西にある。現在宅地として墳丘の半分以上がけずられ、石室がころうじて残っている。未調査なのでくわしいことは明らかでないが、堀越古墳と同様葦石切組積の石室が見えており、その築造年代も七世紀末〜八世紀にかけてのものであろう。

(3) 茂木地区の古墳

茂木地区の古墳は、大胡駅の南、荒砥川西の台地にはば集中してある。現在はその大部分が宅地化され残っている



五号古墳

のはごくわずかである。分布する範囲は長興寺から上ノ山までの約一畑の一つの台地上であり、一つの古墳群を形成していたと言える。また、古墳総覧に記載された十一基はほとんど円墳であるが、そのうちに前方後円墳が一基登録されている。これは、大胡町でただ一基の前方後円墳である。

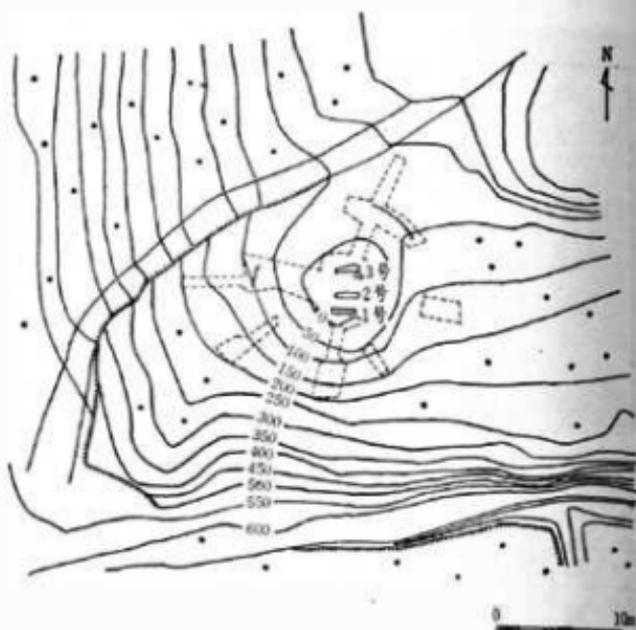
①大胡町第五号墳（上毛古墳総覧大胡町第五号・茂木字上ノ山五〇七）

本古墳は、上毛電鉄大胡駅より南へ約一畑赤城山南麓の裾部に発達した舌状台地の南端に構築された円墳である。雑木林を開墾し、封土を埋め立てに使用するというので調査を行うことになった。

墳丘は台地の傾斜面に構築されており、その規模はトレンチで確認された葺石の根石を基準にして測定すれば、高さ（現墳頂）南側で三、一七m、北側二・二八m、径十四、四〇mである。葺石は径十五〜二十五cmの河原石を使用している。

た。

墳丘頂部には、三個の竪穴式石槨が南北にほぼ平行に並んでおり、これを南から第1号、第3号、第2号石槨とした。各石槨とも安山岩の自然石を使用している。第1号と第3号石槨はと互いに酷似している。すなわち、蓋石は五石・六石よりなり、東の方が大で西へゆくほど小さい石を使っており、その置き方によって東から蓋石をの



5号墳外形実測図(群馬大学史学研究室実測)



5号古墳石櫛(西から見る)



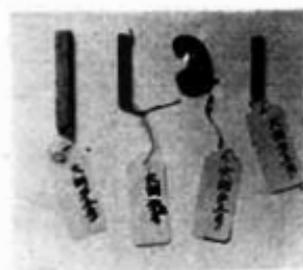
5号古墳石櫛(東から見る)

せたことがわかる。また石の間には粘土と小礫がつめてある。石櫛は墳丘に直接板状の石を並列にさし込み、石の継ぎ目には粘土をつめて壁としている。壁の裏側には、径二十と三十センチの石をつめて壁をおさえている。床面には二と三センチの厚さに小礫が敷いてあり、その下に敷石が施してある。敷石の凹部や継目にも粘土がつめてあった。

第2号石櫛はいちばん北に位置し、蓋石のならば、壁の構造等においては、他の石櫛とはほぼ同一技法が用いられ

ているが、床面に小礫が二、三センチの厚さに敷きつめてあるのみで、その下に敷石は認められない。また、その平面形は人体の形をしており、他の石梯にくらべてスマートな感じのするものである。各石梯の寸法、遺物は次表のとくである。

石梯名	第1号	第2号	第3号
石梯長	194cm	192cm	195cm
石梯幅	東	35	43
	西	31	27
深さ	22	25	23
方向	E-3°-N	E-3°-N	E-0°-N
遺物	碧玉製管玉3個 鏝 1片	滑石製勾玉1個 土器破片 1片	剣 1本 銅製小環 1個



5号古墳出土品

接している。

本古墳も五号古墳同様に台地の南端に山寄せの形で構築された円墳である。発見された葺石はローム層上に根石をすえているが山寄せ式であるため、北を除く三方が高く葺き上げてあり、調査時において一・五〇メートルの高さが残っていた。これに対し、北は高さわずかに五十センチである。墳丘の直径は、葺石の根石で求めると、一七・五〇メートルである。埴輪は、円筒埴輪の破片が見えているが、その配列は確認できなかった。

なお本古墳は、昭和三十二年四月に群馬大学史学研究室によって調査したものである。

②大胡町第六号古墳（上毛古墳総覧・大

胡町第六号・茂木字上ノ山五〇七）

本古墳は前述の五号古墳の東約八メートルのところであり、両古墳はほとんど



6 号 古 墳

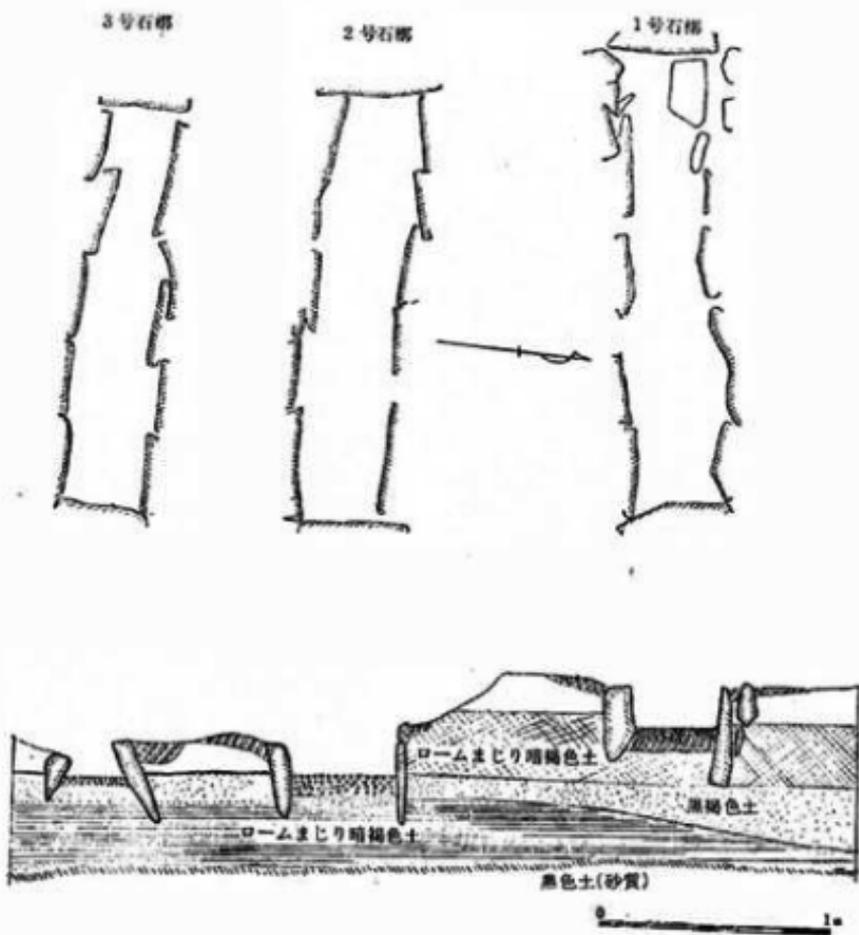
墳丘頂上部には、五号古墳と同様に竪穴式石槨が三個、ほぼ平行に南北に並んでいた。これを北から1号、2号、3号石槨とした。

中央の2号石槨と南の3号石槨は六十センチの間隔をおいて平行に並んでいる。石槨の構築面は、古墳構築時の地表であった黒色土層の上二十センチのところまで盛った暗褐色土層上に石槨の壁石をすえており、両石槨の床面のレベルも同高である。これに対し、北の1号石槨は、2号石槨より九十センチはなれ、壁石は右の暗褐色土層の上にもう一つ盛った黒褐色土層の上へすえ、床面のレベルは、2号石槨より二十五センチほど上になっている。(黒色土層より六〇センチ上)

2号石槨、3号石槨の蓋石は、五石よりなり、東の方が西よりやや大で、東から順に置いてきている。この蓋石の上には粘土が塊々にはりつめてあり、石と石との間をふさいでいるとともに、蓋石上面の凹部は厚くなっている。上面がほぼ水平になっている。

石槨は、板状の石をさし込んで壁としており、壁石の裏は2号石槨の南及び3号石槨の北側においては、壁石の上端から一〇センチほど下まで、厚さ一〇センチ、巾二五センチほどの粘土でかためている。

床面は、礫を2号石槨は、一〇センチの厚さに、3号石槨は四センチの厚さに盛土の上にしきつめたただけで礫の下には敷石や粘土はない。ただ、3号石槨にあっては、西端に一五センチ×二五センチの敷石が一石、礫の上面におい



6号古墳石室平面図及び断面図(群馬大学史学研究室実測)



6号古墳石櫛

てあった。

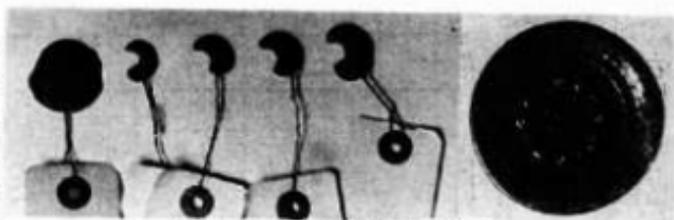
1号石櫛は、右の二石室よりやや北に傾いた方向で二五センチほど高いところにある。壁石は六石で東の方がやや大で東から順に置いてきている。壁石上面には2・3号石櫛同様粘土をはりつけている。壁石も2・3号同様板状の石をさし込んでいるが、床面は、盛土の上に六センチほどの厚さの粘土でかため、その上に礫をしきつけている。その厚さは八センチであるが、この礫の間には土がつまり朱色にそまっている点が他の石櫛とちがうところである。壁石の裏は、二四センチの所まで壁に接する所で厚さ一三センチ、壁からはなれるにしたがってうすくなる三角形状に粘土をはって壁を固定している。また、この粘土とともに壁に接して河原石をそえている。

各石櫛の寸法は下表のとおりである。

出土品は2号石櫛に集中し、3号石櫛は金属片のみ、1号石櫛からは皆無であった。

2号石櫛の出土品は、刀一本、小刀一本、石製模造品小玉六個、玉類十六個、櫛破片の

石櫛名	第1号	第2号	第3号
石櫛長	198cm	188cm	175cm
石櫛幅	東	41	35
	西	35	31
深さ	30(東)~20(西)	18(東)~15(西)	20(東)~15(西)
方向	E-7°-N	E-2°-N	E-5°-N



(石製視鏡品) 6号古墳出土品(鏡)

他に鏡が一面である。

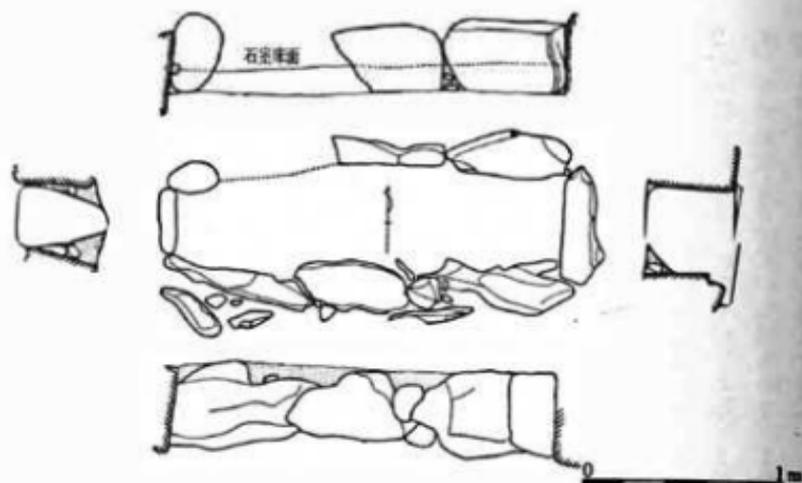
この鏡は白銅製で直径七センチと小型であるが、文様は外側に三角形を連続に配した裾歯文があり、その内側には四個の乳を正方形に配置し、その間に四体の獸文を配している。中央には穴のあいた鈕がある。(群馬大学史学研究室調査)

③ 上ノ山古墳(上毛古墳総覧記兼瀬、茂木上ノ山)

前述の大胡五号、六号古墳の北約三〇メートルの所に、墳丘・蓋石はなくなってはいたが、堀に竪穴式石槨の壁石上端がのぞいていたことから発見され、昭和四十七年四月に調査した。

本古墳は、五号墳・六号墳の位置する台地頂上の平坦部にある。墳丘はすでに平夷されてしまったが、調査によって墳丘をおおっていた葺石の裾部が確認された。これからみると、墳丘は直径一四メートルの円墳である。この墳丘の外周には、幅五・二五メートル(南側に於いて確認)の濠がめぐっている。この濠は、古墳構築時に地表を形成していた黒色土及びその下のローム層を掘り込んでつくったもので、深さは一・一〇メートルである。現在この濠をうめている土から見て空堀であったものと考えられる。

墳丘中央部に、主軸を東西にとった箱式棺状の竪穴式石槨が一個ある。石槨は板状の割り石及び細長の川原石をさし込んでつくったもので、五号古墳の1号、3号石槨、六号古墳の各石槨に共通している。この石槨の壁石は、地山である黒色土層の上に盛った層中につくられており、壁石の下端は黒色土にほとんど接するか一五〜二〇センチ上の所に位置している。また、壁石の裏には葦大の川原石を三十センチ余りの幅につめて裏込めをしているが、この裏



上ノ山古墳石槨実測図（平面図・壁面投影図）



上ノ山古墳石槨

込めは壁石の上から下まですべてにはなく、上部一五センチほどの所に限られている。このことから、石槨をつくる際は、まず地の山の表面を盛土をして平にならし、壁石をおき、その裏は、下部の方は土を盛って壁石を固定し、上部に裏込めをしていったものと考えられる。蓋石はすでに除去されていたため何個であったか明らかでない。また、五号墳、六号墳で多く用いていた粘土も少なく、壁石の間にもほとんどなかった。壁石の高さは、五〇センチほどであるが、床面は壁石上端から二十cm〜二十五cmのところであり、礫と粘土のまじった層でできている。この層が厚さ七cmほどで、その下は黒色土にロームの塊がまじった盛り土で平にならしてあった。これは壁石裏の盛り土とは同じ土である。

出土遺物はほとんど見当らず、刀の破片が一片あったのみである。

石柵の寸法は次のとおりである。

石柵長 一・九三 m

石柵幅東 〇・五二

西 〇・三三

石柵深さ東 〇・二七

西 〇・二一

石柵方向 E10°N (主軸東西)

以上の茂木地区の三基の古墳は、横沢や堀越地区の古墳と比較した場合、墳丘の形は同じ円墳であっても、遺体を納める内部主体は大部様子のちがうことがわかる。

三基の古墳はいずれも堅穴式石柵であり、墳丘の上から掘りくぼめて石柵を構築したものである。その規模をみると、石柵の幅は東側が三五〜五二センチ、西で、三三〜二七センチであり、いずれも東の方がいくらか広くなっている。幅が西より東の方が広いのは、頭を東において遺体を安置したことを示している。

また五号墳と六号墳はいずれも三個の石柵をもっているが、そのつくった順序を考えてみると、五号墳では、中央の3号石柵の南にある1号石柵が、3号石柵の裏込めの準大の礫石群をきりとって造っていることから、1号石柵は3号石柵の後に造られたものである。2号石柵はやや遅れており、他との関連がむずかしいが、3号石柵を意識して、その破壊をさせている風もあり、1号と3号の中間に造られたとも考えられる。(尾崎喜左衛門「古墳からみた東国文化」第四章)また、六号古墳の石柵をみると、2号・3号石柵が隣りあい、床面の高さも同高であるのに対し、1号石

柵は床面が二五センチ高い。構築の様子からみても、2・3号石柵が同時構築、1号石柵がその後と考えられる。これらのことから、五号・六号古墳においては、最初の遺体安置から一ないし二回の追葬がおこなわれていることがわかる。墳丘構築後長期にわたって使用していたものである。

これら箱式棺状の竪穴式石室は横穴式石柵に先行するものであり、堀越古墳等よりは少くとも一世紀以上前につくられたものである。

茂木地区には以上の三基の他に九基の古墳があるが、これらがいずれも右の三基と同じように竪穴式石柵ではない。大正用水北の深沢家の屋敷にある古墳は横穴式石室をもった古墳のようである。また、上ノ山古墳の東にも古墳跡がみられるが、これも横穴式石室であったと推定される。しかし、他の大部分の古墳はすでに破壊されてしまっている。

(4) まとめ 以上横沢地区・堀越地区・茂木地区と三つの古墳が集中している地域について、調査された古墳を中心にみてきた。これを要約すると。

- (1) 茂木地区には古い形の竪穴式石柵が上ノ山に集中して三基ある。
- (2) 茂木地区は右の古い形の古墳の他に新しい形の横穴式石柵をもつ古墳もある。
- (3) 横沢地区には、七世紀後半ノ末の頃にかけての古墳時代末期の新しい古墳が集中している。
- (4) 堀越地区の古墳は時期的には新しいが自然石乱石積の石室が多い。
- (5) 堀越地区には、七世紀末ノ八世紀初頭にかけての古墳時代末期の新しい古墳が集中している。
- (6) 堀越地区の古墳の中には、戴石切組積という高度の技術を駆使した石室がある。

これらのことから、大胡町の古墳は、南部の茂木上ノ山に古い形の竪穴式石柵をもつ古墳がまず構築され、ひき続

いてこの地区の古墳造営が続けられる一方、七世紀後半〜八世紀初頭にかけて堀越や北部の横沢に集中的に古墳時代末期の古墳が構築されていったものといえよう。

特に、茂木には古い時期の古墳から、比較的新しい時期の横穴式石室をもつ古墳まで通して存在していると推測されるところに、大胡町でただ一基の前方後円墳があった。一方この北に隣接する堀越南部の房関や五十山には葦石切組積のすぐれた石室をもつ古墳がある。また、茂木の古墳が集中する台地と谷一つへだてた西の台地、すなわち、町民ブルのある台地上にある茂木字天神風呂からは、瓦でつくった塔（瓦塔）の破片が出ており、ここに古い寺院があったと考えられる。（尾崎喜左衛門「上野三碑と那須園遺跡」『古代の日本』、関東篇、丸山知良「大胡小史」）さらに、この台地上には、町民ブル南から上毛電鉄の線路や大正用水を越えて、南の前橋境にいたる広い地域にかけて後述するように古墳時代に使われた土器（土師器）が畑に多量に散布し、この頃の大集落があったと考えられる。

これらのことから、堀越南部から茂木にかけての地には、古い時期から古墳をつくり、さらに前方後円墳や葦石切組積という高度な技術を必要とする石室をもつ古墳をつくった後、古墳構築の風潮が絶えた後は寺院を建立し得た有力な氏族の存在が考えられる。

これを先に尾崎喜左衛門氏がふれている「山ノ上碑」に出てくる「大児臣」と関連させて考えた場合、この堀越南部から茂木にかけての地に「大児臣」の存在を考えてもいいのではないかと思われる。

## Ⅱ 集落

### (1) 概要

古墳時代を代表する遺跡は、これまで述べてきた古墳であるが、それは「墓」という特殊な性格をもつものであり、この時代の文化の一端を物語る重要な文化遺産ではあるが、これだけで、この時代の文化、特に庶民の生活の様



竪穴式住居跡の断面（中央黒く落ち込んでいる所）  
（茂木・大正用水南）



竪穴式住居跡断面にのぞいた土層（左下方）

に、縄文時代に次いで多くの場所にその散布が認められるのであり、そこに住居の跡があると推測されるのである。特に、町民プールのある台地は、そこから南の茂木地区にかけて、その散布の密度が濃密であり、上毛電鉄の線路から南の切り通し、あるいは大正用水の崖、その南の土取り跡等に竪穴式住居の断面が十戸近く認められるのであり、ここに古墳時代の大集落があったことが推察される。

子を知ることはできない。この頃の一般の人々がどんな生活をしていたかを知る遺跡は、住居跡であり、これの集まった集落跡である。しかし、本町においては、これら住居跡の調査例は足軽遺跡ただ一例であり、まして集落としてどれ位の規模のものがどのようにあったかを確認されたものは一例もない。

しかし、その土器の散布を見た場合、次表のよう

この散布地を大字別及び標高別にまとめてみると次のようになる。

土器散布地地名表 (山岸賢司作成)

No.	散布地	標高	編	考
1	滝窪字金丸	四三〇m	白草の十字路より約七〇〇m北の道東の畑にやや広く散布	
2	〃	四一〇	寺沢池の北山林の北の畑地、散布少	
3	〃	三九〇	寺沢沼の西側畑地、分布広く前橋金丸へと続く	
4	〃 白草	三九〇	白草の十字路の北約一〇〇mの道東及び道西の地域、散布範囲広し	
5	〃 中丸	三五〇	寺沢沼の南方約六〇〇m同川西の丘陵上	
6	〃 田ノ上	三〇〇m	田ノ上の部落の北の畑地に広く散布	
7	〃 西原	二八〇	県道四ツ塚線の北側の畑地、散布範囲狭い	
8	〃 新井	二五〇	新井稚蚕飼育所より東方約二〇〇mの舌状台地上	
9	〃 横沢字五反田	二二〇	横沢I・II号墳等の古墳群の南道の東側の畑地、散布範囲広し	
10	〃 元菜師	二二〇	県指定史跡滝沢産の周辺の畑地、散布範囲やや広い	
11	〃 西原・前原	一八〇	横沢の南方寺沢川西の台地全面の四〇〇m×一〇〇mの地域	
12	〃 久保・皆戸	一八〇	向山部落の南、江木に通ずる道の西側の畑地にやや広く散布	
13	〃 堀越字一丁田	二五〇	一丁田の南方、台地上からゆるい傾斜地にかけて	
14	〃 並木	二二〇	台地上全面におよぶ二〇〇×六〇mの範囲	
15	〃 格木(正治)	二〇〇	正治の部落の南西、台地上にやや広く散布	
16	〃 堀越字中道	二〇〇	水押の部落の南台地上に二〇〇m×五〇mの範囲に散布	
17	〃 新畑	二二〇	業師沼南方、約三〇〇mの傾斜地	
18	〃 五十山	一八〇	町民プールから県道を経た北側の台地に広く散布四〇〇m×五〇mの範囲	
19	〃 真木	一八〇	二本松沼東の台地にやや広く散布	
20	〃 城泉寺	一八〇	五十山部落の西方の台地に五〇〇m×五〇mの広い範囲に散布	
21	〃 永閑寺	一六〇	県道前橋・桐生線と渋川線の交互する道西の台地上	

22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
房閣	殿町	足軽町字大道下	新宿	東今城	茂木字柳沢	天神風呂	天沼塚	派訪東	小沢	中沢	柳沢	河原浜字新地	日光道東	山上道	上大屋字東山	前山
一六〇	一八〇	一五〇	一五〇	一四〇	一五〇	一四〇	一三〇	一三〇	一三〇	一三〇	一三〇	一八〇	一八〇	一六〇	一五〇	一五〇
少年の家の西側畑地に散布	小・中学校の西側及び北側の畑地に広く散布	少年の家の西方の台地、大正用水まで約四〇〇m×五〇〇mの広い範囲に散布	新宿の部落周辺、特に鉄道直下より大正用水までの地域に広く散布	足軽町西南、開田作業中に住居跡発見(四戸)群馬大学調査	少年の家の南、西側傾斜の畑地から鉄道を越えた舌状台地	上電大胡駅の西方約二〇〇mの台地上、鉄道南の切り通しに住居跡断面四戸確認	上電大胡駅の西方約一〇〇mの台地上、大正用水南の畑地に広く散布、大正用水及びその周囲の切り通しに住居跡断面六戸	三屋の台地一帯に広く散布	茂木の西南方、大正用水南の台地に広く散布	林太郎氏宅庭先より長巻二個出土(林美孝氏保管)	河原浜集会所北側の畑地	河原浜集会所東方、東へ延びる台地上	河原浜南方、荒砥川東の大きな台地上に広く散布	穂越の最西方、稲荷古墳の周辺に散布	穂越最西南、稲荷古墳の南約六〇m東に水田をひかえた畑地	上大屋東南の地域、八光沼北の畑地に広く散布

これらの遺跡の中で発掘調査の実施されたものは、26番の足軽遺跡の一例だけである。この遺跡については、調査を担当された松島榮治氏が『すざく会誌第四輯』にその概報を発表されているので、それをここに載せておく。

① 足軽町遺跡

赤城山南麓に位置する大胡町附近の上代遺跡は、今までに幾多の先学によって紹介されて来た。最近では群大教授



足軽町遺跡全景（北西部より）

尾崎喜左雄氏が、群馬県における古墳の編年的研究の一基準として、同町所在の堀越古墳（上毛古墳総覧大胡町第十五号）を取り上げて紹介し、本紙第一輯に於いては、その調査報告を載せる等して、この地方における上代遺跡についての学問的関心は次第に高まりつつある。

斯様な時に當って、昭和三十年三月、大胡町大字堀越字新宿地域内に於いて、同町同字農須藤松吉氏が所有畑の開田作業を行い、北より南に向って走る小舌状台地の東側、西より東に傾斜する土地の平坦化を計るため、西部の高地を削り取る作業を行った。

かくて、作業の進行に伴なって随所より大量の土器、その他遺物の出土をみるに至った。その出土量の多い事、出土の状態の変っている事、遂に所有者をして供養の碑を建てさせる程であった。やがてこの事は、さざく会会員群馬大学学生大沢亥之七君が友人から知る事になり、その事は更に群馬大学芸学部史学研究室尾崎教授のもとに報告された。報告を受けた研究室では、早速現地調査を行ない、地主との話し合いもついたので、六月十六日から二十日までの三日間を予定し、遺跡の本格的調査を行なう事にした。

遺跡の調査は、開田作業によって削りとられて出来た新しい地表に住居跡の輪郭が認められるために、比較的容易に進める事が出来た。即ち、調査、整理上の都合から遺跡地の最も南にあるものを一号住居跡とし、それから漸次北に向って二号、三号と行号し、各号住居跡には、三、四人づつかかって発掘は進められた。斯様にして発掘作業はす

こぶる順調に進められ、初日において主な住居跡の全貌を出す事が出来た。続いて、第二日目には、各住居跡の精査と実測が併せて行なわれ、予定通り第三日目には完全に調査を完了させる事が出来た。

尚、この三日間において発掘された主なものは、住居跡五戸（うち一戸は縄文式文化前期のもの、他は土師及び須恵器使用のもの）、土器及び少量の石器類であった。

本遺跡の発掘は以上のように僅か三日間に進められたものであり、この間気候は梅雨中のため誠に不順であり、加うるに作業量は、決して少なくなく、発掘参加者は非常に苦勞した。今ここに、諸兄姉の努力の輝しい結果を概報する。筆者は、これによって、それらの努力に例えいくらかでも酬いらればと思ふのである。

遺跡地附近の地形をみると、北から南に向つて幾つかの小舌状台地が発達しており、今回確め得た遺跡地はこれらの、小舌状台地の東側にある。その範囲はかなりの広範囲のもので、特に南北は長く、最南に位置する住居跡と、最北に確め得られた住居跡の距離は約七〇米程あり、北の間五ヶの住居跡が稍々並んで認められた。これら七ヶの住居跡のうち、一ヶは縄文式文化前期のものであり、他は土師及び須恵器を使用するものであった。

遺物はこれら住居跡を中心として散在するがその種類は殆んどすべて、発見された住居跡と時期的に一致するものであつて、それ以外のものは全く認められなかつた。従つて、本遺跡は縄文式文化前期、土師及び須恵器を使用する時期の住居を主体とする遺跡とみる事が出来、縄文式文化前期の住居は別として、土師及び須恵器を使用する住居群は、後でも考察するように、同時期と認定されるので、この舌状台地上には、古く村落の一部があつたと考えられ、この事が本遺跡の主要な性格とされる。

一号住居跡——遺跡地の調査した範囲においては最南部にあつて、土師及び須恵器を使用する住居である。壁の高



1号住居跡全景（上中央に竈が見える）

く部分でも定まっていたのだろうか。

住居内部から出土した遺物は、皿形の略々完形に近い須恵器、他に同じく須恵器破片が床面より約二十厘米浮いて発見され、又、土師器の破片は竈の附近に認められた。尚、角閃石様の加工した使途不明の石器が住居の中段に二個、他に、焼けた石が三、四個何れも床面に接して点在していた。これらは、竈にでも使用したものの一部であろうか。遺物の出土は以上のように非常に少なかった。

さは、開田作業の際に既にその上部を削り取られているので不明であるが、現高は三〇厘米ある。床面の形は東西三米五〇厘米、南北三米九〇厘米の方形で、其の向きはS—18°—Wで、調査したこの集落の住居跡中最も西にふれている。床面の壁に接する辺りは竈の附近を除いて、巾約一〇厘米前後、深さは比較的浅い所謂周溝が認められた。竈は東壁南寄りにその大部分を切り込んで造られていたが、既に、その大部分は破壊され、強く焼けた竈構築に使用した粘土が稍々馬蹄形に残っていた。床面東南隅の竈の左斜前方には径五〇厘米、深さ二五厘米の所謂貯蔵穴があったが、別に遺物は認められなかった。床面は概してやわらかであったが特に注意されるのは、南面した辺の西に寄ったあたりに巾約五〇厘米の固く踏つけられた様な部分があり、この部分はそのまま住居の中央部に進み、巾は約一米に広がり、ここから方向を稍々直角に東方に曲げ再び巾をもとの広さにせばめ、竈の左端の部分、即ち、東に面した辺の畧々中央に至ると言う特別の部分があった。住居内に於いて特別に歩

二号住居跡——西端部が別の地目の畑にかかっているために、西壁を含む一部は未発掘である。そのために西壁の状態、東西辺の長さは不明であるが、他の大部分は調査し得た。即ち、南北辺は三米四〇釐で、三号住居跡と略々同様の大きさ、従って、本住居跡の大きさを考える場合、三号住居跡は多少参考にならう。方向は、S—6°—Wで調査したこの種の住居跡中最も南に面したものである。竪穴のもとの深さは、不明であるが、現在の地表面からは三十五釐から四〇釐程ある。周溝は広い部分で二十釐、狭い部分で十釐、深さは約十釐で竪穴部分を除く他の部分に認められる。竪は東壁の稍々南寄りの位置に、その後半を壁に切込まして造られている。従って、その前半は床面上に突き出しているような形になっている。尚、その部分は、特別に白色粘土を用いている。床面上東南隅、竪の左斜前方には、径二十釐、深さ三十八釐、巾二十五釐、深さ二十五釐の二個の穴を連結したような貯蔵穴が発見された。他に床面上には著しい特色はみられなかった。



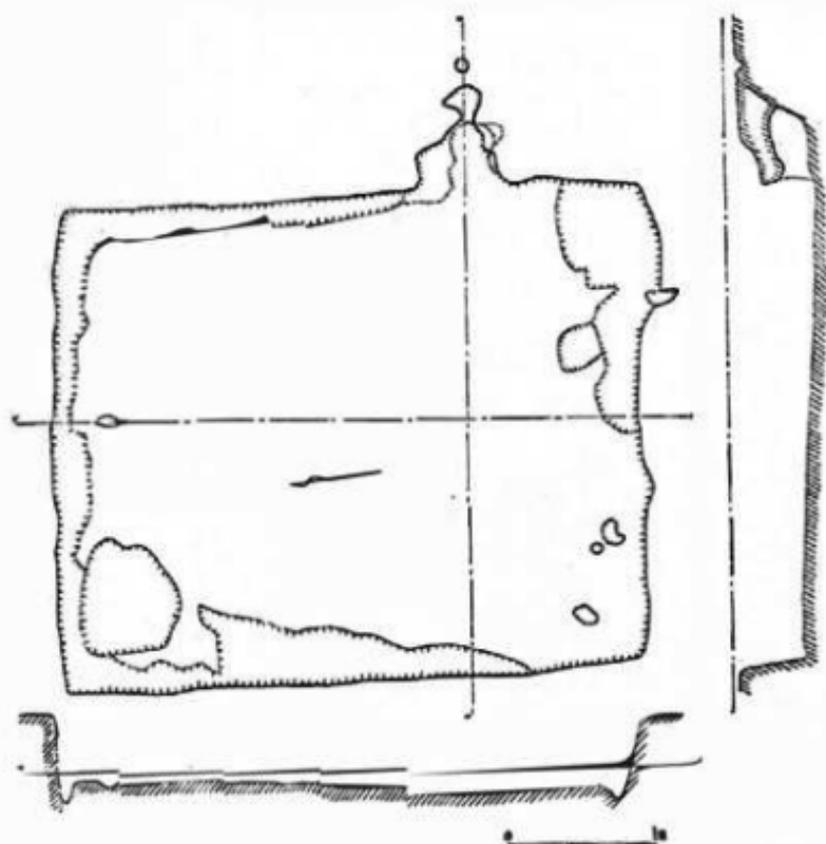
2号住居跡全景（上右より竪）



2号住居跡土器出土状況

遺物は床面の南壁に接する辺りに二個の皿形の土師器が、北東隅に須恵器破片が四個発見された。

三号住居跡——今回の発掘以前に



足軽町遺跡 第3号住居跡実測図（群馬大学史学研究室実測）

すでに一度掘り返され遺物も取り上げられたものであって、床面及び遺物の出土状態等細かい部分については不明である。しかし、住居跡の大きさ、その向き、竈の位置等は再度の発掘によって知り得た。即ち、東西辺の長さ三米十厘、南北辺長さ三米五十厘、竪穴の深さは上部が相当に削り取られていて現在は二十厘前後。竈は大破していたがその形状は前に記した一号、二号住居跡のものと同様と思われる。ただ多少注意を要するのは、その大部分が床面上に在るのではないかと思われる事である。しかし、この事は、我々が最初から掘り出したものではないから批判してみる必要がある。



3号住居跡土器出土状態

遺物は、土師及び須恵器の皿、須恵器の埴形の頸部、土師器のかめ形土器の口辺部破片等本遺跡においては比較的多量の遺物の出土をみた。

尚、この住居跡の北東隅の一部は次に記す第四号住居跡に切り込まれている。斯様な事実は、本住居跡より第四号住居跡の方が新しい事を物語っている。

四号住居跡——第三号住居跡を切り込んで構築した第四号住居跡は調査された本遺跡の住居跡中床面を最も深く掘り下げて造った住居跡である。その深さは現在の地表面から四十五匁乃至五十匁あるが、勿論これとても、もとの堅穴の深さを示すものではない。

その大きさは、東西長さ三米三十匁、南北四米である。周溝の状態は、その部分の床面が、比較的やわらかく、特に周辺に於いては、土地の混乱の跡がみられるため、はっきりと調べ得なかつたが、約二十匁前後のものであつた。たが、既に破壊され、焼けた粘土は、住居跡内部に大量にたつた。蜜は、東壁南寄りに壁を切り込んで作られていたが、約二十匁前後のものであつた。床面の北東隅を除く他の位置には、柱穴らしきものが認められたが、周溝と同様ははっきり確認し得なかつた。

遺物は、皿及びその破片のみで、須恵器のもの六点、土師器のもの一点、計七点であった。足軽遺跡について、以上その概報を記したが、多少その記述の不備をおぎない、あわせて、その年代に対する考えを簡単に述べておきたい。

第五号住居跡は縄文式文化前期特に関山、黒浜に類する土器の多量出土をみたのであるから、この住居については今更記すまでもない。然し、第一号住居跡より第四号住居跡迄の年代については考察の余地がある。この種の住居跡の年代の決定は、多くの場合出土土器によってなされるのが普通であるが、本遺跡に於いては前に記した如く土器の出土はまことに少量であつて、そのみによつて、年代を決定するには無理がある。そこで、土器以外のものによつて考える必要がある。よつて次の一表をかかげてみると、

番号	平面形	方向	竈の位置	備考
第一号	三五〇×三九〇〇	S—18°—W	東壁南寄り	
第二号	(二五〇+X)×三四〇〇	S—6°—W	東壁南寄り	東西の長さ不確認
第三号	三二〇×三五〇〇	S—9°—W	東壁稍々南寄り	
第四号	三三〇×四〇〇〇	S—7°—W	東壁南寄り	
(平均値)	三三〇×三七〇〇	S—10°—W	(東壁南寄り)	

以上の通りとなる。今、これらの住居跡の共通した性格をあげると、

- 1 方形であり、しかも小形である事
- 2 住居跡の向きは南より西に触れている事
- 3 竈の位置は東壁南寄りに焚き口を西に向けてつくられている事  
尚、その他に、
- 4 確實に柱穴と認定されるものが無かつた事

## 5 住居跡内部よりの遺物の出土が少なかった事

等を上げる事が出来る。このように共通する性格の多い事は、出土土器の類似している事をも考え合わせて、住居跡の年代は多少の差（例えば三号と四号の場合、四号住居跡で三号住居跡を切り込んでつくっている。）こそあれ、大差ない事を示すものと考えられる。

本県内においてこの種の住居跡は、筆者が先に三様式に分類し、これは時間的な差を示すものとしたが、かような研究の結果にこれらの住居跡を当てはめてみると、一番新しい様式に一致する。新田郡藪塚本町榎八幡遺跡は、この新しい様式の代表的なものであるが、この住居跡の年代は遺物中に仏教文化に関連をもつものである事から、八世紀初頭と比定したが、もし、この事に誤りがないとすれば、本住居跡群の年代も八世紀初頭（一二〇〇年前）をあまり上

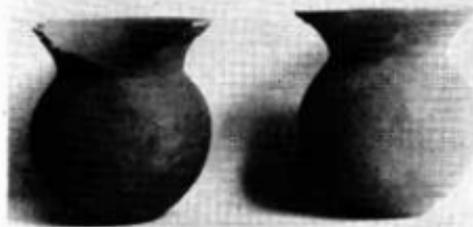
下する事は無いと考える。——すざく会誌第四輯

より——（松島栄治）

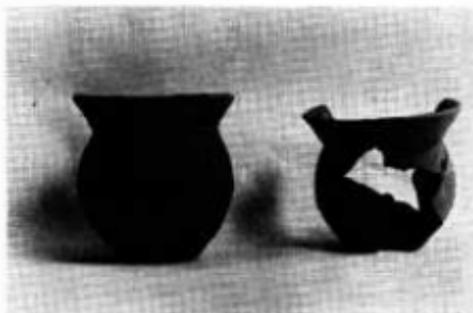
この他に偶然の機会に土器が掘り出された例はあるが、残念ながら土器を取り上げただけで、遺構については調査されず、出土状態その他くわしいことは不明である。

### ②前橋東商校庭出土の土器

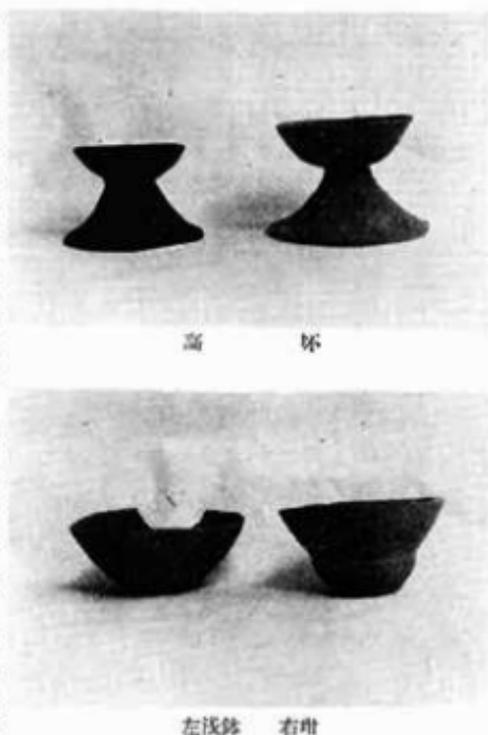
前橋東商業高等学校（上大屋字前山）の校庭にゴミ穴を掘っている際出土。二ヶ所のゴミ穴を掘って二ヶ所からほぼ同時期の土器（土師器）



壺型土器



粗製壺型土器



高 杯

左浅鉢 右鉢

三センチ、坏部高二・七センチ、口縁部径九センチ、脚部付根径三・二センチ、底部径一〇・五センチ)、浅鉢一個、増一個(総高六・五センチ、口縁部径一一・五センチ、底部径四・五センチ)の八個が出ている。

これらの土器はいずれも前橋東商で保管している。

調査例は以上のようにわずかであるが、先の地名表から、古墳時代の土器散布地を標高別に分けてみると次の頁の表のようになる。

この表からみると、遺跡は標高四五〇メートルに近いかなり高い所にも分布するが、ほとんどは、二五〇メートル以下のところに集中してくる。これも隣村の宮城村の様子も加えてみると、宮城村においても、標高四〇〇メートル

が出土しているところから、この辺には、かなりの数の住居跡があるものと推測される。

標高	遺跡数
100~150 <sup>m</sup>	10
151~200	15
201~250	6
251~300	1
301~350	2
351~400	2
401~450	2
451~500	0
500以上	0

なつて、また分布範囲も分布量も増加している。

縄文時代の生活が狩猟、採集経済に基礎をおき、自然の幸を求めて生活範囲が広がったのに対し、農耕、特に稲作の始まった弥生時代には、農業技術の低さからも水利の上からも生活の場が限定されてきたことであろう。しかし、古墳時代以降、農業技術の進歩に伴い再び生活圏が拡大していったものであろうか。

また、本町における古墳時代の土器散布地をみると、特に標高二〇〇メートル以下の地域では、一つの台地上に広い範囲にわたって多くの土器片が散布する例が多い（地名表参照）このことから、古墳時代には、かなり広い範囲に

以上のところは、十例中四例であり、（一例は礫石で祭祀遺跡）、六例は三〇〇メートル以下のところに分布している。この傾向は、縄文時代の中期以降の様子に類似している。

縄文時代中期まで広範囲に分布の認められたのに反し、縄文時代晚期から弥生時代にかけて、その分布量が急減した。しかし、古墳時代に



杯（茂木出土）



甕（茂木出土）



土器器台（品川時次郎氏蔵）  
（編越水押出土）

わたる大きな集落の存在したことが推測されるのである。

## 第五節 仏教文化

### (一) 概要

群馬県内においても、古墳文化末期の頃（七世紀末～八世紀初頭）には、構築される古墳の中に仏教文化の影響があらわれはじめる。

さらに、古墳構築の風潮がなくなる頃には古墳に変わって瓦葺きの寺院が建立されるようになる。

大胡町においても、古代寺院の跡と推定される所がある。これもまた、発掘調査がされていない関係から確実な資料は無く、その規模、建物の配置等は不明である。

#### ① 白草寺院跡

赤城南面道路から金丸へ登る白草の十字路西に、稚蚕飼育所があるが、この飼育所を建てる際、基礎を造るため掘った所、大きな石がほぼ等間隔に並んで出てきたという。これもそこに立ち会った人の話で実見していないので確実なところは明らかでないが、地域の状況と考え合せて寺院の柱の土台石と推定される。また、この地域出土と伝えられる柱の土台石と見られる一七七センチ×一九〇センチ厚さ七〇センチの石が、澁窪字白草の集会所の庭においてある。瓦の散布は現在ほとんど見られないが、この付近には、奈良～平安時代の頃にかかると思われる土器の散布も見られるのであり、これらのことから、ここに古い寺院の跡があるものと推定される。

#### ② 茂木寺院跡

茂木字天神風呂から瓦製の塔の破片が発見されているとともに（秩父総合博物館蔵）、堀越字小柴木の町民プール南、ポ



瓦 塔



堀越古墳にて、左から  
尾崎喜左衛門大名誉教授、茂木雲雄大胡町長、豊国覚堂上毛人  
主幹、町田角太郎農協理事長、座っているのは高橋照之助（撮  
影丸山）

一リング場西の畑には、これも土台石と思われる石の出土が伝えられていることからこの付近もまた寺院跡と推定される。  
出土している瓦塔は、屋根のほんの一部分であるが、三重塔か五重塔をかたちどったものであり、なだらかな軒反りと垂木（たきぎ）が美しい。

## 第二章 中世

## 第一節 大胡郷

おおごとという地名は上野三碑の一つ「山の上碑」にみえる「大見臣」がそれであろうと推定されている。古代からのものである。山の上碑は高崎市山名町字山神谷の奥まった丘陵の南傾斜の地に立っており、傍らに山寄せの古墳が一基南向きに開口している。碑はこの古墳の墓碑と考えられている。

辛巳歳集月三日記

佐野三家定賜健守命孫黒光刀自此

新川臣兎斯多々弥足尼孫大見臣娶生見

長利僧母為記定文也

放光寺僧

天武天皇十年西暦六八一年の建碑と考えられている碑で、上野三碑のうちでも一番古く、日本全体から見ても京都の宇治橋断碑につぐもので、完全な石碑として最古のものといってもよいものである。

こうした古碑に出てくる大見（おおこ）の臣（おみ）が住んでいたのが現在の大胡であると比定されている。しかし、古代の大胡はその名が外の記録に見えない。

利名類聚鈔に見える勢多郷の郷名は

深田、田邑<sup>多無</sup>、芳賀<sup>加</sup>、桂費<sup>加</sup>以

真壁<sup>萬加</sup>、深渠<sup>無曾</sup>、時沢、藤沢<sup>左波</sup>

の八郷が上げられている。しかし大胡町区域と考えられる郷名はない。どれなのであろうか。中世になると「大胡郷」という名が見えてくる。長楽寺文書のなかに――

建武二年（一三三五）「上野国大胡郷内野中村」、応安六年（一三七三）「大胡郷神塚村」、「大胡郷内三俣村」、康暦三年（一三八一）「大胡郷三俣神塚村」、「上泉・塚口村」といくつも出てくる。和名類聚鈔にないということは大胡が中世的社会の形成のころによくやく地域の中心的存在としての活躍が活発になったために表面に表われたと考えてよいのであろうか。大胡氏の勢力によるものと考えるのである。

また彦部文書（桐生市広沢町）に大胡庄の名で村名をあげている。

上州之内 持分之事

一、大胡庄之内

宇坪井村 長安村 小屋原村 今井村 大嶋村

片貝村 小嶋田村

一、林庄之内 名震郷半分

一、長野庄之内 行力村 中里村

一、八幡庄之内 豊岡村半分

一、宇次井庄之内 飽間郷・岩戸村

一、高別当村 池尻村

以上

この文書には年号の記載がない。尾崎喜左雄先生は上野国守護山内上杉氏の直轄領で、永徳二年（一三八二）に「大胡上総入道跡」が没収され、關所（けつしよ）地として上杉氏に与えられた文書と推定している。

これらの文書に示された村名をもう一度あげると野中、幸塚、三俣、上泉、塚口（石関か）、笈井、長安（長磯か）、小屋原、今井、大島、片貝、小嶋田の十二か村になる。これらは現在の大胡町から西あるいは西南にあたり、旧利根

川の河岸段丘に沿った村であり、鎌倉時代から室町時代初期までの利根川が現在地に変流する以前と考えられるところから、大胡という地域は利根川にせまる地域と推定されるのである。

なお、南には大室庄があり、東に山上保があり、西北に青柳御厨、細井御厨があるので区域が限定されるであろう。

## 第二節 大胡氏

大胡郷の地頭職であったであろうか。鎌倉殿、源頼朝の御家人として活躍しており、勢多郡の郡司職でもあったであろうか。そうした勢力をもっていた大胡氏について吾妻鑑から記事を記す。

①建久元年十一月七日 頼朝入洛の行列、後陣隨兵十一番

大胡太郎

(西暦一一九〇)

②建久六年三月十日 頼朝の東大寺供養のため供奉人 隨兵

大胡太郎

(西暦一二九五)

③建久六年五月一日 大胡佐貫頼足利宿所に集まる

④暦仁元年二月十七日 將軍頼朝上洛の隨兵 七番 大胡左衛門次郎 大胡弥次郎

⑤仁治元年八月二日 將軍一所參詣行列、

先陣隨兵 大胡左衛門尉

⑥寛元四年二月二十九日

(西暦一二四〇)

藤原九郎實盛、同父遠直等、召放所領、被召置其身、是悪

党扶持之由、大胡五郎光秀訴申之間、被礼明之処、其過依

難遣也。

⑦寛元四年八月十五日 鶴岡放生会、將軍御出行列先陣隨兵

大胡五郎

(西暦一二四六)

⑧建長二年三月一日 関院殿造営雜掌目錄

裏案地 用意分

一本 大胡太郎跡

(西暦一二五〇)

⑨正嘉三年三月一日 將軍家一所御進免 行列 先陣隨兵十

二騎 大胡太郎跡 大胡掃部助太郎

(西暦一二五八)

これに尊卑分脈にみえる系譜を付すと次の通りである。

大胡太郎重俊——成家といった系譜から始まってどう連なるか、明らかにすることができない。



牛込

徳文新門跡正がとよみ深たの。太皇尊御上  
御徳天御之信せしより、是科にて、其内  
各領す。これより代々治地に住し、其内  
少領御領がとき、安縁同や込にまつり信  
し、其内其内少領御行地名にまつりて御領  
を牛込にあらしむ。

● 遺徳 太皇 足利大夫城行が月。

● 殿家 太皇

● 徳行 太皇

● 徳光 貞法郎

● 光家 其内少領

● 光家 其内少領 入道徳光郎  
徳光郎 其内少領 入道徳光郎  
徳光郎 其内少領 入道徳光郎

● 光之 其内少領

● 光清 其内少領

● 光高 其内少領

● 光國 其内少領

● 徳行 其内少領 入道徳光郎  
徳光郎 其内少領 入道徳光郎  
徳光郎 其内少領 入道徳光郎

● 徳行 其内少領 入道徳光郎  
徳光郎 其内少領 入道徳光郎  
徳光郎 其内少領 入道徳光郎

● 徳行 其内少領 入道徳光郎  
徳光郎 其内少領 入道徳光郎  
徳光郎 其内少領 入道徳光郎

● 徳家 其内少領 入道徳光郎  
徳光郎 其内少領 入道徳光郎  
徳光郎 其内少領 入道徳光郎

● 徳之 其内少領

● 徳清 其内少領

● 徳高 其内少領

● 徳國 其内少領

● 徳行 其内少領 入道徳光郎  
徳光郎 其内少領 入道徳光郎  
徳光郎 其内少領 入道徳光郎

● 徳行 其内少領 入道徳光郎  
徳光郎 其内少領 入道徳光郎  
徳光郎 其内少領 入道徳光郎

● 徳行 其内少領 入道徳光郎  
徳光郎 其内少領 入道徳光郎  
徳光郎 其内少領 入道徳光郎

● 徳正 其内少領 入道徳光郎  
徳光郎 其内少領 入道徳光郎  
徳光郎 其内少領 入道徳光郎

● 徳之 其内少領

● 徳清 其内少領

● 徳高 其内少領

● 徳國 其内少領

● 徳行 其内少領 入道徳光郎  
徳光郎 其内少領 入道徳光郎  
徳光郎 其内少領 入道徳光郎

● 徳行 其内少領 入道徳光郎  
徳光郎 其内少領 入道徳光郎  
徳光郎 其内少領 入道徳光郎

● 徳行 其内少領 入道徳光郎  
徳光郎 其内少領 入道徳光郎  
徳光郎 其内少領 入道徳光郎



大胡城図（長善寺蔵）

### 第三節 大胡氏の信仰生活

鎌倉時代仏教は浄土信仰の発展である。その浄土宗を開いたのが法然上人である。大胡氏の信仰は法然上人の指導をうけて念仏の信仰に入った。法然上人の信仰生活を示す絵巻物である「法然上人絵伝」は鎌倉時代末期には完成していたものである。この中に大胡小四郎実秀のことが見える。

法然上人行状絵図（第二十四）から

略）

なをなをいよく信心をふかくして。二心なく。念仏させたまふべし。くはしき事。御ふみにつくしがたく候。この御つかひ申候べし。正月二十八日源空已上。実秀この消息を恭敬頂戴して。一向に念仏す。寛元四年往生の時。異香をかぎ。音楽をきくものおほかりき。実秀が妻室。又ふかく此消息のをしへを信受して。称名の行をこたりなく。つるに奇瑞をあらはし。往生の素懐をとげけるとなん。

上野国の御家人。大胡の小四郎隆義。在京のとき。吉水の禪室に参じて。上人の勅化にあづかり。ふかく念仏を信受しけるが。下田の後。なを不審なる事侍て。上人給仕の弟子。流屋の七郎入道道通がもとへ。尋申たりけるを。道通上人に申入て。仰をつたへて。三心以下の事。こまかに申つかはしけり。隆義が子息。大胡の太郎実秀。かの消息を相伝し。父のあとををひて称名の行。をこたりなかりけるが。念仏の安心不審なる事侍て。小屋原の蓮性を使者として。上人に尋申たりければ。真觀所を執筆として。書つかはされける状云（中

法然上人から指導を受けた「消息、大胡太郎実秀へつかはす御返事」と「消息、大胡の太郎実秀が妻室のもとへつかはす御返事」がある。後者は正治元年己未。お使は蓮上房尊覚也と。

金沢文庫（神奈川県立、横浜市金沢区）所蔵の「念仏性生伝」は山上（勢多郡新里村）の行仙が編集によるものと考えられている。この中には上野国大胡小四郎秀村をはじめとして信濃国小田切四郎澄野遠平、摂津国小野左衛門親光などの武士たちの伝記を多く収めている。群馬県内の人たちでは上野国湖名庄波志江市小中次太郎母、同国赤堀紀内男、同国同所鼻入道、同所布須島尼、上野国住人比丘尼青蓮、同国細井尼、小柴新左衛門尉国頼らがある。大胡小四郎秀村の項を記す。

#### 第四十六上野国大胡小四郎秀村

大胡太郎孫子也、是人、又以源上人消息、為電鏡、一向念仏  
昼夜不懈、或時夢想云、從西方、大蓮花飛來、人告云、明日  
午刻得性生云々、以夢狀誌、鎌倉南無房々々々合夢云、四十  
以後、可達性生云々、夢後五年、生年四十二歲十月之比、脚

集異、同五日丑刻、向空含笑知識、問云、何見境界、答  
云、仏来迎其體如指以内外明也、又聞音樂勝人間樂之事、  
非其語之所、及其後十念七ヶ度、最後念仏与仏字向息也、  
平時正元々年己未。

#### 第四節 大胡郷内野中村

長楽寺文書の建武二年六月十九日には、大胡郷内野中村の地頭職を長楽寺（現新田郡尾島町世良田）に宛行なう園寛が出ている。

#### 内野国大胡郷内野中村地頭職事

長楽寺了恩上人禪庵義貞寄進被

聞食了不可有相違之由繪旨如此

早可被沙汰付之旨国宣所候也

仍執違如件

建武二年六月十九日 平（花押）

源（花押）

謹上

沙弥（花押）

御目代殿

これは大胡郷野中村の地頭職を新田義貞が長楽寺に寄進している。長楽寺は了愚上人がおり、建武元年六月十日に「長楽寺々務事、先例に任せて住持せしめ給うべし」という補任状が出ているので、その時と一緒に出されたのであろう。時の後醍醐天皇の繪旨によって承認されたので上野国司である義貞が国宣を出す。そこで義貞の奉行である平、源、沙弥の三人が連名で上野国目代へ命令が出されたのである。

長楽寺文書に大胡郷内野中村ほかの件についての一件文書がある。群馬大学名誉教授尾崎喜左雄先生はこのことについて左の如く述べている。

野中村は建武二年（一三三五）に、新田義貞が地頭者を長楽寺に寄進している。神塚（幸塚）・三俣・上泉・堰口の諸村は、応安六年（一三七三）から康暦三年（一三八一）の間に、長楽寺大通庵へ売り渡された田島在家についての三通の請文に記されている。

これを表示すると次表のようになる。

大胡郷内の長楽寺大通庵への活却（売却）の田畠在家（田畠の単位は反）

	年	神 塚 村	三 俣 村	上 泉 村	坂 口 村	活 却 主
A	応安6・6・20 (1373) 大胡秀重請文	□ 在家1字 田 10 高 7				大胡治部少 輔秀重
		塚 島 衆 地 在家2字 田 7・5				同上亡父 性秀
		田 1				善 阿
					在家3字 田 8 高 1.5	比丘尼了祐
B	応安6・6・20 (1373) 沙弥道喜請文		在家2字 田畠 32 (作人馬太郎入 道并新墾)			沙弥道喜
C	康暦3・4・5 (1381) 藤原政宗請文	弥五郎入道 在家1字 田 13 高 4.5 日吉田 10		杉木在家1字 田 13 高 (在之) 高 4		藤原氏女
		弥次郎入道		孫次郎入道		

		作田 4 島 4		作田 4 佐藤大佐在家の之 西田 1 次田 1		
				輔 在 家 田 10 島 5		小五郎入道了阿

計 (在家6字 田45.5 島15.5 田島15.5) (在家1字 田29 島9余) (在家3字 田8 島1.5)  
 總計 在家10字 田82.5 島36.0余 田島32 耕地計140.5

その一通は大胡秀重が本人および一族の性秀、善阿、比丘尼了祐の売り渡し地についての、関東管領府の確認の奉書に対する請文である。次は沙弥道喜の同趣旨の請文、他の一通は藤原氏女および小五郎入道了阿の売り渡しに関する、おそらく惣領であらう藤原政宗の同趣旨の請文である。ただし、沙弥道喜と藤原政宗が大胡氏一族か否かは不明である。

この売り渡しの形態にはぼ三つある。

- ㊶ 「弥五郎入道在家一字、田老町三反、島四反半」
- ㊷ 「弥次郎入道作田四反、島四反」
- ㊸ 「日吉田老町」

㊶は在家、田島が一セットになっており、㊷は在家が付属していないが、「作」すなわち耕作者が明記しており、㊸は耕地のみが切りはなされて記されている。

在家というのは、農民の屋敷地を意味し、そこに居住する農民家族と家屋とをも含めた用語で、在家役という公事負担の対象となる。すなわち在家の所有者は、在家農民から必要に応じて労働その他生産物を取返し、在家自体を売却することが出来るのである。所有主に対する在家居住の農民の関係であるが、身分的には下人・所従というような従属的な農民であろう。在家はまた耕地田畠と結合している。田畠、在家という一セットの生産体を構成しているのである。②の型はこの生産体の売却である。

③は在家を含まない耕地の売却で、他に生産体を構成するであろう在家農民が、④に「作」という形で記載され、⑤においてはその記載がない。おそらく⑥は、作人を宛てる権限は買主の自由に任されたと考えられる。

大胡郷の各村落はこのような在家田畠の集合体である。在家の中には、ここに登場したような領主によって売却される在家（下人在家）と、そうでない自立した在家（一般百姓在家）もあったと考えられる。一村落はほぼ一〇戸（一〇戸）前後の在家が存在する集落を想定されるであろう。そして各村に大胡氏一族が配置され、村名を称する領主として存在し、惣領大胡氏によって統轄されていたのである。

### 第五節 鹿島神宮文書の大胡氏

また茨城県鹿島郡鎮座の鹿島神宮古文書に大胡掃部助秀能の名がある。

大胡秀能請文（鹿島神宮文書）

（編纂書）

（秀能）

（浄水、高幹）

「大胡掃部助請文貞治五・三・三常陸大掾入道取進之」

貞治四年二月二日御教書并同年九月廿日御使道之催促状、同

潤九月十三日到來、據拜見仕候事、抑於彼岩懸郷者、本主益戸左衛門尉新田開免為後園堀内之間、自往古到于今、無所役所也、此条若戸亦七重致与相論之間、給御下知事、敢不可有御不審、若重自社務方有申子細者、於御沙汰可令出帯支証状候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言

貞治四年閏九月十四日 掃部助秀能(裏花押)

請文上

進上 御奉行所

この関連文書として鹿島町塙不二丸所蔵文書に「大祇宜中臣高親社領并神祭物等注進状案」によれば

目安

鹿嶋大祇宜高親申当社領并神祭物等注文

沙弥浄水大棟高幹請文

(端裏書)

「常陸大拯(浄水、高幹)入道請文 貞治五・三・々」

鹿嶋社大祇宜高親申

常陸国南部大枝郷半分并供米事

任被仰下之旨、欲致其沙汰候之処

益戸徳犬丸、同下野守、大胡掃部助(秀徳)

等請文如此候、令執進覽之候、以此

旨可有御披露候哉、恐惶謹言

貞治四年十一月十五日 沙弥浄水(花押)

右、伴神領等、大概注進如件

一、大賀村 大生弥太郎入道々円濫妨事

(以下略)

建武元年十二月 日

### 第六節 大胡城の構造

赤城山南麓地帯は、多くの放射谷が並走して相互の間に細長い舌状台地が形成されている。舌状台地端は、或は広く或は狭く、所望規模の好適な地形を築城のために提供する。

その上、厚いロームの地盤は、工事が容易で思いのままに経始することが出来る。ロームの下には白色粗粒で比較

的堅牢な八騎層の厚層がひろがっている。第二次大戦中、大胡城本丸下に設けられた地下工場はこの八騎層中に穿たれたのである。

室町時代以来、所在の地衆はそれぞれの分度に応じ大小の城砦を構えて領所の安泰をはかり外敵に備えた。そのためここに分布する城砦数は四十あまりに及び、それらの中央にあって大胡城は盟主的地位を占めていた。しかし、総社、既橋の伝統的中心勢力に隣接していたため、地方的一土豪の居城としてより発展する機会にめぐまれることはできなかつた。

大胡城の築かれている場所は、大胡町の北側に中心をもつ細長い台地で、北端部は標高一八〇m、南端部は一六五mで一五mの高度差をもち、町並からの比高五乃至一〇mである。尚、台地の余勢は約一〇〇〇m南までのび、町の西側を通過して次第に低夷する。

台地を形成したのは、東側を南に向って流れる荒砥川と西側を南流するその支流の浸蝕であって、西水流の間隔は二〇〇m乃至三〇〇mである。

#### ◎築城の基本

大胡城の広さは南北六七〇m、東西の最大幅三一〇mであるが、東西幅の数値には、根小屋、西曲輪の平城部を含んでいるので、丘城部の幅は最大一八〇mにすぎない。

経始の基本は、南北に細長い台地を、東西方向をとる数条の堀切りで断つた所謂並郭式の構造であって、その東に根小屋、西南に西曲輪の平城部を附加してある。

丘城部は、北から近戸曲輪、北城（越中屋敷）、本城、三の丸、南曲輪の五単位から成り各々の間の堀切りは大きく、八騎層までも掘り下げている。特に近戸曲輪、北城間のものとは本城三の丸間のものとは顕著で、前者（便宜上第

「堀切りと呼ぶ」は、長さ一六〇m、上幅七五mに及んでいる。この幅は中世の堀切りとしてはまことに異常であつて、この幅をもってしては、敵が一方の郭に侵入した場合、他方の郭からの矢玉による逆襲制圧は矢頭が遠すぎて不可能である。従つて、近戸曲輪は大胡城の出城であると推論しなければならぬ。この堀切りはおそらく自然の窪所を掘抜したものであろう。後者（第三堀切りと仮称）は中央でS字状に折を形成し、深さ七乃至八m、その内を用水が流れ、西から東に城を横切っている。該用水はかつては城地の西側を流れていたものを、おそらく牧野氏時代に第三堀切を通して東側に移し城下町の用水にしたのであろう。第三堀切りは流水の浸蝕で底も窄たれ側壁も削られて現在の険しい表情を呈しているが初期には第二、第四堀切りと同様であつたと推定される。

北城、木城間の堀切（第二堀切と仮称）は長さ一六〇m、中央部七五mは明らかに純然たる堀切であるが、東部と西部とは単なる堀切りではなく、拡がって一郭を形成している。東部七〇mの間は、上幅五〇m、底幅二五mあり、今これを「中曲輪」と仮称し、西部は玉蔵院という寺のあつた郭なので「玉蔵院曲輪」と仮称する。

三の丸、南曲輪間の堀切（第四堀切と仮称）は、長さ一二〇m、上幅一五乃至二〇mの直線状であつて、底は東西両端より中央部が高い点、他の三堀切りと異っている。故福島武雄氏が大胡城考で、「はじめ第三、第四の郭（第四郭は南曲輪のこと）は一郭であつたが、その後（永祿以後か）に中央に堀切を設け」と記しているように、或は他の堀切とは別の時代に掘られたものかも知れない。この堀切は、西曲輪が設けられてからは、西曲輪と根小屋とを結ぶ唯一の連絡路となつた。

近戸曲輪の北側から西北面をめぐつて掘られた堀切（北堀切と仮称）は城の北限である。北堀切は他の四者と著しく異つた点がある。即ち、一、鏝形であること。二、土橋を通じていること。三、両端を急斜面に切り放し、従つて交通路には用いられていないこと。四、西半は堅壘の形となり、南北方向をとること（他の堀切は皆東西方向）の

四点であるが、こうした形の壕も、西端が切り放されている場合、堀とは呼ばず堀切とするのである。

北堀切の全長は約一三〇m、上幅一〇m乃至二〇mで、中世城郭に多く見られる規模である。東端は短かく南に折れて四角的な経始の意図を見せているが、かなりの部分が崩壊したらしい。土橋は中央附近にあり、壕線に斜交して、内に喰違い虎口を形成する。余土は内側に盛られて高さ二m程の高土居となる。これらを総合し、この堀切りも亦、他の四堀切とは別な時期に掘られた感が強い。

大胡城には、これらのほかに、短かい堀切りや、空堀、水堀の址がかなり多く認められるが、いづれも規模が小さく、補助或は添加工事的な性格を示している。

#### ◎近戸曲輪

近戸曲輪は、南北一五〇m、南縁の東西一〇〇mの三角形の郭で、東は急崖で荒砥川の古い河跡にのぞみ、北から西にかけては北堀切で断たれ、西南隅の一小部は急斜面下を用水が流れている。南面には八m下に腰曲輪状の部分があるが、現在民家をのせ、中央を参道の石段がまっすぐに登る。ここは北城との間の幅広い堀切りである。石段は神社のために新しく設けた登路で、城郭時代の登り口は郭の東南角にあり坂虎口で真東に下る。これと対照的な位置に北西面に開く虎口は、喰違い構造であって土橋を構え、東側土居から強力に側防されている。

南面を除く周囲に土居が盛られていたらしいが、東面南半と西南角は崩落して現存しない。郭面は三段に分れ、中段に近戸神社（大胡神社）があり、西南部の最も低い所に奈良原大温寺が建っている。

前述したように、この郭は北に分離した状態にあり、大胡城の出城であったろうと考えられる。大胡城全体の形が不自然に南北に長く、側面からの攻撃に弱さを示している点、越中屋敷の郭を北城といい、城の北限を指すもののようにあることは、近戸曲輪が城外の出城であることを意味するであろう。

尚、大胡氏のもっていたと推定される実力と、城の広さを較量するとき、大胡氏最初の城はこの郭一つではなかつたかと想像される。当初築城の時期とは、関東動乱のきざした永享の頃であろうか。それ以前の大胡氏の居館はおそらく現養林寺のところで、近戸曲輪築城後も両者を併用していたことであろう。

#### ◎玉藏院曲輪

北城と本城二の丸との間の第二堀切西部はひろがって、用水に西側を限られた南北一〇〇m、東西七〇m程の一郭となる。郭城面、二の丸面より七mばかり低い。第二堀切底より二m高く、堀切堀穿時にはそのまま残された自然土面であることが知られる。ここを堀り残したのは用水が堀切に切れ込み荒砥川に流入するのを防ぐためでもあろうが、一北を構えて本城、北城間の繋ぎとし、また搦手口の固めとした意図も推察される。西北面寄りに鐘形の高土居が盛られ、直虎口跡もあるからこれが明らかとなる。この虎口は北城堅塚末端部の隘路にあったと思われる虎口との間に若干の武者屯を設けるため、一〇mあまり後にさげである。

尚、郭の西南部に橋台跡が認められ、西の養林寺方向に対し架橋されていた。南には二の丸の西虎口に登る坂道がある。

大胡廃城後この郭には真言宗玉藏院が建立されたが現在は金胎寺と合併して堀越の金藏院観音寺となり、墓地だけがのこっている。玉藏院曲輪とはそのための名である。

#### ◎中曲輪

第二堀切の東部、本丸と北城との間に当る部分は拡大して「中曲輪」を形成する。ここは本丸から二の丸堀を通り北城東虎口に入る中つぎの郭であって、北城の東下をめぐる近戸曲輪東南虎口に通ずる道もここからつづいていたのであろう。

北城を本城と一括した防禦計画に加える場合には、二の丸からの直接連絡をより強力にすべきで、土橋を掘り残すか、掘切に「折」を設けて架橋するのであるが、この城のように別城支点として独立性を強調するには、「中曲輪」のような中継施設が必要となる。敵がここに侵入しても、両側の郭からの俯射により長く地歩をふまえることは不可能である。

### ◎本丸

本城は、本丸、二の丸とその附帯施設から成る。二の丸は本丸の西北—西—南とめぐって半ば囲い付となり、その間に空堀が掘られている。しかし、空堀の規模は、既述の各堀切に比し著しく小さい。このことは、本丸、二の丸間の関係が、他の諸郭間との関係と異っていることを示す。つまりこの二郭は大胡城の最終的作戰単位で、本丸は守戦の郭、二の丸は防戦の郭で、本丸は殻を閉じて持久を策する構え、二の丸は出撃によって主動作戰を展開する拠点である。

本丸は径一〇〇m程の円に近い多角形で、東北角部を除く全縁に高土居をめぐらす。土居の高さは二の丸に面する部分で三、五m、東面など他の部分では二mである。このことは郭外の高低によるものであって、外側の低い東面などでは土居が低くても遮蔽効果は充分だからである。しかし、高土居は郭内遮蔽を主とする構造で、防禦戦の足場は土居上面の狭い武者走到に限られ、かけ引きにはかえって不便である。福島武雄氏の大胡城考によれば、「本丸は東西、南北共約四十間で、ほぼ中央部に南北の境界があつて、城内を東西に二分している。この境界は半分玉石を積んで、上を芝土居としたものらしく、土居敷二間、高さ一間位あつた事と思はれる。その上にどんな建物があつたか知る事は出来ないが、簡単な低い塀か櫓が建てられていた事であろう。

この土居を以て郭内を二分した事は、単に防禦に重きを置いたものと見るよりは、日常これを区分する必要があつ

て、その為に設けられたとすべきではあるまいか。さうとすれば土居東方は奥であつて西方は表に當っている。表には城主の公式の殿屋が設けられ、日々の政務等もここで見られたことであろう。東方の一郭は所謂御殿であつて城主の家庭的生活を営む場所であつたであろう。

土居の中に二ヶ所の城門址があつて、その北方は喰違門で、南方は第四図の如く枳形門の型式をとっている。……普通の枳形城門中類を見ない所で、兵の出入にも便利がなく日常奥と表との交通に用いる為に造つたと見るべきではあるまいか。」と細長い門枳形の図を添えて説明している。

残念なことに、この中仕切枳形門は武道場の建築によつて破壊され僅かに痕跡をのこすのみである。中仕切の南北両端は土居がやや搦がり櫓台であつたと推定される。

本丸の虎口は二ヶ所ある。中仕切南端西側にあつたものは、石段が出来て破壊され、石垣を僅かに残すだけであるが西面のものによく認められる。この虎口は土居上を越える形式であつて、藤岡市の常岡城北虎口、真壁城北虎口金山城馬場曲輪、碓氷城北虎口、東日野金井城東虎口、羽根尾城北虎口、高王山城本丸北虎口、白井城本丸南虎口等各地に見られるが大胡城程明確なものはない。即ち、本丸面から石垣で被覆された斜坡を南に向つて土居上に昇り木戸跡に連する。そこでは南側の土居と北側の土居とは直角に交わり、南側土居の方が一、五m高く且つ虎口より前まで突出する虎口の部分は一m程低くなつてゐる。道はそこから斜坡を二の丸壕底に下り、左は二の丸へ右は壕底を北城に向うのである。

本丸東分郭には井戸跡が二ヶ所ある。西分郭にある城山稲荷は定法の如く本丸西北角に近く位置する。東北縁に土居を欠くのは鬼門除けであろうか。

### ◎二の丸

本丸、二の丸間の本丸堀の形は半円弧ではなく、南部、西南部、西部、西北部の四部分の直線壕の連続から成り、屈折部の角度は、一五〇度、一二〇度といづれも鈍角である。西北部の端は東に向って切り放され、そこに中曲輪への下り口がある。西北部と西部との曲り角には明らかな井戸跡がのこり、二の丸面の北端部に水櫃があつて井戸水を汲み上げていたと推定される。西部には本丸西虎口からの斜道が下り、この堀が交通壕でもあつたことを示している。山城の空堀は交通壕としても使われることが多い。南部中央から南に向って長さ三〇mの支壕が分れる。南部と西南部との接点に、本丸南虎口址からの石段が下っている。十年前には、この石段は二つの部分から成り、間に跳り場があつたのだが今は拡幅され後退し一本になっている。かつて石段下の壕は西南部の方が二m程高い段になっていた。そこは土橋の残部であつたのではあるまいか。本丸虎口と二の丸との関係が不明なのはこの辺に解明の鍵があると考えられる。

南部は東に向って切り放され、そこに石段があつたが、牧野氏の時代に壕底は根小屋面より四m程高く、二の丸東側支壕底と同じ高さで続いていたと考えられる。

この支壕によって二の丸東端から切り放された郭片は、二の丸虎口外の馬出し土居、塀土居の役目を果していた。つまり、支壕底が馬出しに用いられるのである。

二の丸には、城中で最も目立った普請の遺構がある。鍵形の郭面は、外縁の長さ、南縁西縁とも各々一二〇m、幅は東端と中央部が最も広く、それぞれ七〇mある。外縁全面に土居を築いてあつたのだが、崩落して現在は部分的によりはか認められない。北面土居は長く東にのびて、本丸堀北部の外縁を形成する。

西北部は孤状に欠け入り、西下の玉蔵院曲輪からの斜坡を南寄りの部分に受ける。これが搦手筋虎口である。

南縁には西寄り三分の一の所に水の手門址があり、そこから西の土居は高さ一、五m、東のものは高さ二、五mあ

るが、この土居の現存することは、第三堀切中を流れる用水の浸蝕が、まだ二の丸面を崩すまでに至っていない実証である。これらの土居は第二、第三堀切の余土を利用して築いたのであろう。

水の手門は上幅一〇m四方の窪地を前面に備えている。この窪地は一種の内枘形で、この類似形式の虎口は、高崎根小屋城本丸虎口、岩櫃城本丸虎口、幕岩城搦手虎口、平井詰城本丸虎口、国峯城本丸虎口等、中世山城に多く見られるものである。用水がこの堀切に導入されてからはこの虎口は水の手を兼ね、堀切底に下って架橋を渡り三の丸に上る通路ともなっていたのであるが、用水のなかった時代には二の丸正虎口として堀切底からの道を受けていたことであらう。

虎口内側の一部は、野づら積み石垣で被覆され、西縁、北縁には高さ一m程の低土居があり、低土居は北にのびて本丸堀に達し二の丸中仕切となる。

中仕切の中央よりやや北寄りには土居を欠いて出入口となっていた所があった。この中仕切は叢林中に僅かにのこっていたのだが、社会福祉センターの工事によって取り払われてしまった。

二の丸の施設中特に目をひくものは二の丸門の門枘形である。群馬県で唯一つ完全に遺っている門枘形の遺構であって、東北—西南方向の長さ四〇m、高さ二、五乃至一、六mの石垣で被覆された土居の、中央よりやや北寄りに本門を構え、その前面に枘形を備えているのである。

遺構から知られる門の梁間は二間半（四、六m）、桁行一間半（二、七m）。枘形土居は敷幅四m、高さ二、五m乃至一、六m。上に塀を立てていたと思われるが、北側土居は一、五m去って六m東にのび、七、五m南に折れているが屈折角度は一〇〇度位の鈍角である。南土居は門から八、三m南に去って一〇m東にのび僅かに二m北に折れ、屈折角度はほぼ直角である。しかし、二の丸東土居が門の南北が直線ではなく南端がはり出しているので枘形は歪み両腕

端は喰い違ふ。そこで、外木戸又は二の門は斜に東北を向いていたことになる。外門の幅は本門より広く、六mである。

二の丸門附近の土居はかなり大型の野づら石を用いて被覆されており、前面には壕があって土橋も設けられていたと推定される。土居の土はこの壕から取ったのであろう。

二の丸門が崖端から九〇m退って構えられていることは大胡城の構成を考える上に極めて重要である。

城門は崖端に設け、下に馬出しを構えるのが兵の駆け退きに最も有利であるべきを、ここでは何故に後にさげて虎口をつける必要があったのであろうか。

近代戦の陣地「傾法の一つに「背斜面陣地」というのがある。地向斜に陣地を占領することなく、後に退って布陣する法である。その意図は、敵を遠く制して陣地に接近する以前に最大の打撃を与えて攻撃を頓挫させる通常手段をすて、敵に陣地を秘匿し、至近に引き寄せ、一挙に反撃してこれを陣前、陣内で殲滅する方法をとることにある。どのような事情でこれを用いるかという点、次の二つがある。その一つは、敵の火力が強大で、火力戦では勝算のない場合、もう一つは敵を離脱することの出来ぬ至近に引き寄せ、決定的打撃を与えようとする場合である。

中世末、近世初頭においては、長距離戦のような例がないでもないが、防禦戦、野戦の場合とはともかく、攻城戦に於て、火力により守兵に潰滅的打撃を与え得る程の装備をもった軍団は存在しなかった。

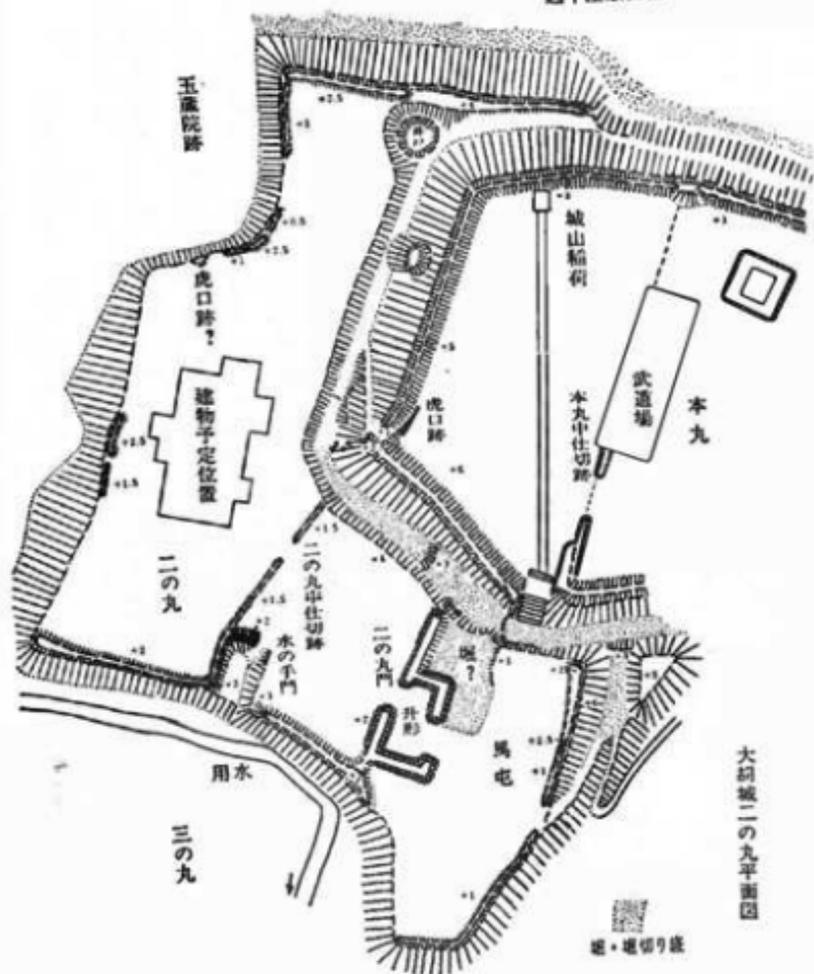
従って、第一の場合は考慮する必要がなく、大胡城二の丸門の企画は第二の場合よりほかない。即ち、ここでの戦斗法は次のようになる。

根小屋を放棄して本城（二の丸、本丸）に立籠った城兵に対し、二の丸門方面を攻撃する寄せ手は、崖縁の土居に拠る守兵があげせる矢玉による損害を留しつつ二の丸門前に押し登って橋形に迫る。城方はこれに対し、二の丸門及

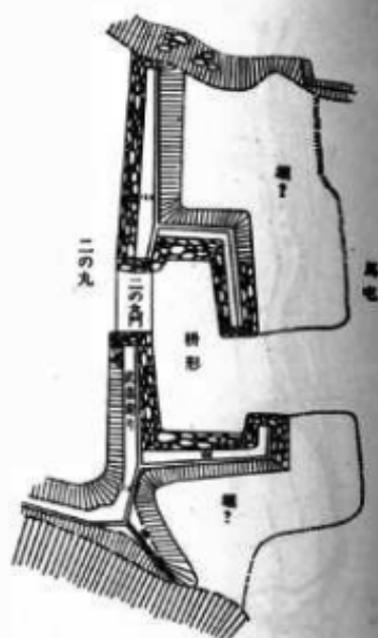
ひその両袖土居から正面射をかけ、数m高い本丸南土居から側射をあびせる。この射撃は俯射であって、寄せ手にとって極めて重大な脅威となる。(この場合の本丸土居を二の丸門の大横矢という)。本丸門東袖の矢倉の任務の一つは二の丸門前の掃射にある。しかも、二の丸門前(馬屯という)の広さは、東西四〇m、南北八〇mという好適な射程で、一点の死角もない。この矢玉にさらされる寄せ手は瞬時にして混乱すること必至である。そこへ、二の丸門から出撃し、本丸門から横槍を入れて、門前の寄せ手を殲滅するのである。このような構造のものを生殺与奪の縄といい、惑敵多端の縄ともいう。生殺与奪の縄の例は、高崎城の瓦小屋のようにさりげない一郭として構えられることもあり、伊勢崎城の隠し郭のように門の外側、側面の小郭として設けられることもあり工夫は千様万態である。この構えは所謂奇兵であって、大胡城の縄には各所に奇の縄が用いられていた。

北城の今次の発掘調査で発見された壕に關してもこのことが考えられる。ここでは、壕の北側に土居が盛られ、南側は北側よりも一、五mあまり低く、明らかに西南分郭が外郭に当る。このことは決して正常な状態ではない。西南分郭の南には第二堀切を隔てて二の丸があるから、方位から考えれば南が内側となるべきであろう。

当時、荒砥川は近戸曲輪と北城との東崖直下を南流していたらしく、その河跡を求めることが出来るので、東西両側からの本城、北城の攻撃は困難であって、自然寄せ手は北から近戸曲輪を攻略した後、北城に攻めかかることとなる。ところが、北城には北面に虎口がなかったように考えられる(発掘の際、通路の断面と思われるものが中央にあったが、構造も不明、城郭時代のものかそれ以後のものかも不明である)。つまり、北城から北に出るには、東西両側の急斜面下と、荒砥川、用水との間の隘路をたどらねばならなかった。このような構造では北城からの大出撃は不可能で、勿論それを計画されてもいなかったといえよう。北城はほとんど持久防禦一方の縄であると言ってよい。このようなものを陰の縄という。大胡城は北に対し陰に備えていたのである。寄せ手がもし中曲輪、玉藏院に侵入したと



大町城二の丸平面図



縄である点にある。このようなものを陽の縄という。

二の丸門の馬屯には、東の崖端部に高さ一乃至二、五mの土居が築かれ、中央だけ土居を欠いて、そこに、本丸堀南部支壕の底に下る斜道がつく（この道は近年の崩落で全く失なわれてしまった）。支壕底からは南に下って出るのであるが、これが牧野氏時代の大手筋であった。

二の丸門前馬屯から支壕にわたる一帯は一種の馬出しであって、二の丸門、本丸門からの出撃隊は馬屯で隊勢を整えるので、この場合ここは武者屯となる。そこから支壕底に下り両側に分れて兵を出すことになるから、本丸、二の丸両門を兼ねる馬出しであるから「辻馬出し」と言えよう。

二の丸門橋形はいづれ復元されることになっているので、その際、橋形前の堀も発掘され旧態を現わすこととなるう。

しても、本城と北城との挟撃にあい、多大の損害をうけねばなるまい。北城からは南に向って行動し、西南分郭に侵入した攻撃軍は、あたかも二の丸門前の場合と同様袋の鼠となろう。

しかしこゝでは、横矢による十字火は、東北分郭南部からだけでやや弱い、二の丸北土居からの矢玉は寄せ手背後を襲う挟撃となる。

只、北城西南分郭と二の丸門前馬屯との相違は、前者が防戦一方の縄であるのに対し、後者は攻勢出撃を企図した

## ◎三の丸と南曲輪

故福島武雄氏の「大胡城考」では、「三の郭の東側と四の郭の東側北半分に巾一間程の腰曲輪があって、元連続していたようになっていいる。又現在のように中央部を堀切りで切断されては腰曲輪として充分の用をなさぬ故、堀切り以前のものと考えられる。」と第三、第四郭が初期には一郭になっていたであろうと推定している。当にその通りである。

第三、第四郭、つまり三の丸と南曲輪とは現在第四堀切りによって両断されているが、両郭を合せたものは、南北二四〇m、東西一二〇mの大郭で、捨て郭であったらうとの推定である。

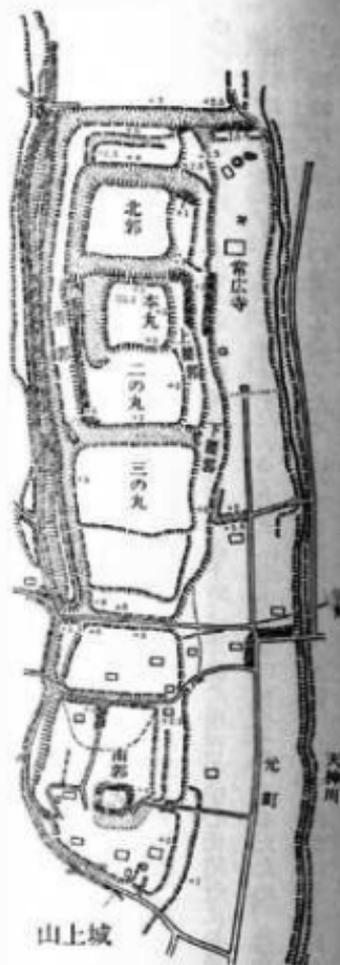
捨て郭とは「用捨の郭」の意で、兵力の多いときは城内としてこれを守り、少いときは放棄する郭のことである。「すべて城は、兵数多くしても築からず、少なくしても広すぎず縄張りすべきもの。」と築城法に教えていると

り、捨て郭などによって伸縮自在に郭取りされなければならぬ。捨て郭が堀切りによって二分されている場合は一層伸縮性が強くなる。

この城と類似のものとして、吾妻郡高山村の中山城（上図参照）がある。その南郭が同じような捨て郭となっている。近くの山上城でも（別図参照）同様であるが、両者共大胡城より比高が僅に低いことが構造の相異を導いた一つの要因と思われる。中山城は北条氏によって築かれ赤見山城守在城ということがほぼ誤りな

中山城址





右衛門顯符が在城し、赤城山南麓を押えていた頃である。

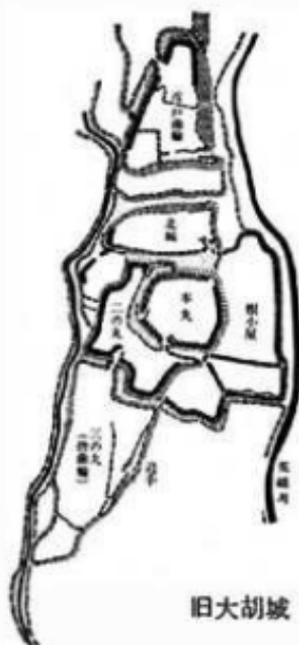
従来、大胡城のその頃がなおざりになっているが、やがて小田原の役を迎える関東は、小田原からの指令が矢つぎ早やにとび、物々しい準備のととのえられていたことが現在の数少い古文書からも明らかに読みとられる。

当時、大胡城が意外に重きをなしていたであろうことは、小田原役後、徳川家康がここに牧野康成を封じたことにより察知することができよう。

大胡北城発掘によって表われた二時期の遺構のうち前者は北条時代のものではあるまいか。中山城址とこの城の近似的性は、現大胡城址の基本的な構成は後北条時代に成ったことを暗示する。

このあたりは、天正末年、北条氏の沼田城攻撃に中山城と呼応して東方黒川谷からする作戦の基地になっていたので、大胡、中山両城の関係は浅からぬものがあった筈である。

いので（中山氏時代の中山城は、この城の東に別に存在する）、山上、大胡両城についても後北条氏占拠時代の改修のあったことが推定される。その時期は天正七年から天正十八年に至る十一年の間で、大胡城には山上總



旧大胡城

代の大胡城を想定することができる。

追手は根小屋にあり、捨曲輪から入り第三堀切を土橋で越えて、後の水の手門から二の丸に進み、本丸門に達する。西曲輪はなく、用水は第三堀切を通らず捨曲輪の西下を流れていた。

#### ◎西曲輪

西曲輪は、用水が東に廻され、追手門が南曲輪南下に定められた際附加された郭である。その時期は、牧野氏入部の天正十八年と推定する。それ以前から大胡の城下町は逐次に現在の中心街附近に発達しはじめていた。

牧野氏は、城下町と城とを直結すべく、大手（追手）虎口をそこに選んだため、捨曲輪を完全に取り入れる必要が生じ、同時に大手からの通路を開くため、用水を東に移す方が便となり、西側に用水路がなくなつて、三の丸、南曲輪が直接城外に曝露することになったから西曲輪が必要となり、西曲輪を設けた事により横幅の狭いこの城の弱点が補

そこで、第四堀切りであるが、これを掘穿したのはおそらく牧野氏であろう。それは、養林寺を菩提所とし、その附近に侍屋敷をあつめた牧野氏は、そこから、根小屋に開口する二の丸門、本丸門の登城順路に達するにはこの堀切底を利用できるからであり、作戦上もこの堀切りを通して追手虎口と根小屋の虎口との連絡を便にし追手の防備を強化し得るのである。そこで堀切東口の用水には最初から架橋して居たこととなる。以上のような観点を総合し上図のような後北条時

おられるようになり、待屋敷地区と城との接合が都合よくなったという効果を生じたのである。

西曲輪は南北三八〇m、幅は最大六〇mの細長い平城部であって、北、西、南の三方に濠をめぐらす。この濠は水堀であったというが、北端と南端とは濠底に四―五mの高低差があり、三、四ヶ所の仕止めを設けなければ湛水できなかった筈である。水は玉蔵院南端で用水を堰き止めて導入したと考えられる。濠に四、五ヶ所の折を構えてあるのは長い濠面を分けて側防するためである。

南端には秋葉神社を祀った高さ四m程の台があり、この台と南曲輪南端との間が追手門跡と推定される。そこから東に通ずる現在の主要路を大手通と呼ぶのもそのためである。

秋葉台はもとは南曲輪と続いた台地で、末端部の傾斜面であったのを掘り切って追手虎口をつけたのである。追手門から用水までの距離は三〇mあるが、この間は追手枡形であって、用水は外堀を兼ねていた。

秋葉台は東西四〇m、幅一五m、西端は南に突出し、この台及び追手枡形の南側を側防する横矢を形成している。追手門内の通路は、南曲輪西南下の濠内道となり第四堀切西口に達し、堀切内を通して根小屋に出る。この濠内道は非常に巧妙な縄で、西曲輪の幅はこのあたりでは二〇乃至四〇mにすぎず、しかも西城外は郭面より高いため濠内道でなければ行動を秘匿することもできず、敵の矢玉にさらされて通行もできないであろう。現在濠内道は埋められそこに町役場が建てられているが、町役場の建物の東部が下って亀裂を生じたのは濠内道を埋めた部分の地盤が脆弱であったためである。

西曲輪堀の内側には堀の余土を盛った高土居が築かれ、堀幅は一〇m内外であったと推定される。

西曲輪西縁中央には西門があって、城西の武家屋敷への通用門に用いられていた。

### ◎根小屋

地籍図を見ると、用水を境とした西の、三の丸、南曲輪、西曲輪は大字堀越、他の諸郭は大字根小屋である。根小屋とは山城における城流の小屋を指すものである。この名称の多く用いられたのはおそらく永禄以前であって、天正時代にはもう本来の意味を失い随性的に用いられるばかりとなっていたようである。即ち武州私市城（騎西城）では城内と同一平面にある家臣団の住地を根小屋と言ひ、北群馬郡の漆原では、城内である「内出」より根小屋の方が高い所にある。つまり城外にある城兵の住む所を、位置の高低に関係なく根小屋と呼ぶようになった。

しかし、大胡城では根小屋は本来の意味に近い。山城における根小屋は城主も家臣もそこに住み、山上の郭内には一部の兵を在番させたのであろうが、ここでは城主と有力家臣の一部は本城にも居住していたようである。北城の発掘における出土品や、柱穴の配置がそのことを証している。

大胡氏の築城時代に根小屋があつて、その地名が生じ、用水が東側に移ってから後、堀越、根小屋の境が定まり、牧野時代の家臣屋敷は堀越側に出来、根小屋方面は東裏と呼ばれるようになった。大字境を定めたのは明治になつてからであらうか。

根小屋には、防禦施設のないのが通例であるが、こゝでは高土居によつて囲まれ、一部には堀も添っていたように思われる。その上四区画にも分れていた。

最南の一区画は後に附加されたのであろうが、他の三区画は、図上でも認められるように、本城、北城と共に囲郭式城郭構成の単位郭である。大胡城根小屋に囲土居を設けるようになった動因は、荒砥川の氾濫だったのであるまいか。小沼を水源とし、銚子の伽藍を破って流下する荒砥川は現在でも荒れることが珍らしくない。大胡根小屋の位置はその危険に常にさらされる所だからである。三区郭を分ける土居が、本丸東南角を起点として放射していることは、区画の目的が必ずしも作戦上の考慮に基いたものではないことを示す。

根小屋各区郭間の出入口は、土居のほとんど取り去られた今日では、位置の認定さえ不能である。（現在の二の丸に通ずる車道は、北区郭南土居の上を走っているのである。）只、最南の区郭とその北の区郭との境の土居には中央に「折」があり、南側に壕も添っていたらしいから明らかに作戦目的によつたもので、折の東に虎口があり、折によつて虎口前を側防していたのであろう。

以上の三区郭は、本丸が構えられたと同時に設けられたと推定されるのは、荒砥川と本丸との距離が八〇mあるので、根小屋の諸郭なしには本丸東面が直接城外にさらされることとなる。

最南部の区郭は、恐らく牧野氏時代に設けられたものであろう。西の丸がなく、三の丸、南曲輪が捨郭であつた頃は、ここに一郭を設けても意味がなく、場所も荒砥川の出水にさらされる所ではないからである。牧野時代のように、追手門を南端に構え、第四堀切を穿つて西の丸から本丸への登城路としたとき、この郭は必須となる。

作戦上からも、この分郭南端の虎口（公民館北側にあり、西側に折による側防機能を備えていた）は追手門との並び虎口となり、両虎口は第四堀切りによつて連絡づけられ、孫子に言う「常山両頭の蛇」の思想に拠る方策に成る。即ち、「その頭をうてば、その尾至り、その尾をうてばその頭至る。」という説である。追手が頭、この虎口が尾に相当する。同様な形のものが、高崎城の榎門と西の丸門との関係に見られたのであるが、今はその跡を求める術もないのに、ここでは遺跡を存している。

それが一城の編成要素中に取入れられるようになったのは近世初頭であつて、天文、永祿の頃の城では、二つの別城の間にこの関係をもたせたものがかなり多く見出だされる。麻場、仁井屋兩城から成る白倉氏の城は典型的なもので、箕輪城と鷹留城、白井城と八崎城、奥外では静岡の二俣城と鳥羽山城等の組み合せ等に見られ、一城が攻められるときは別城から後詰（援軍）するという計画である。

とかく消極的に陥り易い籠城では、このようにして積極的に戦の主動を把握することが必要なのである。

これを要するに、大胡城は近戸曲輪の単郭城とその籠の根小屋にはじまり(第一期)、後、南隣の岡に移って、北城以下の岡城部と東側下の土居に囲まれた根小屋を以て構成される平丘城となり(第二期)。第三期(牧野氏時代)に至って現城址の姿へと発展してきたのである。第二、第三期を通じ近戸曲輪には、城の守護神たる赤城神社が勧請され、出城として城北の守りについていたと言ふことができる。大温寺は赤城神社(近戸神社)の別当寺として設けられた寺であった。

室町時代以前の大胡氏の館は養林寺のある所であらう。

#### ◎養林寺館址

北城の真西に牧野氏の菩提寺であり、墓所を擁する養林寺がある。北城と相距ること一五〇m、その間の低所には武家屋敷の構え土居の遺残らしいものも見うけられる。

養林寺は、大胡城の占地する丘の西に並んで北からのびてきた舌状の丘の背部にある。この丘は上面の幅が三百mあって、中程度の豪族の築城には広すぎ、東西両側の自然阻障も充分でなく、城址には適していないが、堀越の集落がその上につていることから考えられるように、日常の生活面としては大胡城址のある丘より条件がよい。

中世豪族の居館は、平常の住居を囲濠、土居で囲んだものであるから堀越台地の方が、大胡城址のある丘より、鎌倉期以来と推定される大胡氏の館の立地には公算が大である。

然して、その跡を堀越台上に求める時、指摘し得るものは養林寺のある所よりほか存在しない。

館址には、堀と高土居の一部がのこり、東西九〇m、南北一三〇m、南半は前庭状の別郭となり、北半に二重堀構造が認められる。

# 大胡城



とから、内郭部はここに養林寺を建立した際、新たに設けたのであろうと推定する。形が正方形でないのは、当時の土木工事の経始法が稚拙であるか無頓着だったのであって、地形の制約からではなく、栃木県の足利館址（饗阿寺）でさえそうなのであるから、ここでもやむを得まい。

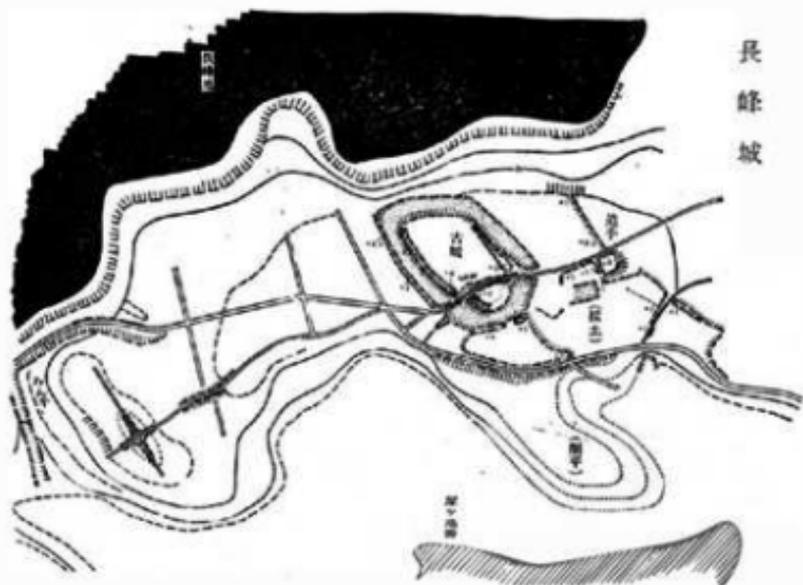
この館のように内郭の前面（南か東）に別郭を添えた城館址は、上泉城、兎替戸館（前橋）、関根の寄居（同）、三原

しかし、二重堀は北面と西面とに見られるのみで、東は一重である。北面の内外堀の間隔は土居幅だけとなっているのに、西面では二五mあり、そこに牧野氏の墓所がのこっている。

内郭は方六〇m、壕も深く、土居も高い。

牧野氏墓地のある部分が、通常の二重堀構えとは異って一郭をなし、内郭を東に片寄せてあるこ

## 長峯城



田城等、赤城根に多く見られるが、殊に上泉では、上泉氏が大胡の一族であるので、養林寺が大胡氏の館址であろうとする一つの傍証になる。只、上泉の場合は南正面のほか、東側にも虎口があること、壕の規模が大きいことなど、養林寺館より後期のものとしての要素が多い。

大胡氏はこのこと、近戸曲輪の要害城を並用していたのではあるまいか。

## ◎附、長峯城

温古の某に、「時に元和二辰年七月、上野国多胡郡大胡の城主牧野右馬允忠成此処に城地を賜り更に平地に城郭を新築す。未だ竣工せざる内、同四年四月、古志郡長岡の城へ移封を命ぜられ廃城となる」と記されているように、牧野忠成は大胡から長峯に移封され、そこに新城を築いた。

長峯城は、新潟県中頸城郡古川町長峯にある小字を古城という。

日本海岸に発達する砂丘は、直江津東方では内側に多くの潟を作る。砂丘の線は幾筋か重なりやゝ複雑に潟が配置されている。それらの中の長峯池と岸ヶ池との間になっている東西約

一、〇〇〇m、幅二八〇m、高さ二五m内外の砂丘の中央最高所に、この城の本丸の遺構が認められる。

本丸は、西北—東南の長径一四〇m、幅七五m北面の長峯池にのぞむ一側をのぞき三方に高さ三—四mの高土居をめぐらし、追手筋虎口は東南に、搦手筋虎口は西南に、いずれも南に偏して開く。両虎口共喰違ひ構造で、土橋を備え、追手筋虎口は南側に櫓台があつて有効に前面に矢払いを備えている。

本丸西北角外側に長さ一五m、高さ三m程の土壇があるが、これは恐らく土居の残片で、これのあることにより、西側に第二郭（二の丸であろう）の築城を開始されていたことが考えられる。二の丸は西から南—東と本丸の三方を囲み、北の一方は帯曲輪になるよう計画されていたであろう。土居残片の位置からそのことも推定される。

二の丸東部、本丸虎口から一〇〇m程の所にある方一五m程の土壇は追手虎口南側の櫓台址と考えられ、そこから北に向つて長さ七〇m、高さ一、五mの段のあるのは、外堀内縁であろう。外堀はこのように発始され工事着手後中止されたのであろうか。築城の手順は先づ本丸を完成し、逐次外側に及ぼして行くのである。

追手櫓台南側に一つの壕址が認められるが、そこから南の一带は近ごろ土を取られて著しく変り、原形を推定することができない。

この城の本丸堀は幅一五乃至二〇mで、確かに近世的であるが、本丸の発始は不定形であつて、逆に稚拙を思わせる。この土質は砂丘であるから発始も工事も思うままであつて、「方円の繩……方は地の形にして陰なり、円は天の形にして陽なり、陰陽二つは本なり、形にていう時は方円なり、方とは前後左右と四方になるように取るをいう、円は隅々まで矢がかりよく取るをいう。」と武教全書にあるように理想的に繩張り出来た筈である。

長峯には、牧野氏着封以前に那須氏が居城していたらしく、その遺構が既に存在し、牧野氏の築城計画に制約を及ぼしたのではあるまいか。砂丘の土質は既存の遺構を抹消して新たに普請を行なうことは困難である。ここでは石材

の入手が不可能であつたらしく、一つの野づら石も見当たらないことから、このことが強調できよう。

西方五〇〇mにある長さ二〇〇mに及ぶ堀切りは、この城の西の遠構えであつたらしく、長峯池と庫ヶ池を結び、搦手（ろんで）と呼ぶそうである。（室岡博氏より）。

長峯池の構造から、大胡城における牧野氏改修の部分を比較抽出しようとする試みは、今のところ可能性がない。

（山崎 一）

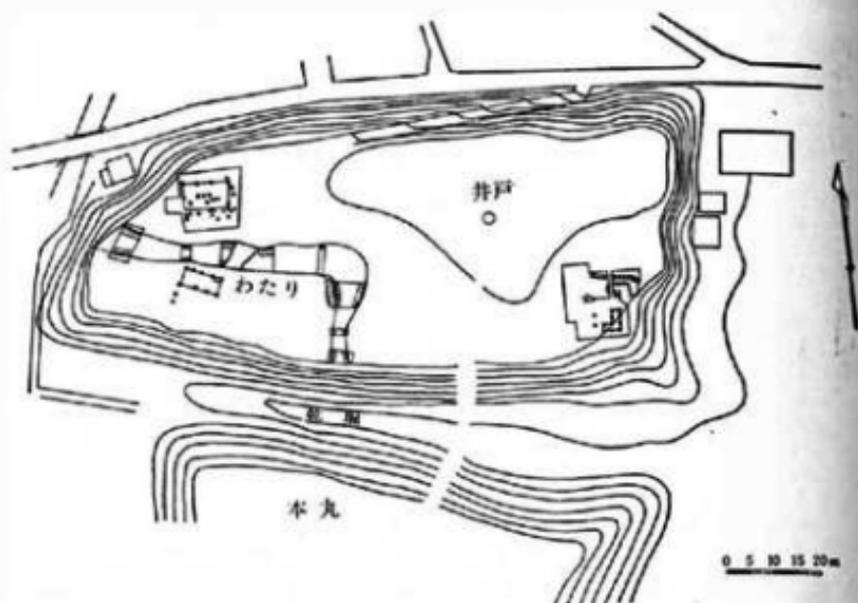
### 第七節 大胡城越中屋敷跡発掘調査

大胡城本丸と空堀をへだてた北に通称越中屋敷跡といわれる一曲輪がある。昭和四十八年五月ここに町立幼稚園を建てるため、土地造成が始まった段階で調査が実施された。

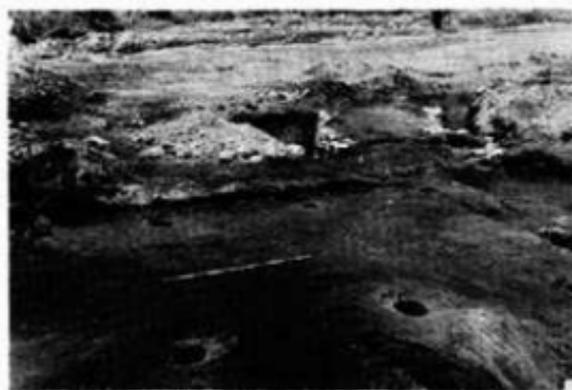
ここは土地造成以前は東が高く西が低い地形を示していたが、これを平にするためブルドーザーで上面を削平、多い所で一、五〇m以上削られたところもあり、その段階での調査であるため削り取られた遺構も多いと思われる。

(一) 中央から西に走る堀

次の図に見るように、曲輪のやや西寄りにかぎの手にまわる大きな堀の遺構が出ている。この堀の南端及び西端は曲輪の端にまで廻り曲輪の端を突き抜いている。堀の規模は、曲輪南端からおよそ十九メートルいったところで西にまわり、そこから五十メートルいったところで曲輪西端に至る。幅は南の端で上幅が四・四メートル、下幅一・六メートルであり、この幅は南から北に向って次第にひろがり、曲がり角の所で最大となつて上幅がおよそ七、五メートルとなる。これから西に向つては幅はまた次第に狭くなり、西端で上幅六メートルである。溝の深さは上が削平されているため正確にはわからないが一・五メートル以上はあつたようであり、幅や深さからいってこれを横断するのは容



越中屋敷跡実測図



柱穴とわたり (南から)

易ではない規模のものである。しかし、東西に走る部分のほぼ中央に、両側を石垣でかためた上幅三、五メートル、下幅四メートルの「わたり」がかかっている。

堀の埋め土を見ると、多くの層に分けることができるが、いずれの層にもロームのかたまりやロームの粒子が入り込んでおり、中に水がたまっていたり自然に埋まっていた様子は見えない。堀は空堀として利用し、

ある時期に一気に埋めてしまったようである。

この埋め土の中からは、石臼のかけらや「かわらけ」と称する土器(灯明皿)やふいこの口等



内耳のある土鍋



灯明皿

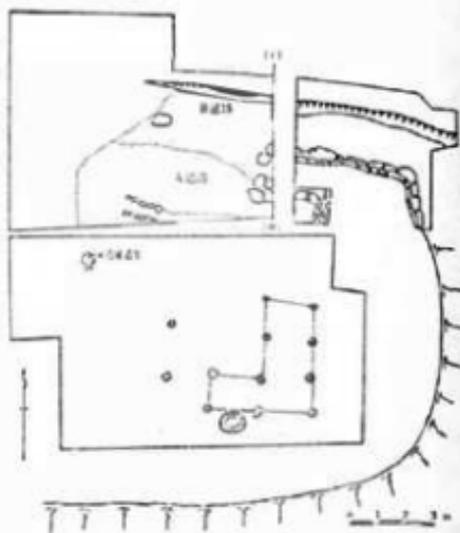
が出土しているが、埋める際使い古したものを一箇に投げこんだもののようにである。

#### (二) 曲輪への通路

前頁図の曲輪東南端地区の調査で、南の空堀から曲輪へ登る通路の遺構が出ている。この通路は表面がこちこちに固まった非常に硬いもので相当長期間使用した様子がうかがえるが、ここでも新旧二つの通路が確認できる。すなわち、次頁図のAの部分とBの部分である。

Aの通路は、およそ四度の傾斜をもって曲輪の東南角に向かって下っている。その幅は広い所で九メートル、狭い所で五メートルである。この通路の南端には排水用と思われる石で両側をおさえた幅一四センチほどの細い溝がある。現在残るのは一メートル四十ほどの長さである。通路A・Bの間にはやや大きめの川原石をきれいに積み上げた石垣があるが、Aの通路はこの石垣の裏手をまわり、石垣の後詰め石と推定される石の下を通っている。

これに対し通路Bは、Aに比較してややゆるやかな傾斜で石垣に沿ってほぼ真東に直行し、さらに南にはほぼ直角に曲がって南の空堀に下りている。



石垣



通路 A 通路(右) B 通路(左)

また、A・B両通路上の埋め土を見ると、積み上げた石垣の裏側のA通路上の埋め土は中央にあった掘の埋め土同様ロームのかたまりが上から下までの各層に入り込んでおり、池から掘り上げてきた土で一気に埋めた様子が観察できるのに対し、石垣前面のB通路上の埋め土は自然に堆積していった層序を形成している。このことから、二つの通路のうちAが最初につくられたもので、ある時期にこれを埋め、さらに石垣を積み上げて整備されたBの通路をつくったものと考えられるのであり、A通路の埋め立ては、中央部の掘の

埋め立てと同じ時と考えられる。

(二) 建築遺構

曲輪の大半はすでにブルドーザーで上面を削平されていたため、曲輪内に何棟の建物がどのように配置されていたかは明らかでないが、削平の浅い西の部分及び南東隅において、三棟の遺構が確認された。いずれも掘立柱の遺構であり、礎石は今回の調査では認められなかった。

その一つは、前述の中央空堀を横断するわたりの南に位置し、北辺は、東端の柱穴が堀の上端から二メートル、西端の柱穴は一メートル離れた所であり、空堀に近接している。規模は東西三・二五メートル南北一・七〇メートルと小じんまりした建物であり、東西三間・南北一間に仕切られている。柱と柱の間は、柱穴の中心から中心まで、東から一〇〇センチ、九五センチ、一三〇センチである。最も広い幅をもつ西側においては、そのほぼ中間（西端の柱穴から六〇センチのところ）にもう一つ柱穴があり、ここだけ一本余分に柱が立ったようである。これは北辺にのみ認められるもので、南辺にはない。ここに入り口でも設けられたものであろうか。柱穴の大きさは直径が小さいもので一〇センチ、大きいもので二〇センチである。深さは三五センチ〜六〇センチといろいろである。また、建物の南側西寄りの所で、柱穴から三〇センチ南へ離れた所に四三センチ（東西）×三五センチ、深さ三八センチの土坑状のものが確認された。掘り込みの地層、埋め土等は柱穴と同じであり、建物と時期的には同じと思われるが、これが建物とどういふかかわりをもつかは明らかでない。

この南の建物と空堀をはさんで対称的な位置、すなわち堀の北側にも掘立柱の跡が出ている。ここでは三六個の柱穴が確認されたが、その出方が雑然としている。特に南側において乱れが多い。何回かの建て直しが考えられること、及び空堀の配置からして、その北及び東の地区に建物が多く配置されていたことが予想されるが、ここは最も削

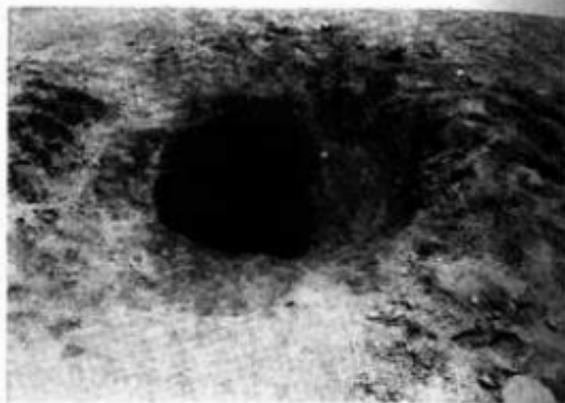
平の大きいところであり、柱穴群の東の調査ができなかったこともあり、調査時において出た柱穴群の東への延びの様子が明らかでないことなどから、ここに出た柱穴群を明確な建物に分けることが少々困難である。しかし、北側においてはかなりすっきりした形で出ており、そこに一棟の建物を推測することができる。すなわち、北辺に東西にならぶ四本の柱穴があり、その間隔は中心から中心まで、東から順次三・四〇メートル、二・九〇メートル、三・二五メートルであり総長は九・五五メートルとなる。また、西辺には、ほぼ一直線上にくる柱穴が三本認められる。その間隔は、北から二・八〇メートル、二・五〇メートルで、総長五・三〇メートルである。これに対し、南辺及び東辺においては、北・西辺ほどはっきり直線上に出て来ないが、南辺では、その東端にあたる位置（北辺から五・三五メートル、西辺から九・三五メートル）に一つ、北辺の西から二つめに対応する位置（西辺南端の柱穴から三・四五メートル）に一つある。これらの数値は、三〇センチの倍数あるいはそれに近い数値をとっている。しかし、柱の間隔がそれぞれ異なること、南及び東辺の柱穴がまばらで、北・西辺の総長と差のある数値をとることもあり疑念もあるが、北及び西辺において、それぞれ柱穴が並び、それが直角に交わっていることからして、ここに東西三間（九・五五m<sup>2</sup>）（三三二尺）、南北二間（五・三〇m<sup>2</sup>）（一四尺）のかなり大きな建物があったことが推測される。柱穴の大きさは、直径二〇〜三〇センチ、深さは現状で三〇〜五〇センチである。削平されていることから考えると深さはもっとあったものと考えられる。また掘り方は、上端からほとんど直に落ちている。

また、通路の南、曲輪の南東隅、崖に接した所にも一棟の遺構が認められた（前々頁図参照）。これは、一間幅をもつて一状に曲がる曲がり屋のような形態を示している。（同図参照）すなわち、北辺は一間、東辺は三間であるが、北から二間来たところで西へさらに一間張り出し、南辺は二間、西辺は一間となる。柱の間隔は、北辺が一・八三メートル、東辺は北から順次一・三〇メートル、一・三五メートル、一・三五メートルである。西辺は北から一・三〇



柱穴（南東隅のもの）

メートル、一・五七メートルであり、ここで西へ一間張り出す。その間は一・八〇メートルで、さらに南へ一間下って西辺をなし、これ一・三〇メートルである。南辺は二間でも一・八〇メートルである。この数値をみると、東西は一間が一・八〇メートル（六尺）、南北は一間が一・三〇メートル（四尺か）が意図されているようである。柱穴の大きさは、直径が十三センチと二十五センチ、深さは三十五／五十センチである。東西が南辺の長いところで三・六メートル、南北が東辺で四・〇メートルという小じんまりした建物である。また、これらの柱穴は現在確認できる範囲では、大部分ローム層上面から掘り込んでいるが、南東隅の四つの穴はいずれも黒色土から掘り込んでいる。この部分はすぐ北に出ているローム層がなく、まっ黒な黒色土が、ローム層上面と同じ高さで出てくる。このことから、この辺は本来一段低いところであり、そこに北の高い所と同一面になるまで黒色土を盛り、平にしたものと思われる。ここに建物を建てたものであるが、これは、すぐ北に確認された通路に近接したところにあるところからすると、番小屋のような施設であったのであろうか。これら掘立柱遺構の時期はいつ頃であろうか。西側で確認できる二つの建て物は、曲輪中央の空堀の「わたり」をはさんで相対しているが、その位置は空堀に近接している。特に南側のものは、北辺西の入口があったと思われる所が空堀上端に最も近接しており（一メートル弱）入口という機能から考えてやや不自然である。一方、曲輪南東部の柱穴の一部は、前述のように盛土して平にした上に建てられている。これらのことから考えると、現在出ている建築遺構は、中



井戸跡

中央の空堀及びA通路を埋めたて、石垣やB通路を整備し、曲輪の改修をや  
つて、現在の形が出来た後に建てられたものと考えられる。

大胡城に関する記録は残っていない。そのため、この埋めたてがいつの  
ことであるかはっきりしないが、堀の埋め土からは中世の灯明皿や石臼が  
出ている。また、A通路を登り切った硬い通路上からは、この面に接して  
石の下になった永業通宝と刀子の金具一組が出土している。永業通宝は明  
銭で一五世紀中頃以降、戦国時代を通じて多く流通した貨幣である。これ  
らのことから、空堀やA通路は戦国時代、すなわち、大胡氏の時期に使用  
されていたものであろう。その後、牧野氏の時に至って、これらのものを  
埋めたて曲輪の整備をはかったものと考えられる。

なお、以上の遺構の他に、曲輪北辺から一二メートル、東辺から三三メ  
ートルの位置に直径約二メートルの井戸跡が確認された。この周辺は削平  
の最も深い所で、建築遺構等については確認することができなかった。

## 第八節 牛込の赤城神社と宗参寺

東京都の赤城神社は新宿区(旧牛込区)赤城元町に鎮座している。由緒としては神社本庁発行の『神社名鑑』に次  
の如く書かれている。

「正安二年上野国赤城神社より牛込早稲田村田島(今の鶴巻町)に勧請したに創まる。寛正元年太田道灌牛込台に



牛込赤城神社

奉遷し、弘治元年大胡宮内少輔重行崇敬し現社地に遷した。牛込総鎮守にして幕府は江戸大社の列に加う。もと別当寺等覚寺があった。明治六年郷社に列す。」

この正安二年（一三〇〇）を神社草創の年代にするのは間違いである。神社で大切に保存してきたものに一枚の板碑があった。昭和二十年に戦災で失ったが、神社誌に写真が載っており、その説明に高さ四尺、巾一尺余で、阿弥陀如来三尊の種子がそれぞれ蓮台上にあり、銘文は

池中蓮華 大如車輪

正安三年辛丑五月二十五日

青色青光 黄色黄光

とあったという。出土地は早稲田鶴巻町一八五番地にあった田島の森という赤城神社の旧地で別当寺等覚寺所蔵のものであった。正安三年は板碑として写真をみた限りではよいようだが、神社との関係はわからないし、むしろ偶然日なので、この日を創建の月日において、板碑の年月日が正安三年五月二十五日だから神社草創はそれ以前の九月十九日、即ち正安二年九月十九日としたのであろう。

さて、牛込赤城神社は祭神饒筒男命、合殿赤城姫命であり、赤城姫命は一説に大胡氏の息女と伝えている。大胡重行が上野国大胡城から牛込に移り住み、子の勝行が姓も牛込と改め、赤城神社を祭ってきたという。

社伝にみえる太田道灌は江戸の発展に貢献するところが大きく、多くの社寺が草創の伝えに引合いに出す人物であるが、大胡氏は文明元年（一四六九）春に道灌の父太田資清入道道真が主催した河越千句に参加しており、関係深いものがあつた。この年の道灌は数え年三十八であつた。大胡氏は修茂の名がでてゐるが系譜についてはわからない。大胡氏と太田氏の関係はこの学問上ばかりでなく社会的関係も緊密であつたろう。寛正元年あるいは二年（一四六一）に太田道灌が赤城神社を牛込に移したと伝えるのはこのような両氏の関係から生れた伝えである。

永禄二年（一五五九）の「小田原衆所領役帳」には大胡民部の所領として

六四貫四三〇文 江戸 牛込

六七、七八〇 江戸 比々谷本郷

四五、〇〇〇 葛西 堀切

があげられている。小田原衆所領役帳に永禄二年二月十二日付で北条氏康の奉行太田豊後守、関兵部丞、杉田筑前守の三名が氏康の命令で、北条氏の旗本、諸侍などの諸役の負担の基準を調査したものである。大胡氏の一族が永禄年間江戸に居住していたことを知る貴重な資料であり、居住地としては赤城神社と次に記す宗参寺のある牛込（特に牛込城と記すものもある）であろう。

別の写真は神社近くの旧牛込区であつた弁天町の曹洞宗宗参寺の牛込氏墓地の中心になる墓碑である。墓石の正面に

皆天正十五丁亥天七月二十七日

卍 参秀院殿牛込太守従五位下外心清雲庵主

雲居院殿前大胡（太守実朝）宗参大庵主



宗参寺の大胡氏先祖墓碑

岩天文（十二癸卯年九月十七日）  
この墓石は火災をうけ落到し、更に三つに割れたのをコンクリートでつないだものである。左側はそのため読めるところが少ない。

大胡宮内少輔藤原朝臣（重行上州大胡城）

従四位上武藏守鎮守（鎌守府将軍秀郷）朝臣俊胤

従大胡重俊十代之裔（嫡孫也後）移武州牛込

之城子……………（七十八歳卒）

右側は

従五位下宮内少輔藤原朝臣勝行者重行之嫡男也

武州住牛込之城天文十三甲辰年建雲居山宗参寺寄口田十斛之所

天文十四乙卯年十月六日任従五位下時改本名大胡氏号牛込矣八十五歳卒

裏に

皆寛文四甲辰年宗参六世州駒本易代改建之

勝本

勝悦

宗参寺は大胡氏により天文十三年（一五四四）に創建された。時の大胡氏は重行の子勝行で、この代に牛込氏に改めたとしたのである。系譜は勝行―勝重―俊重―勝正（建立者）となる。勝悦（かつとき）は勝正の弟である。

大胡氏の一族が江戸へ出た年は永禄二年（一五五九）以前で、当時は後北条氏に従っていたことは間違いない。ま

た、墓碑にあるように牛込に移住した重行が天文十二年（一五四三）に七十八才で死去しているとすれば、更に十数年さかのぼって考えなければならぬ。

## 第九節 大胡城に居城した益田氏

太田金山の城主由良国繁の攻撃により、その揮下に入った大胡城は益田氏が居城したと伝える。数年を経て益田氏の落城により兵火にかかり、西長岡（現太田市）へ引移った後に大胡城内の九にあった大胡寺を西長岡に移し地名により長岡寺としたという。長岡寺（ちようこうじ）の所蔵する「寺創造朱印縁起之由来」（住職酒井氏）から見る。

### 寺創造朱印縁起由来

大藏冠鎌足公八代之孫從四位下武藏守秀郷十五代之孫益田四郎左衛門尉行綱、上野国勢多郡大胡村ニ始而城を築居住し、二之丸ニ一寺建立して大胡寺と称、享徳以来益田新兵衛尉茂政大胡之城自號而新田ニ引取、文明十三年丑年横領信濃守国繁より新田郡西長岡村益田一族之居所ニ充行ル、依之西長岡村ニ小城を構、旧領之大胡寺も西長岡村江引移し、再建而、

また、金井光太郎家（太田市西長岡八四〇）の資料に左記のものがある。

藤原姓益田氏系圖略記

幕 白地紋向鶴并丸内酢醬餅但替紋巴

旗 紺地四半紋向鶴古來長岡寺ニ納之

甲 前立物金ノ向鶴但代々家藏

天王山長岡寺と寺号改メ、武藏国人見村昌福寺七世、勅特賜円明正統神師を再興之開祖と而西長岡村之内一拾三石五斗余、仏供料ニ寄進ス、其後慶長年中徳川家康公より伊勢守寺附之田畑先規之通無相違之趣被御置候慶安二年八月二四日長岡寺四世義丹和尚時一拾三石五斗余之勉大猷院殿より朱印頭數諸役免除ニ而、夫より代々朱印九通所持仕居候

本國上州居城益田并大胡 但常州之内亦領之

益田左衛門尉政義 初諱政茂 大藏冠

鎌足公八代之孫從四位下武藏守秀郷

自秀郷九代之裔曾而益田氏祖也

行綱 益田四郎左衛門尉政義六代之孫也 始築城於大胡於城中二丸創造一仏刹稱大胡寺

行茂 与三又新左衛門尉俗稱大胡殿法号宗得嘉吉元年助守結城之城戰死

修茂 与四郎又新左衛門尉法名宗榮新撰免久波集作者

享徳年中既鶴城主長尾御正那波波城主那波羽部兩軍ヲ以テ大胡城へ取詰ル時其子茂政ヲ人質ニ遺シ新田金山城主横瀬信濃守國繁殿へ後詰ヲ頼ミ一戰ニ悉勝利ヲ得自是シテ新左衛門尉親國ヲ引率シ信濃守殿旗下トナル一門ニハ益田大胡丸橋家風ニハ田嶋須藤幸嶋金井阿久津荏原石原端岸等也

茂政 新兵衛尉法名宗閔長岡寺ニ葬ル石塔有焉

享徳以來長尾那波波信濃シ含ミ合戦ヤム時ナク大胡城ヲ自燒ニメ新田へ引取文明十三年丑年大胡ノ旧領へ守堵ノウチトテ信濃守ヨリ勢田郡入長岡西ノ林菅塩村等ヲ益田一族ノ居所ニ充行ル依之下長岡ニ小城ヲ構ヘ桐生ヲ押ヘ家風田嶋主本金井番刀阿久津等ヲ指置入長岡ニハ須藤内膳菅塩村ニハ石原内院ヲ入置テ旧領大胡城中聖天山大胡寺モ此時新田莊下長岡へ引移ス新田領ノ寺院ハ悉ク大田山金龍寺ノ末寺タリト云トモ此寺ハカリハ益田菩提寺タルニヨリ旧領ノ如ニ本寺武州人見村昌福寺以藏伊天和尚ヲ攝持シ再興ノ開祖トシテ山号ハ故ノコトク寺号ヲ長岡寺ト改メ此村ノ内ニ十三石五斗余仏供料ニ寄附ス

女子 名御入岩松高徳室

繁俊 母横瀬左衛門尉景繁女 寡名与四郎 与三左衛門尉後

任伊勢守法名玉翁宗林弘治二年正月九日戰死

天文二十辛亥年伊勢崎ノ一戰ニライテ旧領數代ノ大敵那波刑部少輔ヲ擊取此時大胡モ暫領内トナル

僧義哲 新田世良田長業寺住持

繁政 母横瀬掃部助女 法名花林清春 寡名与四郎 与三左衛門尉後任伊勢守 法名泰屋宗康常州牛久金龍寺ニ葬ル

天正九辛巳年由良國繁公ヨリ京都信長公へ使者トシテ欠場能登守藤生紀伊守上洛ス伊勢守モ同道ニテ上洛直ニ紀州熊野へ參詣備路ニ三河浜松ニライテ

東照神君へ拜謁仕暫滯留アリ

天正十八庚寅年大岡秀吉小田原攻ノ時由良熊千代 後名貞

繁 一族并益田伊勢守信州笛吹ノ先手ニ加ル小田原落城ノ後國繁公小田原電城イタス殿不屈トテ新田ヲ浪人ナサル、ナリ老母得月院ハ孫熊千代ヲ取立小田原へ不隨シテ金山ニ四年籠城仕又笛吹ノ御引導仕段神妙ナリトテ常陸國牛久領ヲ熊千代ニ給ル依之益田伊勢守モ常州牛久ニ移ルナリ家族ノ内新田ニ残ル者モ多クコレアリ

東照神君関東御入國ノ時大胡ハ牧野右馬亮揮領無間又種垣平

右衛門押領金山ハ神原式部少輔領知トナル此時聖天山長岡

寺ハ益田伊勢守菩提所トシテ寄附ノ田畑先規ノ通無相違寺

附ニ被仰出ナリ此ハ伊勢守妾

東照神君へ内々親切ノ志ヲ被 恩召故也

慶安二年八月廿四日長岡寺第四世義丹和尚ノ時

大猷院様へ願ヒ奉リ境内ノ外二十三石五斗余ノ所

御朱印頂載仕ル同所愛宕山善泉寺真言宗本寺ハ高野大乘院是

寺モ益田氏祈願所トシテ同年八月廿四日ニ拾九石五斗ノ

御朱印頂載仕ル也

兄 益田与三左衛門

益田 新 助

益田 新 助 修由

若名 善右エ門

益田 曾吉郎 修正

益田与右衛門 修悅

貴寺由縁之事於家譜之中如右相考候當時家勢致衰微於人前雖不遵披露候先祖尖業之菩提所且又御所望雖然止碑及略記候不備 頓首

益田新助 修光(花押)

享保四年十月廿九日

聖天山長岡寺長老

### 第十節 大胡城の支城

#### ○上泉城

上泉は現前橋市上泉町であるが、ここに大胡氏の一族が居城した。大胡領内で大胡氏であるが、上泉城に出たので上泉氏を称した。ここに上泉伊勢守秀綱という創業者が生れた。剣の道はこの伊勢守によって生れたといつてもよいほどの剣聖であるが、意外と正確なことはわからない。根本史料も少なく、『言継卿記』に出てくるのがすぐれた資料である。本書は惟大納言山科言繼(やましなときつぐ)卿の日記である。皇室経済の維持に尽し、装束などの有職故実に通じていた公卿であった。日記は大永七年から天正四(一五七六)年の間に及ぶ戦国時代の貴重な史料になっている。この中から上泉伊勢守の記事を抜書する。

本録十二年

一月十五日 者榮宮内大輔来、平野社預長松丸中状持来、

同大胡武藏守准状有之……云々。

一月十六日 次大典侍殿御局へ参、平野社務之事申状、大

胡武藏守状等御披露之事頼入之由申了。

二月 二日 平野預子長松丸者榮宮内大輔大胡等令同道東

山吉田龍向、同踐遣之云々一葉有之、長松丸

身上吉田を頼入之由子口入、一家頭之儀候間

聊以不可有破意之由誓願返答、次各帰了。

四月二十八日 者榮宮内大輔来、大胡武藏守吉田へ可同道之

由内々申之、大胡武藏守来、令同道吉田へ罷

向之処、留守之由有之間自河原罷帰了。

四月二十九日 大胡武藏守来、令同道吉田へ罷向紫蘇独活系

活等十兩宛遣之、但他行云々大隅其九郎に申

置罷帰了。

五月 七日 大胡武藏守来、令同道吉田へ罷向之処、自一

昨日深草に逗留云々次栗田口上乘院へ罷向庭

見物、酒音曲等有之、次知恩院へ罷向、長老

以下暫雜談大胡寛藏等同道同前、非時有之、

次帰宅了。

五月十一日 大胡武藏守来、暫雜談了。

五月十五日 大胡武藏守来談。

永禄十三年 (四月元龜と改元)

正月 五日 今日礼者——上泉武藏守(一線は人名略)

五月二十三日 (庚寅雨降未到夕立市鳴)

上泉武藏守信綱来、軍配取向総持等令相伝之

勅一葉、中御門雲松軒等相伝了、一葉等之、

又調子占之一卷等之、各将基變六等有之。

五月二十六日 上泉武藏守来、子首部等取向以下之相伝了。

六月二十六日 大胡武藏守来談了。

六月二十八日 上泉武藏守暫来談四品勅許忝之由申之。

七月 七日 ——大胡武藏守一等来談。

七月 九日 ——大胡武藏守一等来談。

七月十五日 ——大胡武藏守一等来談了。

七月十七日 ——大胡武藏守来談了。

七月十九日 ——大胡武藏守等来談兩人武州に調子之占被

濟之。

八月 十日 梨門へ御暇迄に参、御衣被下之御約束之小錦

杖被下之、次千秋刑部少輔大胡武藏守参へい

はう被御覽了。

八月十八日 於真珠院斎有之次——千秋刑部少輔大胡武藏

守鈴木等来、令同道栗室へ罷向。

八月十九日 於路次太奏真珠院へ立寄酒有之千秋大胡鈴木

等兵法有之、各見物了。

八月二十日 ——大胡武藏守等栗室へ同道祝着之由礼に

来。

八月二十一日 大胡武藏守一等来談。

十月十七日 大胡武藏守等来談勸一遷了。

十月二十二日 大胡武藏守来談、奉公衆先日宇治逃出陣昨日

帰陣云々敵三教之城取之云々今朝又奉公衆尾

張衆木下藤吉郎山城へ出陣云々。

十一月三日 次大胡武藏守近所へ宿替之由申来。

十一月二十四日 次大胡武藏守来談了。

元龜二年

正月二日 今日礼者大胡武藏守——

三月三日 大胡武藏守礼に未対面了、番番一包遣之、

近日在国云々。

三月九日 大胡武藏守来、愛州案方去年遣之火事焼之間

大胡武藏守も上泉武藏守も同一人である。永禄十二年（一五六九）は上泉伊勢守が上洛して間もない頃であるう

か。以来三十二回の記事がある。上泉伊勢守はこの後、下野国結城へ行くと出たまま、その終りは不明であり、はっ

きりしているのは本書の記事の時のみである。諸国を遍歴したと伝えるがわからない。江戸時代のものであるが、柳

生兵庫殿延の『兵法由来覚』における上泉伊勢守関係は次の通りである。

一、当流兵法新陰流の起は、上野国の住人長野信濃守家中伊

と相改申候。

勢守藤原秀綱、幼少より文武の芸を習練更諸流兵法の奥儀

を相極め、別して陰の流の奥儀を相極め申し様々心持御座

候て、同国鶴戸大権現に三七日こもり工夫たん練位り候。

其内一七日は断食仕り候由に御座候。陰之流を根元に仕

り、諸流の奥儀の位心持を其身の工夫を以て加へ、新陰流

又所望之由申之間書遣之同案一包遣之。

七月三日 大胡武藏守從和州昨日上洛云々国之儀来談

了。

七月二十一日 大胡武藏守本國へ下向云々。

暇迄に來、親王御方御筆御短冊二枚遣之、又下野国結城方へ

書状所望之間調遣之如此。

雖未申通候幸便之間令啓候、仍上泉武藏守被上洛公方以下

悉兵法軍配被相伝無比數免名之事候、又貴殿拙者同流一家

之儀候間無御等閑候者可満足候、尚委曲武州可有演説候也

恐々謹言

七月二十二日

結城殿

言難異判

一、語流の内にて無數太刀共取分新当流の内にて無數太刀

共、大形打太刀に致し候。

一、武田信玄上野國へ発向の時分に、子細御座候而信玄へ願

暇をもらひ奉公を相止め、兵法修業の身に成申し候。

一、弟の正田文五郎並弟子喜伯と申候者、鈴木と申候者、下

一人、上下五六人にて本園を出、伊勢國司へ参り、此辺に然るべき兵法の達人も御座候はゞ兵法の試合仕り度由望申候。國司の承るに、此辺に相手に成べき者も無之候。

大和國柳生谷に柳生といふ者在之候。此者神取新十郎が弟子にて新当流の兵法を相極め、五畿内は勿論外の國までも人の存じ候遺手にて候間、是へ人を派へ遣し申すべしとの事にて、國司の使者と連連伊勢守大和の國へ参り候。

一、柳生は草深く御座候間、南部にて出合申すべくとて、奈良にて伊勢守と石舟斎参合仕り候。其時は柳生新左衛門と申候。後に但馬守と申候。法体仕り石舟斎と申し候。

一、直に伊勢守と仕相仕り度と石舟斎申候へば、弟子の意伯と致し、意伯負申し候へば伊勢守出申すとの事にて、意伯と石舟斎三度仕相致し候。三度ながら片手打に石舟斎負申候。余りに不審を立、両方の品柄をくらべ見申し候へば、詰て石舟斎が品柄二寸の余も長く御座候よし、石舟斎大いに驚き則坊中へ入り身を清め上下を看し、弟子に隠成度と伊勢守前にひれ伏望申候。早速頼相弟子に成申候。それより柳生谷へ同道仕り、上下五六人を數月馳走仕り、兵法習申候。伊勢守は京都へ先登酒國修業に参候。重而参可とて柳生谷を出申候。

一、伊勢守諸國修業仕候内、丹後國切戸文珠にて猿廻之道理を得心仕り、天下の人に負さる事を旨仕候。

一、石舟斎は昼夜無間断兵法稽古仕候。三年目に伊勢守参石

舟斎兵法之上達を祝、數月柳生に留置仕兵法を教申候由に御座候。伊勢守申候は、御自分兵法只今が上手にて候。重而参兵法を相極申可として柳生谷を出立候。

一、翌年の春又伊勢守柳生谷へ参數日留置仕、新陰流不殘伝申候。如斯儀其方一人に限申候由、伊勢守より誓紙にて石舟斎に印可くれ申候。伊勢守申候は、先年不慮に参合それより已米之心入難申候。我等死後には堂塔をも建立可在候得共、左様成事は一向に無用に候。

一、我等長短一味にて、二三度も無刀を取申候。有時尾州明光寺のなかなる庭にて砂に何心なく物を書懸居申候処に、十七八間も後より伊勢守と詞をかけ候者在之、後を極返見れば氣違刀を抜き急に伊勢守に切かけ候間、飛違乱人の切付候刀の棟を左右の手にて引すえ踏伏急難をのがれ候。然しながら我等六十前後にて無刀取取出し弟子に伝候事成不申候。何とぞ無刀を取出し、弟子に伝末代迄名の残り候様願申候。是第一の望に候とて二世の暇乞を致し伊勢守わかれ申候。

一、石舟斎三十四の頃伊勢守に参合仕、右の新当流を相止新陰流を稽古致し、三十七才の頃流儀相濟、無程伊勢守にわかれ申候。それより色々様々工夫鍛錬仕無刀取始申候。

一、伊勢守石舟斎が外に先立而免をくれ申候は、疋田文五郎に御座候。是は遺形心持後大に違申候。

一、伊勢守世傳に大形伝申候。世傳の名承伝不申候。九日藏

關原陸上遺蹟  
天保六年六月廿日  
遺蹟之

大磯冠塚足  
内大臣御影原姓一名藤子天寶天皇八年十月十六日薨五十六歳

(六代略)

秀郎  
從五位下 武藏守兼守府將軍号使藤太卜

(四代略)

兼行  
從五位下 額名ノ大夫足利河實忠位野田田大納位實大是等祖

成行

成綱

重成  
大納太郎 六郎トモ

成家  
大納二郎出テ武家評林、從是到子兼壽傳代未分明

義秀  
大納主水佐從五位下

從大納衣部成家敦世後也、實一色五郎(後左京大夫)義孝ノ男、  
幼号一色五郎秀吉嗣大納家成家、校切竹邊重基ノ校勘重基、千鳥三ツ、且關上野國大納上原山上花輪三侯之内  
ヲ住テ大納城(城郭東西二町計南北四町計寺社民家三百軒計)、當時此神宮御神、猶孔九月廿九日、後移住  
上原城(城郭東西二町半計、南北二町計、寺社民家三百軒計)、氏神七社大磯城、(猶孔七月廿七日)、重義秀生  
一字於ノ野村上原寺、(曹洞宗) 應福宗林神寺末為開基ト實、応仁元年瓦為一色左京大夫義直(義孝ノ父)御  
敵岡五月廿六日細川勝元伐テ義直敗ル之ヲ時義秀從テ勝元助シ勇武盡戦死後名實世正顯神宮内建碑於上原神寺

時秀  
上原主水佐、伊勢守、從五位下

成綱  
上原武藏守 從五位下 延祚出家義直執ヲ是利太郎成綱一字ヲ後昆々亦用ル綱ノ字ヲ子

人香坂要と申者にも免をくれ申候、  
其他にも御座候よし申候。

一、上原孫四郎候、若輩成時分父果申候故、父之名は承不申候。兵法之位心持悉細成相伝は無御座候共、伊勢守孫にて御座候故巽方へ仕相に参候。高田三之丞出合兩度仕相仕候。片手にて三之丞勝申候故、三之丞が弟子に也精古は如巽方にて仕候。此儀を孫四郎至極無念に存、紀州へ参田宮長勝の弟子になり無間茂一流相極申候。殊更古今稀成手柄を仕渡儀の名を上申候故、師匠に断上泉流の居相と名を改申候。其器量祖父伊勢守にも違申間敷と如雲初感仕候。重而御当地江参居相を教申候。其後名も兩度斗も改申候。被沙汰承申候。  
一、兵法相統の系は、上原伊勢守後武藏守と改申候。石舟斎 如雲 連也迄四代にて御座候。(以下略)



横沢城



になつてゐる。或はこの間に堀があつたかも知れない。西側の堀は近年埋められてしまつた。郭内の南半は宅地となつて削り去られ、北半より5m程も低く、南堀跡は水路となつて遣り、西寄りの井上武十氏宅通路が追手口であらう。

この附近に井上氏一族二十余軒があるが、武十氏が本家で西部の中央に構え、西に隣る喜一氏宅は日向屋敷と呼ばれてゐる。豊臣の遺臣井上玄蕃の末業と伝えるが、この城は構造上、天正十八年以前のもので考えられるので、井上氏はその廃跡に定住したものであらうか。

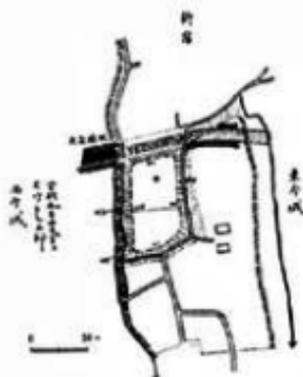
(2) 今城と勝山の遠堀

大正用水は上毛電鉄江木駅の東で鉄道の南側に移る。この用水が江木沼跡を過ぎたあたりを字西今城といい、更に東に一窪地を距て

て東今城の字がある。その高さ三―四mの崖端に西側を托して今城が築かれていた。大正用水は城の北堀辺を過つて東に流れてゐる。本丸が北に偏つた複郭であつたらしいが、今は全く消滅し、安政五年四月、大竹子之五郎と刻まれた石宮が一字遺つてゐるばかりである。

この城は勝山遠堀の後堀をなす堡塁であつたと思ふが、今城の名といい、北に隣接する「新宿」の字名といい、戦国末期の築城であることをうかがわせる。

## 今城



## 勝山遠堀と今城



渋川—大胡道附近から南西に延びる長さ一、五〇〇mの二重堀が勝山遠堀である。両堀の間隔は約三〇m、前橋—大胡道北側で一つに合して西に転じ、上毛電鉄江木駅西北で大きく湾曲して東に向い江木の沼に終る。

大胡城の遠堀であろう。勝山氏の居城勝山城というのもあったといわれる。

## (3) 河原浜の砦

河原浜の砦は大胡町東面の支堡である。字山上道にあって、河原清左衛門等が守ったというが、今は桑畑と化して址をたどることが出来ない。大胡城の支城の多くが揃って消滅したのは、この辺の土質が軟質なのに起因する。

山上道上的の砦



(4) 稲垣屋敷

大胡町樋越の上毛電鉄「ひごし」駅の西百メートルの所に俗称長田山という所がある。長者山の訛りであろう。ここは稲垣平右衛門長茂の屋敷址で、周囲に濠をめぐらしている。東面の濠は幅二〇mにも及び、中央部に土橋がある。東北と南とも木戸があったようである。

北側と西側には高さ一m程の土囲を残しているが、平城の土囲にはあまりに低す

稲垣屋敷東側の濠



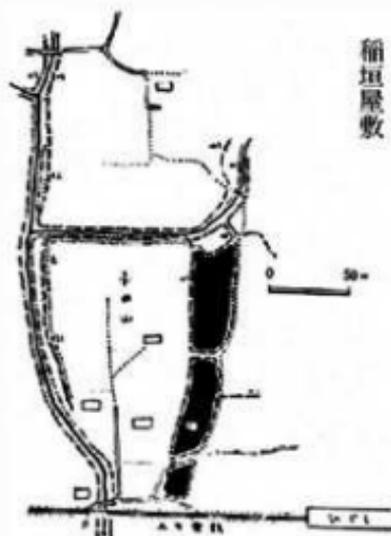
ぎるので、この遺構が長茂以前に大胡城の外堡であったとすれば高土居を崩したものと推定しなければならない。現況から考えれば高土居の存在は疑わしい。西側では土囲の外に腰曲輪様の部分が見られるが、これも旧壕底で腰曲輪ではなかったかと思われる。現在の小流の水面が低下した結果このような状態になったのであろう。

(支城・地図とも 山崎 一)

(3) 養林寺

寺の周囲に壕を二重にめぐらしている。これは中世氏族の居館の遺構と考えられる。即ち大胡氏の居住していたところであろうか。なお、長善寺、長興寺、横沢の満福庵などの寺は大きな壕をめぐらして城構えに近いが、これは寺としての防備のためであろう。しかし永閑寺(堀城の小字)は高い土居をめぐらせており、内で大きな人が背伸びしても外から見えない程であった。付近は俗称をムケンディ(向い白)といったので大胡城の西の前橋道と米野道の台流点ということも考え合せて一つの砦と考えることが適当であろう。

稲垣屋敷



養林寺の西から北にかけての姿

## 第十一節 養林寺山門—その調査の報告



養林寺山門

です。門は平家建てとなっており、二本の本柱、前側と後ろ側に各二本の柱があります。前後の四本の柱は控柱といえます。この門のような形式を四脚門、又は四足門というのです。本柱と台せると六本脚なのにへんですが、そうゆう種類なのです。この門には二枚の扉があったのですが、今は失われてしまいました。門は南向で、東側に小さな通用門が母親についた子供みだりに沿っています。門の前の広場をコの字形に石垣塀が囲んでいます。門の平面の規模は比例尺を沿えておきましたから測って下さい。

第二図は東側から見た門の詳細です。部分の構造や名称を解説しておきました。その大きさも比例尺のとおりです。ただ高さは柱の中ほどから下をとったので図に示しませんでしたが、本柱の上端、大料の料尾の下端から測寸25分で土台石に載ります。

この四脚門のちょっと珍らしいことは、本柱の円柱は型のとおりで、控柱も同じく円柱であることです。角柱のものが普通あり来たり形です。それにこの門は本柱の上の料組に平三料を載せ、実肘木によって、大棟を支え、平三料と大料の間に通肘木桁を架し、そこから鳥の翼をひろげたように椽椽肘木を出しているのが、単調なこの門の構築をちょっと華や

(すざく会誌第8輯 2巻1号) 所載

(昭和三十二年四月三十日発行)

山門は正しくは三門と云うべきでしょうが、形が整わないので俗に言うとおりの山門としておきます。第一図はその平面

かに飾ります。木柱の上端の冠木（頭貫）とこの桁、それに化粧棟によって、門の骨組みがきめられているのです。この本柱を支えるために前後に四本の控室をたて、本柱を控柱に上方では男梁（これは飛貫に当る）で、下方では腰貫が繋ぎます。こうした縦横に組み合せた構造は、前後左右から、すっきり見とおすことができます。

冠木の内側両端に丸い孔を通じた縁形がついています。門の扉を吊す場所で竪座といえます。下の部分は失われまじた。木柱と木柱の間が一間になっているのを一間一戸四脚門と名づけます。

屋根は、大棟から種を控柱上の丸桁（角材でも丸桁といいますが）に下ろし、前方には更に木負を載せ二重に種を出して軒の出を深くしています。このように種を二重に出したのが二軒です。種の間隔は七寸ほども離れているので、礎種です。大棟の上になお棟束を立て、その上に和小屋を組んで種竹で葺の坪地を作り、屋根を切り妻の葺葺にしています。

妻飾にはかぶら懸魚をかけています。それで門の柱の高さに比べて、実際の棟は、ずっと高さを増し、軒の出の深いことよって門が、いかにも荘重なものしさを加えています。

柱は近年一尺ほど腐朽箇所をきりつめたそうですが、切りつめる前は一層みごとな門であつたらうと惜まれます。

柱は上端を細くして椽とし女梁の端を四分一円弧にし、木

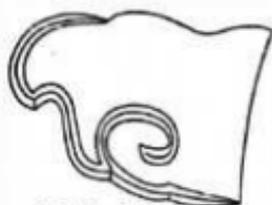
鼻は、ぐりぐりをつくって、この門の細部で意匠をこらした所が、平三料を載せた絵棟肘木（うまくいいいようがないのでかりにこうよびます）木柱の冠木から出た木鼻、控柱の木鼻、実肘木の側面に現われているので、実測図を示します。第三図は絵棟肘木です。下から見上げた感じより、ずうっと丈が高く、なかなかガッチリしています。第四図は控柱から出た木鼻です。第五図、第六図は本柱のもので、第七図は西北の控柱との実肘木で、中央のコ字形は大料です。丸桁を力一ぱい支えています。これら通じて同じ性質の孤線が組みあって、境い目に筋ができています。これを深といいますが位置によって、このような縁形は形が全く異ってきます。木鼻には鳥の喙みたいな尖りがありますが、ここは齧嚙といえます。齧嚙とその下の茨が、この図でみるように桃山時代の格好を残しています。その茨の渦巻が出ています。この渦巻にも桃山から江戸時代初期の名残があります。

天正十八年、小田原と運をともした大胡氏が滅び、その後を受けた牧野氏が元和四年越後長岡に移封された、その間の建造でしょう。

（矢島 胖）



第三圖 本柱上の檢様肘木



第六圖 東本柱の木鼻  
北側面

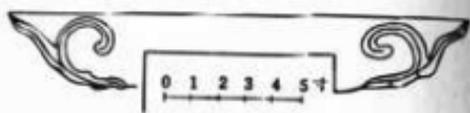
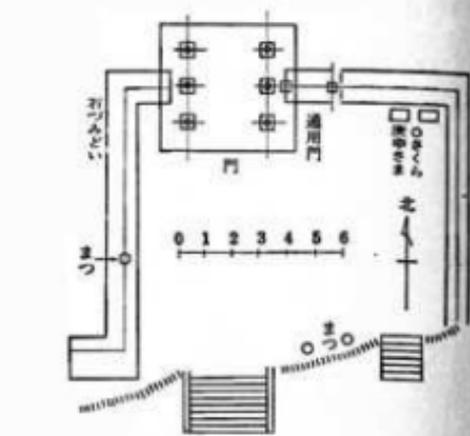


第四圖  
柱上の木鼻



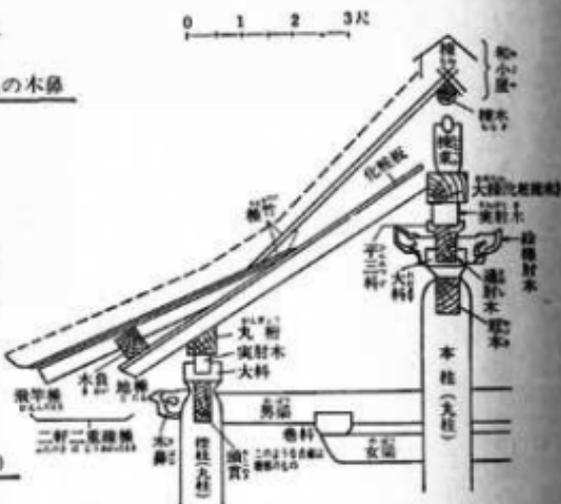
第五圖 西本柱の木鼻(北側面)

第一圖 養林寺門の平面



第七圖 西北控柱上の実肘木

第二圖 養林寺門詳細 昭和31.12.4作成



## 第十二節 茂木古墓

大胡町第五、第六号古墳は舌状台地の末端にあるが、この五号古墳の墳丘の下、南面する台地の裾部に発見されたもので、昭和三十二年四月群馬大学史学研究室によって調査された。

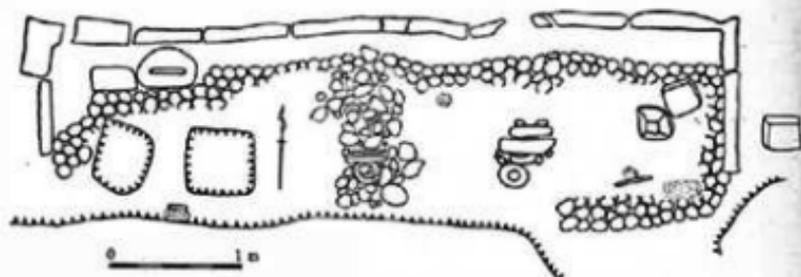
遺構は現水田面から約一・五メートルほどの高さのところにあり、台地の裾をならした幅約四mほどの平坦面につくられている。

図に見るように、この遺構は、幅約十mの切石を一列に並べ、長方形の一区画を構成しているが、現在残るのは、北辺及び東西辺の一部であり、南側は田に直面し急に下っているため荒れており明らかでない。北辺の長さは内約五・一五メートルであり、その東西隅の石はし字形に加工され、東辺及び西辺の一部を構成している。東辺は一メートル、西辺は〇・八五メートルが残っている。この石囲いの内側は、北辺において石列から二〇〜二五センチを帯状に残した他は一面に扁平な川原石を敷きつめている。

板碑は遺構の中にその破片が二〜三認められたがいずれも動いており、原位置を示すものではなかった。しかし、これら板碑は、遺構内に三通りの方法でたてられていたことが確認された。

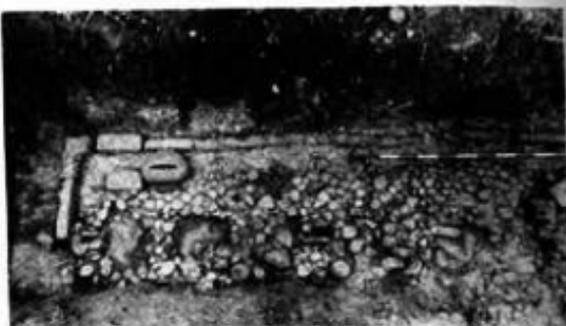
**板碑台石** 北辺の石列に接し、石囲い北西隅から九〇センチのところ、四五センチ×三五センチの大きさの安山岩製の板碑の台石が出土している。この石の中央には、二七センチ×四センチの柄穴があげられており、ここに板碑をさし込んだものである。

**板碑受け遺構** 石囲い東西線のほぼ中央で北辺から九五センチのところと、その点と石囲い東辺までの間の中央やや西寄りのところとの二ヶ所には、板状の自然石の二面ないし三面を打ち込んで、その間に板碑の基部の一部が残



茂木古墓平面実測図  
(群馬大学考古学研究所研究資料)

● 出土品



古墓全景

っている板碑受けの遺構が出ています。

右の二つの他に石囲い南側の東西に一ツずつ板碑の基部残片が特別の施設をもたずに立ったまま発見されており、板碑を直接土中に埋め込んだ様子がうかがえる。

骨壺 骨壺は右の諸遺構のうち、二つの板石利用の板碑受け遺構の南側に、この板石に接して一個ずつ、計二個出土している。中央のものは口を上に向けて埋められていたが、口縁部は傷つけられ、何を使って蓋をしていたか明らかでない。また、東側のものは、扁平な川原石を利用して蓋にし、口を下

にした倒立した姿で埋葬されていた。いずれの壺にも骨片が多くつまっていた。この他四ヶ所に壺に納めない遺骨が砂層にあけられた穴の中から発見されている。このうち二例は、前記の土中に直接たてた板碑の基部に接して発見されている。これらの骨は、骨壺ではなしに、「まげもの」の容器に納められて埋葬されたのではないかとも推察されている。(石川正之助「所謂中世の骨壺について」金沢市善正寺境内からは「まげもの」に入れた火葬骨出土古岡康鴨日本考古学協会第33回総会発表要旨)

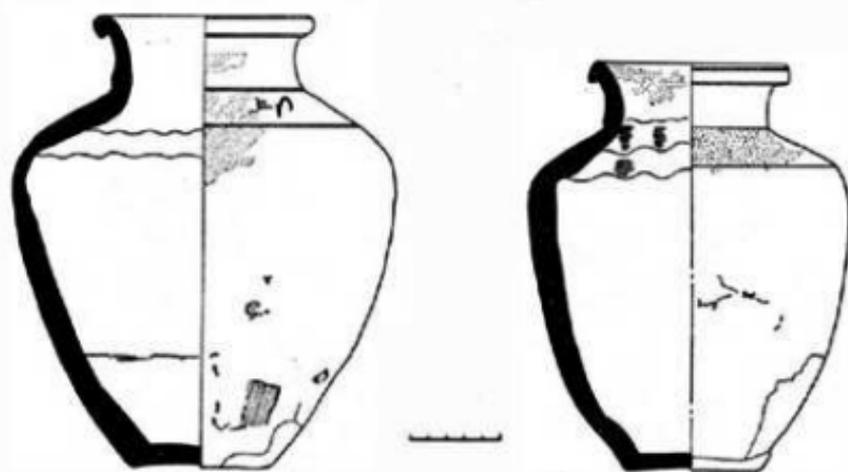


板碑受けと骨壺出土状態(中央のもの)

本遺構調査中において発見された板碑には銘文のあるものはなかったが、本調査のきっかけは、土地所有者が開墾中に二面の板碑を掘り出したことにあり、この掘り出された二面の板碑には、「元亨二二年 月 日」と「嘉暦元年八月 日」という銘文がある。年号は二が左右に並べて刻され、元亨四年のことであり、西暦一三二四年、嘉暦元年は一三二六年であり、鎌倉時代末にあたる。

以上のことから、本遺構は鎌倉時代末期につくられた墓跡であり、この頃の墓地の様子を如実に物語る県内でも数少ない貴重な資料であるといえる。

骨壺 いわゆる「常滑の壺」といいならされている硬質の壺で



骨壺実測図(石川正之助氏実測)

ある。二つの壺の合計測値は次表のとおりである。

	中央の壺 (1)	東側の壺 (2)
総高	22.5	24.9
頸部高	3.5	4.1
最大径部高	14.3	15.8
口径	10.9	12.1
頸径	9.2	10.5
最大径	17.5	21.0
底径	7.4	7.7

(石川正之助氏計測)

(1)の壺は(2)に比較しやや小型であるが、全体が直線的構成で、折り返し口縁の手法もシャープであり、焼きしめもよい。感覚的にしまりのある硬い感じがする。肩の部分には、梨地状に淡黄土色の釉が付着し、胴部はうす暗紫色、胴下部にはうす茶色を呈する部分もある。また、胴部の肌は荒れ気味で亀裂が多少見られる。壺内側を見ると輪積の痕跡が認められる。

(2)の壺は、(1)の壺に比較しシャープな感じがうすれ、ややぶい感じがある。肩部には二本の沈線があり、その間にヘラでつけられた凹型の記号のようなものが見える。胴部は凸凹が多く、胴下部には板のようなもので面押しをした痕跡がある。色は全体にうす暗紫色であり、肩の部分には灰白色の細い斑点が見える。

### 第十三節 史 料

#### 関東幕注文

関東管領上杉氏は勢力を弱めながらも依然として上野国に勢力を残している。上杉氏は上杉政虎(のちに謙信)となり、上野国の武將を服属させ、その陣に参加したものに陣幕の届出をさせている。各陣営に張る幕で家紋を入れさせているものである。関係の地を示すと次の如くである。

#### 関東幕注文 上州

白井衆

長尾孫四郎 九ともへにほひすそこ

外山民部少輔 きぎやう

大森兵庫助 三かしわ

神保兵庫助 立ニ二引きやう

高山々城守 にほひかたくろ

総社衆

安中 わうふの丸すそこ

小幡三河守 団の内六竹

多比良 二ひきりやうすそこ

大願弥六郎 うちへの内切竹にほうわら

萩原 丸の内の上文字

高庭 二ひきりやうすそこ

高庭 瓜及もんすそこ

瀬下 三ひきりやう

赤城神社(勢多郡宮城村三夜沢)文書

○由良成繁制札

制札

右於大胡領三夜沢、

濫妨狼藉停止之

事。若違犯之變、可

小串 一引きやう

神谷 いほりの内の十方

多胡 二ひきりやう

諏方 かちのは

寛符 藤の丸に根籠

勾部 うりのもん

反町 うちわの内ニきり竹にほうわら

柳瀬 うり糞もん

長尾能登守殿 九ともへにほひすそこ

取橋衆

長野藤九郎 槍原

同 彦七良 同紋

大胡 かたはみに千鳥すそこ

引田伊勢守 かふ竹の丸之内につふ梅五シ

処罪科之状、如件

永祿九年

拾月十二日 成繁(花押)

(注) 1 大胡領とある。大胡城主支配の地。

2 成繁は由良成繁であろう。太田金山城主・横瀬國繁

の子。

3 永祿九年は丙寅。一五六六年。

○北条高広書状

三夜沢上某奉

加帳之事、奉仰

神慮之間、大胡郷

中心落し勧進

不可有相違候。無疑

觀之尤候。仍如件。

天正五年九月十六日

高広(花押)

三夜沢

神主宮内少輔殿

(注) 1 大胡郷、大胡町を中心とした桂登、木瀬地区に及ぶ

地域。

2 天正五年丁丑。一五七七年。

○大胡高繁書状

伊勢房為祈念

永栗杉買文令

第二章 中 世

進納候。殊宮中

社人衆知行公

事以下万事

如前々紀伊守父子

任置候。亦被抽舟誠

尤候。仍如件。

大胡常陸守

天正十年九月

高繁(花押)

三夜沢

神主紀伊守殿

(注) 1 大胡常陸守とあるが介と混用している。介である。

2 天正十年壬午。一五八二年

○大胡高繁書状

三夜沢宮中佗言之筋目附而、

守護不入之事、任旧規不可有

相違。弥以武運長久、子孫繁昌

之祈念可致精誠者也。仍

如件

常陸介

天正十三年

高繁(花押)

二二九

七月九日  
奈良原紀伊守殿

(注) 天正十三年乙酉、一五八五年。

○大胡高繁書状

有立願之旨、柏倉之内  
九貫文之地為新寄  
進奉進納候。弥武運  
長久、子孫繁榮、当  
城安全之所、被抽丹精  
御祈祷成就所仰候。  
仍状如件。

天正十三年丙戌 大胡常陸守

八月吉日 高繁(花押)

三夜沢

神主紀伊守殿

(注) 天正十三年は乙丑、丙戌は十四年。

○豊臣秀吉禁制

禁制 大胡領

一軍勢甲乙人等乱妨狼藉事

一放火之事

一对地下人百姓非分之儀申懸事

右条々堅令停止了若於違犯之

輩者、速可被処断科者也

天正十八年卯月 日

奉之

天徳寺

(注) 天徳寺は下野佐野氏の房綱が仏門に入って天徳寺了伯と称した。

○牧野忠成書状

赤城山三夜沢宮中之儀、

如先規、不入不可有相違候。

殊武運長久、子孫為

繁榮、五給貫文之神領

付置候上者、毎日於神前祈

念不可有油断者也。仍如件。

慶長十八年癸丑

二月二四日 牧野駿河守

奈良原出雲守殿

忠成（花押）

善昌寺（勢多郡新里村新川）文書

○三夜沢柏倉所領安堵状

三夜沢柏倉所領、兩方共ニ応昌寺へ相渡申候。其上万端之仕置、如前々候守護不入之儀、可為尤候。此上、從御祈念外無沙汰不可存候。恐々謹言。

元龜三年十月二六日

高広（花押）

応昌寺

法然上人行狀繪圖第二十五

上野國の御家人。大胡の小四郎隆義。在京のとき吉木の禪室に參じて。上人の勸化にあづかり。ふかく念仏を信受しけるが。下國の候なお不審なる事侍て。上人給仕の弟子。渋谷の七郎入道道通がもとへ。尋ね申たりけるを。道通上人に申込て。仰をつたへて。三心以下の事こまかに申つかはしけり。隆義が子息。大胡の太郎実秀。かの消息を相伝し。父のあとををいて。称名の行をこたりなかりけるが。念仏の安心不審なる事侍て。小屋原の蓮性を使者として。上人に尋ね申したりければ。真觀房を執筆として。書をつかはされける状云。御文こまかに承候ぬ。はるかなる程に。念仏のときこしめさんがために。懇と使をのぼせ給て候。御念仏の志の程。返

(注) 牧野駿河守忠成は牧野康成の子。大胡領二万石を領す。

御同宿中

(注) 1 三夜沢、宮城村大字三夜沢、赤城神社鎮座

2 柏倉、宮城村大字柏倉

3 応昌寺、大胡町大字河原浜字西浦にある天台宗寺院。

4 高広、北条丹後守高広。

5 元龜三年壬申。一五七二年。

々も哀に候。さては尋仰られ候念仏の事は。往生極楽のためには。いづれの行といふとも。念仏にすぎたる事は候はぬなり。そのゆへは。念仏はこれ弥陀の本願の行なるがゆへなり。本願と云は。阿彌陀仏の。いまだ仏にならせ給はざりし昔。法藏菩薩と申ししいにしへ。仏の国土をきよめ。衆生を成就せんがために。世自在王如来と申仏の御前にして四十八願を。おこし申し其の中に。一切衆生の往生のために一の願をおこし給へり。これを念仏性生の本願と申也。則無量壽經の上巻にいはいく。設我得仏。十方衆生。至心信樂。欲生我國。乃至十念。若不生者。不取正覺。已上。善導和尚。この願を釈しての給はく。若我成仏。十方衆生。稱我名号。下至十

声 若不生者 不取正覚 彼仏今現 在世成仏 当知本誓  
重願不虛 衆生称念 必得性生 <sup>上</sup> <sub>巳</sub>

念仏といふは、仏の法身を憶念するにもあらず、仏の相好を  
観念するにもあらず、ただ心をいたして、もはら阿弥陀仏の  
名号を称念する。これを念仏とは申なり。故に称我名号とい  
ふなり。念仏の外の一切の行は、これ弥陀の本願にあらざる  
が故に、たとひ目出たき行なりといへども、念仏にはよば  
ざるなり。大方其の國にむまれんと、おもんものは、その  
仏のちかひに随ふべきなり。されば弥陀の浄土にむまれんと  
おもんものは、弥陀の誓願にしたがうべきなり。本願の念  
仏と、本願にあらざる餘行と、さらにくらぶべからず。故に  
往生極楽のためには、念仏の行に過たるは候はずと申也。性  
生にあらざるみちには、餘行又つかさどるかたあり。しかる  
に衆生の生死をはなるよみち、仏のおしへ、さまざまにおほ  
く候へども、このごろの人の生死をはなれ、三界をいづる道  
は、ただ極楽に往生し候ばかりなり。このむね聖教の大なる  
ことはりなり。

次に極楽に往生するに、その行やうやうにおほく候へども、  
我等が往生せん事、念仏にあらずば、かなひがたく候なり。  
そのゆへは、念仏は仏の本願なるがゆへに、願力にすがりて  
往生する事は、やすし。されば、證ずるところ、極楽にあら  
ずば生死をはなるべからず。念仏にあらずば、極楽へむまる  
べからざるものなり。ふかくこの旨を信ぜさせ給て、一すじ

に極楽をねがい、一すじに念仏して、此度必ず生死をはな  
れんと、おぼしめすべきなり。又一一の願のおほりに、もし  
しからずば、正覚をとらじと、ちかひたまえり。しかるに阿  
弥陀仏、ほとけになり給てよりこのかた、すでに十劫をへた  
まへり。まさにしるべし誓願むなしからず。しかれば衆生の  
称念するもの。一人もむなしからず、往生することを得。も  
ししからずば、たれか仏になり給へる事を信すべき。三宝滅  
尽の時なりといへども、一念すればなほ性生す。五逆深重の人  
なりといへども、十念すれば性生す。何況や三宝の世に生れ  
て、五逆をつくらざる我等、弥陀の名号を唱へんに、性生う  
たがふべからず。今此願にあへる事は、実にこれおぼろげの  
縁にあらず。よくよくおぼしめすべし。たとひ又あ  
ふといへども、もし信ぜざれば、あはざるがごとし。いまふ  
かく此願を信ぜさせたまへり。性生うたがひ思食べからず。  
必々二心なく、よくよく御念仏候て、此度生死をはなれ、極  
楽に生れさせ給べし。又観無量壽經には、一一光明、遍  
照十方世界、念仏衆生攝取不捨 <sup>上</sup> <sub>巳</sub>、これは光明ただ念仏  
の衆生を照し、余の一切の行人をばてらさずといふなり。但  
し余の行をしても、極楽をねがはば、仏光てらして攝取し給  
うべし。いかがただ念仏のものばかりをえらびて、てらした  
まへるや、善導和尚釈してのたまはく、弥陀身色如金山、相  
好光明照十方、唯有念仏蒙先撰、当知本願最為強 <sup>上</sup> <sub>巳</sub>、念  
仏はこれ弥陀の本願の行なるがゆへに、成仏の光明かへりて

本地の誓願をてらしたまふなり。余行はこれ本願にあらざるがゆへに、弥陀の光明さらひててらしたまはざるなり。今極楽をもとめん人は、本願の念仏を行じて、撰取の光にてらされむと思ふべし。これにつけても念仏大切に候よく／＼申させ給へし。又釈迦如来この経の中に、定散のよろ／＼の行を説きはりて後に、まさしく阿難に付属したまふときは、上に説ところの散善の三福業、定善の十三観をば付属せずして、ただ念仏の一行を付属したまへり。経には、仏告阿難、汝好持是語、持是語者、即是持無量壽仏名、<sup>上</sup>善導和尚この文を釈してのたまはく、從仏、告阿難、汝好持是語、<sup>下</sup>正明、付、願、弥陀名号、流、通於源代、上來雖説定散兩門之益、望、仏本願、意、在、衆生一向專修、弥陀仏名、<sup>上</sup>此定散の諸の行は、弥陀の本願にあらざるが故に、釈迦如来の往生の行を付属し給に、余の定善散善をば付属せずして、念仏はこれ弥陀の本願なるがゆへに、まさしくえらびて、本願の行を付属し給へるなり。いま釈迦のおしへに隨て往生をもとむるもの、付属の念仏を修して、釈迦の御心にならふべし。これにつけても、又よく／＼御念仏候て、仏に付属にかなはせ給ふべし。又六万恆沙の諸仏舌をのべて、三千世界におほいて、もはらただ弥陀の名号を唱えて往生すといふは、これ真實也と証誠したまふなり。これ又念仏は弥陀の本願なるがゆへに、六万恆沙の諸仏、これを証誠し給う余の行は本願にあらざるがゆへに、六万恆沙の諸仏、証誠したまはず、これに

つけても、よく／＼御念仏候て、弥陀の本願、釈迦の付属、六方の諸仏の護念をふかくかりぶらせたまふべし。弥陀の本願、釈迦の付属、六方の諸仏の護念、一一にむなしからず。このゆえに念仏の行は、諸行にすぐれたるなり。又善導和尚は、弥陀の化身なり、浄土の祖師多しといへども、ただ偏に善導による。往生の行多しといへども、大いにおかちて二としまへり。一には專修、いはゆる念仏なり、二には雜修、いはゆる一切のよろ／＼の行なり。上にいう所の定散等これなり。往生禮讚云、若能如、上念々相續、畢命為、期者、十即往生、百即往生、<sup>上</sup>專修と雜修との得失なり。得というは往生する事をう。いはく念仏をするものは、十はすなはち十人ながら往生し、百はすなはち百人ながら往生すというこれなり。失というは、いはく往生の益をうしなへるなり。雜行のものは、百人が中にまれに一二人往生する事を得て、そのほかは生せず。千人が中に、まれに三五人むまれて、その余は、むまれず。專修のものはみなむまるる事をうるはなにのゆえぞ。阿弥陀仏の本願に相應せるがゆへなり。釈迦如来のをしへに隨順せるが故なり。雜行のものは、むまるる事すくなきはなへのゆへぞ。弥陀の本願にたがへるゆえなり。釈迦のおしえにしたがわざるゆへなり。念仏して、浄土をもとむるものは、二尊の御心にふかくかなへり。雜修をして、浄土をもとむるものは、二仏の御心にそむけり。善導和尚二尊の得失を判せる事これのみならず。親経の疏と申すふみの中

におほく得失をあげたり。しげきがゆへにいださず。これをもてしるべし。おほよそ此念仏は、そしれるものは地獄に墮て五劫苦をうくる事はまりなし。信ずる者は淨土にむまれて永劫の業をうくる事はまりなしなをいよく、信心をふかくして、二心なく念仏させたまふべし。くはしき事御ふみにつくしがたく候。この御つかい申候べし。正月二十

## 平治物語 卷第一

(源氏勢汰への事)

信頼御夢にも是をは知給はず。小袖に白袴きて、冠にこしかみ入、天子出御の振舞をし、酔狂のあまりに、上闕女房達よびよせ、「こゝまされ、かしこうて。」などいひてふしたりけり。

廿七日早旦に、越後中将参内して、「行幸は六波羅へ、御幸は仁和寺へと承はいかに。」と申ければ、「信頼卿、「よもさは候はじ。経宗・准方に申含て候物を。」との給へば、成親、「其人共のはからひとこそ承候へ。」と申されければ、「さもや候らん。」とて、がはと起はしりめぐりみまいらせられけれども、主上もわたらせ給はず、上皇もみえさせ給はず、別当もなし、新大納言も見えず。「こはいかに。此者共にたばかりけり。」と、運法などの付たるやうに、をどり上りく、念られられ共、ふとりせめたる大のおとこにて、板敷のみぞひどきける。をどり出したる事もなく、「此事披露候な。」との

八日 源空 巳上

実秀この消息を悉敬頂戴して、一向に念仏す。寛元四年性生の時、異香をかぎ、音楽をきくものおほかりき。実秀が妻室。又ふかく此消息のをしへを信受して、称名の行をこたりにくつるに奇蹟をあらはし。性生の素懐をとげけるとなん

給ひけるは、無下にいひ申せなくぞ覚えける。

悪源太義平、賀茂へ詣けるが、此由を聞、馳矯、義朝に申ける。「行幸は六波羅へ、御幸は仁和寺へと承候は何とか聞召候。」と申されければ、「義朝もかやうに聞つれとも、信頼もいまだかくとも知せず、さればとて源氏のならひに心替あるべからず。こもる勢を記せや。」とて、内裏の勢をぞ記しける。大將軍には、悪右衛門督信頼、子息新侍從信親、信頼の舎弟民部権少輔基頼、弟の尾張少将信時、兵部権大輔家頼、其外伏見源中納言師仲、越後中将成親、治部卿兼通、伊予前司信貞、壹岐守貞知、但馬守有房、兵庫頭頼政、出雲前司光泰、伊賀守光基、河内守末真、子息左衛門尉末盛、左馬頭義朝、子鎌倉悪源太義平、二男中宮大夫進朝長、(三男)右兵衛佐頼朝、義朝の伯父陸奥六郎義高、義朝の弟新宮十郎義盛、従子佐渡式部大夫重茂、平賀四郎義宣、郎等には、鎌田兵衛政清、後藤兵衛真基、近江国には佐々木源三秀能、尾張国に